『僕は行かないの。少くとも役割の中へは入らないんだ。』

『さうかい！　矢張りお父さんがさういふの？』

『あゝ止められたの。』

答へるラルフの聲は話題が不愉快である事を語つてゐた。この時スケートを穿き終へたグレナリンは直ぐと話を止めにした。そしてラルフにスケーティングの競走を挑んだ。

競走に氣が立つて来て、氷の上を樣々に走つてゐる間に時は忽ち過ぎて行つた。そして彼らはやがて心から笑ひ合ひ話し合つた。然うしてゐる間、退校して家に歸つて以來一度も徹底的に活潑なゲームをした事のなかつたラルフは全く父の言付を忘れてゐた。それからクリスティはラルフの樂しさうなのを見て、また、兄はわざとは決して父の命令に背くまいと努めてゐることを知つてゐるので、つひ兄に注意をしかねたのである。後になつて何故注意をしなかつたかと殘念で堪らないのであつた。——遊びの眞最中にクリスティは其處から餘り遠くない丘の上で、馬上の人影が彼等を見下してゐたのをちらと見て、それが父の姿だと覺つたのである。その時ラルフは、グレナリンとならんで全速力で滑走してゐたので、そのクリスティをびつくりさせた人影はしなかつたが、クリスティはラルフの傍を走り過ぎながら囁いた。

『御覽なさい、あれを！』

ラルフは四邊を見廻したが、餘りの突然と激しい驚きとに身體の中心を失つて氷上に打倒れた。ひどく倒れたので氷に大きな星の樣な罅ができた。グレナリンの手に援けられて靜かに起き上つた時、幸に怪我は無かつたが、顏は死んだ樣に靑くなつて、激しく身が慄へた。

『おや如何したの？』

とグレナリンは彼の顏色に見える突然の恐怖に驚かされて問うた。

『お父さまだよ！』

ラルフは面を伏せたまゝ彼方を指した。

『誰も居ないぢあないの？』

『もう行つてしまつたんです。』

とクリスティが答へた。

『僕を見つからうかねえクリスティ？』

ラルフは心配に尋ねた。

『心配し給ふなラルフ君、僕が惡かつたんだよ。みんな。僕君の家へ行つてダグラスさんに譯を話

さう。僕は何て不幸な男だらう。僕は絶えず他人を苦しい目に合はせて、自分でも苦しんでるんだ。僕が來なけりやよかつたんだに。』

『もうそんな事を考へるのは止し給へ。けれど、もう僕等は歸つた方がいゝと思ふから。さようなら。君を遠離ける樣にしなけりやならないかも知れないが惡く思はないでね。お父さまが爲ろといふなら爲ない譯には行かないんだからね。』

『あゝ、でも君もう一寸と待つてて呉れ給へな。君に話したい事が澤山あるんだから。僕は本當にほんとに不幸だ！』

『君が不幸！　なぜ？　僕には君こそ誰よりも仕合せな生活をしてるると平常思つてるに。』

『全く表面だけなんだ君。——クリスティ君、ほんの二三分待つて呉れない？　長くはかゝらないからね。』

二人は池の端へ腰を下した。スケートの靴を脫ぎながらグレナリンは最近に陷つた難儀について話し始めた。實際悉くを打明けて語つたが、唯一つ、特に大きな罪だけは打明けなかつた。それさへも話してしまひたいと思つたのだが、遂に出來なかつた。話す勇氣がなかつたのだ。彼の唇が話すことを拒んだのだ。それは重い荷となつて殘つた。彼にはその荷を胸の中から轉し出す事が出來なかつた。たゞやつとまだこの背後にもつと惡い事があるんだといふ事を仄かし得ただけであつた。

ラルフは氣の毒氣に、同情深く聽き取つた。そして最後にマーテンが言つたのと全く同じ忠告をした。卽ち「すべてを父に打明けよ、その上で父の許を乞へ」と。

『どうもさう出來ないんだ。』

とグレナリンは慄へながらいつた。打明けて話した事でなく、未だ語らずに殘してあることを思ひながら。

『君が僕の地位にあつたら出來る？』

『僕にしても迚も出來ないだらうがねえ、きつと。』

ラルフは自身の毎日の苦みを思ひ出しながら言つた。

『けれども君のお父さんが何時も君にやさしくする樣な、あゝいふ優しい人になら僕は思ひ切つて話せると思ふ。』

『本當に僕の父はやさしかつたよ、大抵は。やさし過ぎた、親切すぎたんだ。も少し嚴格にして呉れてゐたら僕はもつといゝ子供になつてゐたゞらう。あゝラルフ君、僕は如何したらいゝんだらう！　ねえ君、お願ひだからね、もし僕が君のところへ助けて貰ひに來たら君きつと助けるつて約束し

て呉れ給へ。』

『それぁ進んで――喜んでするよ、出來るだけね。でも僕の樣なものが如何して君を助ける事が出來るだらうか？　僕は僕自身を救ふ力さへあんまり無さすぎると思つてるだ。』

グレナリンは涙を浮べて、

『あゝ、僕は如何して斯うんだらう。僕にかゝり合ふものは皆困つたり悲んだりするんだもの。』

『あゝ君、そんなことは思はないで呉れ給へ。何にもならないぢやないか。もう會へないと思ふとほんとに殘念だが、君はもう僕を失敬な奴だとも同情の無い男だとも思はないだらうね？　その中にまた會へる樣になると思ふよ。ぢや君、幸福で暮し給へ、さよなら。』

二人は互に手を握り合つた。悲を抱いて默したまゝ別れて各々家路へ就いた。彼等の胸は愁と不安とで重苦しかつた。

ラルフは家に着くや、心配を面に表して父の出先を聞いた。そして長官（マジストレート）の會合があつて行つたことゝ、夜の九時頃にならなければ歸らないことを知つた。

一方ダグラス氏は怒に燃える心を抱いて長官會へ馬を進めたのである。その日の會ではどんな問題にも落着いた意見を述べることは出來なかつた。それのみかあの池での場面を見つめてから夜になつて家に歸るまで、絶えずダグラス氏の心の中にはあれほど嚴しく禁じて置いたのをラルフが背いたといふ考がひつかゝつて離れなかつた。

家に歸るや故意と妻にも會はずに直ちに書齋へ入つた。そして怒を冷すのを恐れてゝいな冷す機會を與へまいとするものの樣に、彼はベルを鳴した。そして話があるからラルフに來るやうに言へと下男に命じた。

ラルフは平常の樣に母や弟と一しよに集つて二人に本を讀み聞かせてゐた。二人は今朝の出來事を母に話してゐたから三人は同じ樣に不安に滿たされてゐるのである。

知らせを受けた時、ラルフは失望はしたが權式を失はなかつた。彼は立上つて母の手を握り腰を屈めて接吻した。そして靜に父の書齋へ行つた。

父は椅子を指して掛けよといつた。ラルフは掛けた。そして殆ど無意識に腕を拱いた。父の抑へられてゐた怒はすぐ爆發した。

『ふん、お前はそれが父の命令を背いた子に適當した態度だと思つとるのだね。なんだ、あのドネリルの若いのに數はつたのだらう、そんな芝居じみた眞似を――なるほど立派だ！』

二語一語に皮肉を、一擧一動にさげすみを見せて父はラルフの樣を眞似るのであつた。

ラルフは失望して沈默してゐた。

『どうしたのだ！　返事もせんで……。聞えんのか。』

彼は最後の言葉を雷の樣な聲で呶鳴つた。

ラルフは驚いていつた。

『何です！　お父さま。』

『何です！』と叫ぶ樣にいつて、『お前は聞えん風をする積りか？　何も言ふ事は無いといふのか？』

『グレナリン君と話をした事について仰るんでせうが……』

『グレナリン君と話をしたことについて言つてるんでせうよ。』

と父は鼻先で應答ふ樣に言つた。

『お父さま、僕は本當に彼を避けようとしたんです。しかし……』

『成程避けてゐるやうに見えた。私が見た時は如何にも狎々しくくつ付き合つて、これ見よがしに騷ぎまはつてゐたがね、ラルフ、もうお前のいふことは信じないよ。如何してもお前のいふことは信じられん。』

不當の咎立を受けてむらむらつと憤を感じたラルフは頭を上げた。

『有難うございます。お父さま、あなたは今までだつて僕の言葉を信じて下さつたことはないぢやありませんか。でも世間の人は誰だつて信じて呉れますよ。』

『これ、私に向つてそんな氣取つた風をするのは止せ。あゝ神樣がお前をクリスティの樣にして下さることを祈る……。よろしい。まだ何かいひたいことはないか？』

『申上げたつて何にもならないぢやありませんか。あなたは何にも聽いて下さらないんでせう。あなたはあんまりです――不親切です。』

『もう一度言つて見ろ！　言へるなら！』

『あなたは私に對してあんまりです――不親切なんです。』

燃ゆる瞳を父に注いでラルフは悠り繰返した。

ダグラス氏の顏には見る〳〵怒の色が動いた。そして少しの間怒と戰つてゐたが漸く我と我が心を抑へてた〻次の樣に言つた。

『よし、もう口でいふことはない、手を下すだけだ。ラルフ、懲して呉れる、立て！』

『何のためか知らせてやらう。だが貴樣はもう知つとる筈だ。私はな、自分の子供を氣儘勝手に大

ぴらに親に逆ふ樣にはさせて置かんのだ——當分のところは。さあ立て！』

『お父さま！　待つて下さい！』

といふラルフの聲は哀感を誘ふ強い訴へであつた。

『命令に背く前に何故待つて下さいといふ氣にならなかつたのだ。』

『何も打たれるのが恐くていふんぢやありません。』

『そんなことは如何でもいゝ。兎も角も立て！』

ラルフは立ち上つた。今や父の怒は全く深くなつて、重みある鞭でラルフの背から肩にかけて續け樣に亂打した。而もラルフは默したまゝ苦みの聲も出さず、ひるみも屈みもしなかつた。唯一度頭を起し、腕を上げて鞭を握り、前の樣な悲しい調子で「お父さま待つて下さい！」と言つたが、それは唯、今の怒を增したに過ぎなかつた。

この時ダグラス夫人が來なかつたらどんな事が續いて起つたであらうか。夫人は斷りなしに他の室に入る事を禁じてある家の掟などは全く忘れてドアを明けるとクリステイを伴れて入つて來た。

『まああなた！　もう止めて下さいませ。ラルフはもう十分罰を受けました。』

他の場合ならばかういふ干渉に遇へばいよ〳〵激怒して手がつけられなくなるのが父の癖だつた。が、ラルフが少しも逆はないので怒が自然と消えて來た上、彼の心中の懊惱が顏に現れてゐるのを見て心を動かし、遂に後悔してきた。彼はまた夫人の態度といひ、聲といひ容易ならぬ決心から發してゐると見て取つた。更にまたクリステイさへ、恐さと悲しさとを混じた表情に、咎める樣に父の顏をみてゐるのを知つた。

『行け！　今の所はこれだけにしてやらう！』

クリステイはもう兄の傍に居た。で、彼と母とは靜にラルフを伴れて出て行つた。後に殘つた父は己が仕打を顧みて面白からぬ思に惱んだのである。

ラルフは應接間へ伴れられた。そして二人の間にはさまつてソファに腰を下すと、兩手で頭を支へたり、折々は母の肩に倚りかけた。罰せられる間は痛さを堪へて音も立てなかつたが、今彼は悲しけに歎り泣いた、——絶間なく、胸が破れでもするやうに。

悲しい辛いシーンであつた。この場を長く續かせるべきではないと考へた夫人は、ベルを鳴してサバーを命じた。食物はやがて運ばれたけれども誰も手をつけるものは無かつたので、いつそ子供のためには寢床に入つてこの悲を眠で消した方がいゝと思ひついた。けれどもラルフは暫くためつた後でなければお休みなさいといふことが出來なかつた。

彼には母の抱擁を振り切つて去る決心がつかないかの様であつた。母の胸は彼に同情の餘り血の出る思がした。そして彼女は最後の接吻を與へて首にまつはる彼の手を解いた時に見た彼の顔の窶を、何時までも忘れることが出來なかつた。

ラルフはクリスティと階段を上つて行つた。

そしていよ〳〵二人切りになると、彼はまた新しい淚の頻りに湧くのを堪へられなかつた。だが、誰にも出來ないほどクリスティはよく慰めてくれた。心持よく話をしかけた。着物を脫ぐのを手傳つた。それからまた、彼の背中の鞭のあとを優しい手つきで冷してくれた。その夜、跪いて長々と祈禱を上げる弟を見た時、ラルフはあゝ弟は彼がこの世で最も深く愛する兄のために心を注いで神に祈つて呉れるのだ、と思はずにはゐられなかつた。

あゝ！　彼はかうした祈禱を捧げられる必要があつたのだ！

二十

ラルフはたうとう最後に家出——その結果は恥と不幸より他に何も齎さない家出——をしようと決心したのである。

二時に一寸前であつた。彼は起き上つた。そして音を立てぬ様に着物をつけた。美しい澄んだ夜であつた。月が弟の寢臺に一杯に光を浴せてゐた。彼は着物を着ると、弟の顔をしばらくの間熱心に見つめた。彼は何よりも弟を起したかつた。起して別を告げたかつた。そして自分の目的を打明けたかつた。彼を宥めて淚を靜めてやりたいと希つた。併しそれをすることは出來なかつた。彼はたゞいとし氣に顔を見つめ、聞えないやうな小さな聲で左樣ならと呟くより外はなかつた。

今は冴え渡つた明るい夜だけれども、宵のうちに降つた雪が澤山積つてゐた。そろ〳〵と、少しも音を立てずに彼は窓を明けた。其邊は地面からいくらも離れてはゐなかつた。彼は窓の仕切を握つて外に出て、ひらりと雪の中へ落ちた。

ロンドン行の郵便列車が夜の二時半に發車するのにアルトンに止つてゐるのを知つてゐたので、彼はそれに乘つてロンドンへ行かうとアルトンへ向つた。

時間に間にあふ樣に急いで歩かねばならなかつた。で、しまひには氣味惡くぼうつと明るい、深く靜まり返つて寂寞とした路を、歩くといふよりむしろ走つて行くので、彼は屢自分の足音の明瞭した反響を、誰れか後を蹤けて來るかと驚いたり、自分の黒い影が壁や垣にちらと躍るのを、誰かが自分を捕へるために待伏してゐたかとハツとしたりした。

かうして急ぎに急いで、漸くステーションの近くまできた。併し若し彼が切符を求めれば驛員が彼だといふことを認めるに違ない。而も赤帽たちはみんな彼の顔を知つてゐるのだからと氣が付いた。だから切符なしで見つけられないで列車の中へ入込める樣な工夫を考へねばならなかつた。さうするために彼はとある小さな木橋を渡つて線路を越え、出來るだけ靜かに堤に添つて歩いた。そしてプラットホームの端に極く近い若木の植込に身を忍ばした。

汽車は遲れた。その僅の時間が彼には堪らなく長く思はれた。柊の木蔭に屈んで寒さに手足をぶる〳〵させてゐたが、遂に汽車の近付いてくる轟々といふ音響にハツと我に歸つた。赤い大きな光が遠くに見え出して、その深紅の閃光を線路の遠くまで投げつゝ進んでくるのを見ると、彼は突然線路に身を躍らしてすべての不幸を一度に片付けてしまはうといふ誘惑に捕へられた。しかし、熱心に救の祈禱を捧げてこの激しい衝動を抑へて汽車の止るのを待つた。一ばん後の車が彼のすぐ傍に止つたので、彼は敏捷くその後をこつそり廻つて、二等室の前へ出るとそれは空だつたのでその踏段へ攀ぢ上つた。そして汽車が再び動き出すと直ぐ窓から中へ入つてしまつた。

それは實に哀れなものであつた。彼は外套を持つてゐなかつたので、手も足も殆ど感覺を失ひ、齒がガチガチと慄へるほど寒かつた。

彼は今後の計劃をまだ少しもまとめてゐなかつた。彼の逃亡は餘りに突然であり、あわただしかつた。唯一つの目的はロンドンに着いて無數の人間の混雜の中へ身をかくしてしまふ事であつた。何か生活の方法を見つけ出さねばならないといふ心配はちつとも起つて來なかつた。

汽車がロンドンに着いた時は、ほの明るく灰色に夜の明ける頃であつた。ラルフが賃金をちやんと用意して差出したので、改札掛は彼が急いだために切符なしで乘込んだのだといつた口實を怪しいと思はなかつた。

かくて彼はロンドンの街へと出て行つた——殆ど一錢ももたず一人のちかづきも友だちもなく家もなく何の計劃もなく、たゞ一つ希望だけをもつて。

彼は第一に幾ら金を持つてゐるかを見た。そしてほんの二三志（約わが五十錢）しかないのに氣がつくと少し失望した。汽車旅行が財布を殆ど空にしてしまつたのだ。汽車賃は拂はないでも脫れら

れたかも知れないが、彼の心にはそんな考は瞬間と雖も起らなかつた。何をしようとも正直にといふのが彼の第一の心がけであつた。

朝食の必要を感じたのでとあるパン屋へ寄つて一片のパンを買つた。そしてお茶を一杯貰へまいかと店の婦人に乞うた。が、

『私方は飲食店では御座いません。』

とそつけなく答へられた。併し間もなく彼の落膽した顔色に動かされたと見えて、彼女は默つて奥へ急いで入つたが、一杯の茶をもつて現れた。彼は感謝してそれを飲み、金を拂つてさて何か働く口を探さうと出かけた。

生活費を得るに最も明かな手段は商店に雇はれることだと思つたので、彼は徒弟入用とか小僧入用とかいふ廣告はすべて見逃すまいと探し歩いた。さうした廣告さへ見れば必ずその店に入つて申込んだが、大抵の家では彼を驚いてぢつと見るだけだつた。ラルフは誰の眼にも卑しからぬ風采であつた。その上、家を出るのに平常家で着てゐる着物で來たので、彼の申込はその服裝や態度と不釣合であつた。返答は隨分區々だつたが、併し何處の店でも頗る明瞭な拒絶の挨拶であつた。彼に申込まれた大抵の店ではすぐに彼の本當の境遇を推察したので、家を逃け出して來たものゝ恐らくは一週間もたゝぬうちに歸るか伴れ戻されるものにかゝはることは嫌つた。それ故、彼に向つて質問する勞を取つた者さへ殆ど無かつた。あつても彼が住所も言はず身元引受人もないのを知るとすぐ破談になつてしまつた。

或るかなりの店へ申込んだ時は、その店主と話し合ふことになつたので、主人は彼の容貌や態度に驚いて、如何にも親切に話しかけた。二言三言の質問で彼にはラルフの地位が讀めた。で、ラルフの肩に手をかけて同情をもつて併し眞面目に言つた。

『分りました。よく分りました。何かの事からあなたは家出をなさいましたな。まあどうぞ私の言ふことをお聽き下さい。あなた、家へお歸んなさいまし。あなたはバイブルをお讀みになりましたでせうか、これ、この一節をお勸め致しますよ。——彼は立ちて父のもとに歸れり——。人間は義務のある所から逃げ出しても何にもなりません、本當に。』

ラルフは嘗てヘンリー・アラビイ氏がこれと同じ節に、今ポケットに入れて持つてゐるギリシヤ文字の聖書の中で標をつけて呉れたのを思ひ出した。併し、彼はたゞ悲しげにかう答へるのであつた。

『では使つて下さらないのですか、何か仕事をさせては下さらないのですか？』

『どうもそりや出來ません。かうしたらどうでせう。若しあなたがお困りになる事情を話して下さるなら私が出來るだけお爲になつて上げませう。お家へ手紙を差上げてお歸りになり易い樣にして上げても宜しうございます。お金が何程か御入用なら喜んで御用立しませうし、若し御兩親からのお便りがあるまでいらつしやる所が無ければ私が都合をつけませう。惡い事は申しません、さうなさいまし。』

ラルフは何も言はずに頭を振つただけであつた。彼の如何しても家へ歸らぬといふ決心はまだ中に堅くて動かなかつた。どんな事でも家へ歸るよりは增しだと思はれた。

斯樣にして幾度も幾度も熱心に職を求めようと力めた後——希望を抱いて始め、時のたつにつれていよ〳〵深い失望の狀態に落ちてゆく努力の後——ラルフは空腹を覺えた。そしてもう食事の時間に十分なつてゐるに違ひないと思つた。彼は時計を探した、無い！　短い鎖をつけ、その鎖はチョッキのボタンの孔を潛らしてそれを黃金の鍵で留めてあつたのだ。彼が方々を步きまはつて其處此處のウインドウをのぞいてゐる間に、捷い掏摸が機會をねらつて盜み取つてしまつたのだ。リージェント街で誰かゞ荒々しく突き當つたのを思ひ出したが、その時は大勢の通行人があつたので、一向それを氣に止めなかつた。確かにあの時に時計は掏られたに違ひなかつた。兎に角もう取返しのつかぬ

ほど時間は過ぎてゐる。

彼はデイナーとして腸詰を二本買つた。それから自分の服裝が求職の邪魔になるのだと考へたので、もつと粗末な仕事着と換へようと決心した。それは難しいことはなかつた。メッサズ・アイザツリ會社の古着藏へ行つて忽ち取換へることが出來た。立派な、仕立のいゝ服と、粗末なジヤケツとチヨッキと厚綿布の洋袴とを取換へるのはその店では決して苦いことには思はなかつたから。ラルフは變裝してしまふと幾分氣輕さを覺えた。何故なら、前には若しや舊い學友か知人に話し掛けられる事もあらうかと絕えず恐れてゐたのだが、もう誰にも氣付かれる心配はあるまいと思つたから。

彼は疲れながらも再び職を求めて步いたが、午前中の樣に何らの甲斐もなかつた。かくて寒い暗い夜が泥に汚れたみぢめな街を襲つてきた頃、彼は足を痛め、身も心も弱り果てゝ止めてしまつた。

廉いからと思つて彼は下等な小さい居酒屋を宿に選んだ。如何に廉からうと、そこは實に不潔でその上夜半をすつと過ぎるまで階下で醉人の歌聲や底拔け騷ぎが絕えず續いてゐて眠れなかつた。翌朝、金を拂つた時に見るともう一志しか殘つてゐなかつた。

二日目も全く同じ樣な經驗を繰返すにすぎなかつた。それで流石に若い望みに燃えてゐたラルフ

も、未だ午後にならないうちに、もう殆ど絶望の様に感じた。彼の前には最早正直で通れる路は一つも残されるない様に思はれた。

彼が持ちかけられた只一つの口は不正なものだつた。堂々と裝つた男であつたが、ラルフがとある街の曲り角に立つて茫然と見廻してゐるのを見てその男は近付いて來た。

『はゝあ、君は少し弱つてる様だね。』

『え、少し。』

『仕事を見付けたいんだね?』

『え、、何か見付けて下されば有難いんですが……。そしたら熱心に元氣に働くんですが。』

男は暫く彼の顏を見つめてゐたが、やがて言つた。

『君は何かね、仕事の種類についちや選り好みがあるのかい?』

ラルフは頭を横に振つた。

『さうか、そんなら私の處へ來なさい。ぢきに生計の立つ様に世話をして上げるから。』

ラルフは疑惑の念に滿たされながらその男の宿所へついて行つた。何故ならその男は外見は紳士だけれども、顏附といひ態度といひ誰が見ても紳士らしくなかつたからである。間もなく薄暗い淋

しい通りへ入つて行つた。男は鍵を出して一つの家のドアを明けると、ラルフを伴れて狹い二階の部屋へ上つた。其處は煙草の臭ひが強く臭つてゐた。彼は戸棚からブランデイの壜とパイプと煙草それにビスケットを取り出した。ラルフはビスケットを見てよろこんだ。空腹だつたからである。だが、彼が煙草も酒も斷つたとき男は再び注意深く彼の顏を見つめたが、斯う言つた。

『然うか、如何も君は然うらしいと思つたよ。これはやかまし過ぎる様だわい。』

『なぜ? 一體僕の仕事は何なんです?』

男はそれを話すのが當惑さうに見えて少しもぢ〳〵してゐたが、遂々言つた。

『俺と同じ仕事を仕て貰ふんだ。如何だね、その仕事が俺にはそんなに拙い仕事ぢやあ無い様に思はれるが?』

『何ですそれは?』

『俺はもとフランスにゐたんだよ。彼地此地ぶらついてね。君はフランス語を知つてゐるかい?』

『少し。』

『然うか、ぢや俺の標語を敎へて遣らう。ヴァール・サタ・ヴアール (自分が見たものは自分のものだ、の意) つてんだ。』

『よく分りませんやうにしてやるよ。』

『今分らやうにしてやるよ。』

ドアの陰に外套が掛けてあつた。男は四五回その傍を行つたり來たりした。そしてその間絶えず狡賢い眼を光らせてラルフをぬすみ見てゐたが、歩みを止めないで捷く手をそのポケットに差入れ先づパンケチを、次に手袋を、今度は財布と手帳とを取り出した。

『おい、こんなもんだよ。』

『僕は盜人なぞになるもんか。』ラルフは赫となりながら言つた。『悪黨、貴樣なんぞに用はない。おい、このビスケットは幾何なんだ？　拂つてやらう。歸らして呉れ。』

男は大きな聲で笑つた。

『は、、、おい小僧、如何も貴樣は俺の注文にや向かないと思つてたんだ。ビスケットなんか心配するな、呉れてやらあ。貴樣そんな七難い事を言つてると必と鼻の下が干上るぞ。』

『お前のビスケットなんぞ貰ふものか。さあ僕の持つてるお金はみんなやる。そしてお前を盜人だつて警察に訴へてやるから。』

『彼奴らは疾に知つてるよ。貴樣よりよつぽどよく知つてら。』と更に一層大きな聲で笑ひながら言つた。そして更につけ加へて、

『おい、軍雞の雛つ子、俺を怒らせると貴樣爲にならねいぞ。さあ、出て行け。』

ラルフは眞赤に怒つてその家を飛び立した。彼にはこれが今までに出會つたうち一番恐しい冒險だつた。何故なら如何に深い滅亡の淵が彼の脚下に開けてゐるかをこの事件が教へて呉れたからである。

午後も全つきり同じ樣な疲れ果てた、そして全く甲斐のない放浪に終つた。然うして暗くなつてしまつた時、今宵の宿を求めるための準備として只一ペンス（我が八錢）しか無いのに氣がついた。彼はこれだけの金で宿を貸して呉れる所のあるのを今までに聞いたこともあるし、本で見たこともあつた。併し、何處にあるのか、如何して求められるのかが問題であつた。何でもそんな所は下町にあるのだと知つたので、彼は大通りを出てスント・ヂアイルス區へ入つて行つた。襲ふ樣に彼を惱ます物音にも邊りの情景にも氣を落さずに彼はとある路地へつき進んだ。道路掃除人夫から其方へ行けば宿屋が見つかるだらうと敎へられたのだ。その路地の光景は彼には生涯忘れられぬものの一つであつた。路はまるで醜惡な人間の群で埋まつてゐた。彼等は夜の帳の中で新しい活氣を得たものの樣に、何百人とも知れぬ宿無同然の子供等は煤けて黑くなつたドアや物置の附近に蹲つて、

何事か喚いてゐる。それが實に汚い忌はしい言葉を用ひてゐるので、同じ人間の子でありながら、こんな言葉に濺きせぬ汚れに染められる事もあり得るよと思ふにも、ぞつと身も慄へるばかりに思はれた。

ラルフは困惑はしなかつたが、注意せずに通り抜けることは出來なかつた。あゝ、後は辛い義務の道を捨てた。また他人の平和を亂す事を考へなかつた。己の意志のまゝに振舞つた。そしてその結果はかういふ所へ陷つてしまつたのだ！

二十一

困難と危險とを冒して斯うした場面を通り抜けて行きながら、ラルフは驚き恐れ戰き、茫然として何だかこれが現實だとは信じられなかつた。丁度夢で恐しい魔物に襲はれ、鐵の鎖で縛りつけられて身動きもならぬ樣な氣持であつた。それからまた、丁度突然に曾て聞いたこともない忌はしい恐しい世界へ投り込まれた樣にも思はれて、唯恐怖して氣が拔けた樣になつてしまつた。斯ういふ狀態で彼は今までよりは稍靜かな或る路地へ曲り込んだ。靜は靜だつたが汚さに至つてはむしろ却つて今までよりひどかつた。其處へ行くと、倒れさうで危つかしい、そして如何にも汚らしい家の入口の處に黑い看板が下げてあつて、『旅人宿』と粗末に書いた文字の白いペンキも剝げ落ちてゐた。彼の訪敲に應へて入口に現れたのはアイルランド生れの婦人であつた。（卑しい勞働者などにアイルランド人が多い。）

『今夜泊めて呉れますか？』

『旦那お入んなせいまし。』

彼女は彼を案內して、ひどく壞れた階段を上つて行つて、裂目の出來た、脂だらけのドアを開け

た。たつた一本の臘燭が黒くなつた何かの空瓶に立てゝあつて、弱い光を放つてゐるのみなので、暗がりの中で始めは眼の前さへ殆ど見えなかつたが、腐つたやうな、吐氣を催す様なこの室の氛圍氣が、ドアが開くとムツと襲つて來たので、彼は胸が悪くなり眩暈を感じた——不意に撲りつけられた様に。

彼が將に氣が遠くならうとするのを見て、その部屋の中にゐた一人の男が、ジン酒を彼の唇に當てがつた。平常ならばアルコールの匂ひは身振ひする程嫌なのだが、この場合彼はその一口で元氣を回復した様におぼえた。大ロンドンの路地に入ると、こんな汚れた空氣の被つてゐる處があつて然うした中に住み馴れて肉體の組織を中毒させてゐる人間たちに取つて、酒精の刺戟が無くてならぬものとなり、癒すことの出來ない飲酒の慾は抑へられない本能とか恐しい病氣の様になるといふ事は殆ど信じられないことである。

ラルフは先づこの肉體的にも精神的にも汚れ切つた巢窟を脱れて走つて行つてしまはうと考へ且つ努力した。彼は急ぎ足でギシギシ音を立てて危ふげに搖れる薄暗い階段を跳ぶ様に降りて入口へ近づいた。その時例のアイルランド生れの女は宿料を二ペンス拂ばないぢやいけませんと呶鳴り乍ら彼の行手を遮つた。彼にはそんな動物の聲は耳に入らなかつた。嫌惡の情の堪へられぬまゝに稍

荒々しく押し退けて矢庭に跳び出してしまつた。

疲れと、胸惡さと、飢と、餘りの恐しさとに喘ぎ喘ぎ、彼はストランドの通りまで來た。其處で或る家の戸口の石段に腰を下して休んだ。眠る處が見つけられなかつたので、今夜は此處に夜を明かさうと決心して、入口の深く奥まつたところへ蹲つて其處で出來るだけの休息を得ようとした。堅い石に腰かけてちゞまつてゐながら、また堪へ難いほど寒いにもかゝはらず、ものの二三分もたつとはや眠に落ちた。だが未だ半時間位にしかならないに、不意に恐しい光がパッと彼の顔を照したので、アッと叫んで眼を覺した。それは巡査の下げてゐる眼燈の明るい光であつた。巡査は彼が未だ十分意識を回復しないのに彼の腕を無造作に捉へた。

『こら、小僧、こんな所に何をしとるんか？』

と巡査は言つた。だがラルフは自分が何處にゐるのか半ば無意識なので、困つたキョトンとした態度で兩の眼をこすりながら、頻に氣をしづめようと焦つた。巡査は彼の肩を搖りながら言つた。

『おい、貴樣舌を何處へやつた。何故默つてゐるのか、貴樣何か惡事を働いとるな、確かに。この家へ押入る爲に相棒を待つとるんだらう。貴樣ジエミイ（盜人の使用する短かい金挺）を持つとるだらう。』

『僕はジエミイだのジヤツキイだのつて人なんか知りません。』

巡査の言ふ言葉がラルフには分らないのだつた。

『僕は唯あんまり疲れたのでこの石段で眠つてたんです。』

『何、あんまり疲れた？　さうか？　それで、こんな處で寢るなんて事は規則違反だちう事を知らんのか？　貴樣は浮浪人として警察へ伴れて行くから來い。』

『僕は何も惡いことをしやしません。』

『惡い事をしてないといふんなら宜しい。だが一寸私に從いて來い。明日まで貴樣は拘留所へ入れるんだ。貴樣家は何處だ！』

『何處でもありません。』

『名前は？』

『名前なんか言ひたくは無い。』

『生意氣をいふな。貴樣は只の宿無しぢやないな。うん、お前は何だな、家からか學校からか何處からか逃げ出して來たんだな。確に然うだ。だからか明日は判事樣の前で悉り白狀せにやならんのだ。さあ來い、一しよに。』

判事の前へ出されれば身元を發見されるであらう、さうして無理やりに父のもとへ歸されるであらうと何とはなしに恐くなつたラルフは、

『判事樣の前へつれて行くのは止して下さい。僕は確かに何も惡いことをしようなんて考へてゐたんぢやありません。どうぞ放して下さい。』

『そんなら何を吳れる？』お前金を持つとるだらう、屹度。』

『お金なんぞありません。殆ど費ひ切つちやいました。』

『そんなら伴れて行く。』

巡査はラルフの肩を把む手を強めた。

今はこの巡査の手を脫れる手段はただ一つしか無かつた。で、彼は子供たちに『胸突き』で知られてゐる極く簡單な業で忽ち巡査から放たれることが出來た。全く突然にドンと一突き鳩尾を突かれた巡査の身體はすつかり二つに折れるやうに反り返つた。やつと息をついて前屈みになつた時はラルフは彼を離れて全速力で走つて暗闇の中へ見えなくなつてしまつた。何方へ走つて行つたか分らないし、また恐らく自分でも少しは恥しくなつたのであらう、巡査は追はうともしなかつた。かくてラルフは再び街の中で自由になつて、最早殆ど人通りのない、あつても急ぎ足で過ぎて行く通

りを歩いてゐた。

晝間のうちに歩き廻つたとき見て置いたのだが、橋の下の河の端へ行つて寢ようと考へた彼は、苦心して漸く其處へ行くことが出來た。そしてもうこれで困らせられる事もなく寢みたいと思つた。珍しく仕合にも彼は其處に乾草が少しあるのを見つけた。それはその朝何かの品物を傳馬船から荷上げして、荷を解いたあとに殘されたものだつた。ラルフはこの藁に深く感謝した。そして今まで幾度かこれよりもつともつと大きな恵みに對してこれほどの感謝はしなかつた事を思ひ出した。

彼は乾草の上へ跪いて、どうぞ私を助けて下さい保護して下さいと熱心に神に祈つた。さうして後、十分に身體を伸して長々と横になり、その上へ乾草をすつかりかけて、やがて疲れ切つて深い深い眠に落ちた。

二十二

眼を覺ますと雪が積つてゐた。その一夜中雪が降つたのだ、——白く、ふうわりと汚れた町の穢い泥をさへ覆ひかくした樣は、人の罪をもかく赦し給ふ象徴のやうに。

宛もクリスマスの日であつた。彼は朝飯を買ふに一ペニィの金さへ無かつた。而もどこの店も休で戸を閉ぢてゐるので、仕事を見つける望みは少しもなかつた。彼にとつては何といふ情ないクリスマスだらう、倫敦の往來で家もなく金もないのであつて何といふ變つたクリスマスであらう。

彼は今、あの華かだつた希望に滿みてゐた幼い頃や小學時代を思ひ出して考へた。あの頃よ——自分と同じ年頃の少年たちにまじつて、いろいろな娯樂を求め、罪もない喜に耽つてあの樂しい時を過したのである。胸には無數の幸福の泉を抱いて、而も一點の憂ひさへも持つことなしに。だのに今は、何といふ暗い時が彼を待ち設けてゐることよ！　どんなに我が家では物悲しく悼ましい時を過してゐるであらう。——斯う考へると彼の心はつぶされる樣であつた。今は悲しんでいらつしやるだらう。けれども長い間には結局僕がゐない方がみんなの爲なんだ。皆は幸福なんだ。お氣の毒

なお母さま——可愛さうなクリスティイ！』

母と弟との事を思ふと彼の頬は涙で濡れた。そして二人の深い悲嘆を察する心でしばし我が身の難儀をうち忘れた。

だが、空腹は鋭い針のやうに彼を刺戟した。而も今日は一般の休日なので、彼にはどうして朝食にありつけるものか手段がなかつた。何か一寸とした仕事をしたいにも少しも工夫が立たなかつた。食を乞はねばならないのだらうか？　餓死するまではそんな境界へは陥つてはならぬ、否、物乞ひなど考へただけでさへ頬が熱くなつた。而も、何一つ彼に好運が向いて来なかつたら一體どうすればいゝのか？

いよいよ空腹は加つてきて、彼は何の目的なしにぶらぶら歩いてゐたが、遂にハイド・パーク・タレスの近くまで来てしまつた。そこで一人の紳士が或る家の前で馬を止めた。ラルフは見るより急いで駈けよつて手綱を取つた。紳士が降りて内へ入るまで。

『や有難う、歸りにお禮をしますよ。』

と紳士はいつた。ラルフは寒い中を十五分も待つた。雪の中で感覺を失つた足を足ぶみしながらさうして餓と悲とを忘れようと一心に努めたのだ。出て来た時に紳士は彼の顔をぢつと何時までも

見つめてゐるので、ラルフは若しや彼がラグビイ・スクールの音樂會で歌つた時顔を見覺えられたのではないか、そしてこんな事をしてゐるし、こんな風をしてゐるにも拘らず氣付かれたのではないか、と心に警戒した。この想像は確に或る點までは當つてゐたのだつた。馬上の人はラルフを見たことのある少年だなと思ひ出したのだ。そしてこの少年は決して普通の宿無し子ではないなと感じたのだ。だが彼には何時何處で會つたのだか思ひ出すことが出來なかつたので、疑はしげに何時までも見つめてゐたが、やがて六ペンスをラルフに與へて斯ういつただけであつた。

『それでいゝだらうね？』

『結構で御座います。有難う御座いました。』

『いや、結構どころぢやなからうけれど……』

彼は馬の背にまたがり乍ら斯う言つたが、再びラルフを見た時、ラルフが半ば顔を背けてゐるので一寸頭を振つて立ち去つた。

ラルフにとつて六ペンスは寶であつた。——それは朝食にもなり、晩餐にもなるのであつた。彼は帽子に手を掛けて禮をして最も手近なパン屋を探しに行つた。そして大通りによくある噴水で渇を癒すことが出來た。彼にとつてはこの噴水が寶になさけある設備の一つだつた。さて何を爲よう

との的もなく、さりとて如何にも退屈な何もすることのない時間をどう迷らさう工夫もなくて、彼は今三々伍々群をつくつて各々の教會へと歩いて行く幸福さうな人たちの後に蹤いて行きたいと思つた。併し直ぐにさうする勇氣も出なかつたが、やがて遂に牛津ストリートの近くのとある教會へ出來るだけこつそりと忍び込んだ。そして唱歌席の階段へ腰を下した。其處で彼は靜かに話しかけられる人もなくてゐたが、一人の老人が祈禱書を渡して呉れた。彼は熱心に祈禱の仲間へ入つて說教者の語る平和な慈悲深い福音の言葉に喜んで耳を傾けた。その牧師は如何にも氣立の情深さうな顏付をしてゐたので、ラルフは如何にもして同情と救とを乞ひたさに、彼について法服所（法服、樂器、寺寶などを收める室）に行きたかつた。行つて現在の苦の數々につい相談をしたかつたが、內氣で謙遜な彼が決心がつかずにぐづぐづしてゐるうちに、誰も知らぬ牧師は教會を出て來て彼の傍を通り過ぎる際に、彼の默禮に應へてチラと優しく見遣つて心地よい會釋をしたが、ラルフには彼に話しかける決斷が如何しても出なかつた。

粗末なディナーのパンを買つて終ふと、彼は再びもとの一文無しになり、空腹を抱へねばならなくなつた。彼はそれを食べ終へるや、また何の目的もなく街をさまよひ始めた。もうこの時は堪らない程疲れ切つていやになつてゐたのだが。

遂々運よくも（實際彼は心から感謝した）あの教區の境界の標に据ゑ付けた工合のい、幅廣い石を見つけた。その上に誰も腰かけてもゐねば荷物を下しても居なかつたのだ。たゞ出來るならもつと人通りの少い所であればいゝと思はれたが仕方がなかつた。

彼は深く失望した樣子で其處へ腰を下した。彼の傍を行き交ふ多くの人々は恐らくは降誕祭日の幸福な聯想に柔いだ胸を抱いてゐるのであらう。この寒さの爲に堪へかねて慄へてゐる哀れにも孤獨な少年を眞から氣の毒に思つたであらう。けれど彼は然うした幸福さうな人々には眼も呉れず、兩手でぢつと頭を支へてゐた。彼は彼らに注意を向けなかつたのである。

だから、今二人の少年が近付いて來る足音も、その話聲も聞える筈はなかつた。また二人が彼の傍を通りすぎて急にぴたりと話を止めてしまつたのにも氣づかなかつた。ラルフの姿が、帽子が、髮の色が一人の少年の注意を惹いたために、その少年はもう一人のに默つて止れといふ身振をしながら振り返つてラルフを再び見つめた。

『あゝ僞にさうだ。』

『さうだつて誰の事？』

マーテンはそれには答へないで打沈んでゐる若者にずつと近より、靜にその肩に手をかけた。そして只一言、

『ラルフ君！』

と叫んだ。深い思に沈んでゐたラルフは不意に呼ばれて、マーテンの聲にびくつとした。そして逃げよう、といふ考が第一に衝動的に起つたのであつた。で彼は石からヒラリと跳び降りるや走りだしさへしたが、マーテンが咎めゐ樣に鋭く、

『ラルフ君、君は僕にまで逃げかくれしようとするのか？』

といふのに、やゝためらふかと見えたが、直ぐ立止つてしまつた。

顏を背けながら、そろそろとラルフはマーテンに近づいた。マーテンは從弟のジョージに先へ行けと合圖して靜にラルフの手を取つた。

『ラルフ君、なぜ僕の顏を見ないの？』

ラルフは頭を上げた。そしてマーテンの兩顏に涙の一杯溜つてゐるのを見た。彼はマーテンの手を握りしめて言つた。

『ありがたう。けれどももう昔の僕ぢあないんだ。放して呉れ給へ。そして僕なんぞ忘れて呉れ給へ。あゝ、君に見つからなければよかつた……。』

『いや放さない。僕と話を濟ますまでは放さないよ。君！　一體如何した譯で家を出てしまつたの？　惡いと知つてゐるんだらうに。』

『いや知らなかつた。少くとも感じはしなかつた。惡い事も爲ないのに父は僕を打つたんだもの。』

『おい君、それあ君のお父さまは嚴し過ぎると思ふ。併しだ。とにかく君にはお父さまだといふ事を忘れちやならないぢやないか。その上たとへ理由なく打たれたからといつて、その爲に家を出て家の人たちを悲の底へ突き落す樣な事をしていゝのだらうか！』

『マーテン君、そんなに言はないで呉れ給へ。もう既に世間が隨分と僕には辛いんだ。まだこの先だつてどれだけ辛い中を切り拔けるのか分らないんだからね。』

マーテンは氣の毒げに言つた。

『ね、ラルフ君、もう歸らなけりやいけないよ。本當に歸らないとね、お母さまやクリスティ君の爲に——』

『もう、もう、どうかそんなにいぢめないで呉れ給へ！』ラルフは耳を抑へながら言つた。『マーテン君、もうその話を持ち出すなら僕は逃げて行つちまふよ。お母さまだつてクリスティだつて、今

にゐた幸福になるだらう――みんなが僕さへ家に居なければ幸福になれるんだ。』

『ラルフ君、一しよに來給へ。僕父が此處に來てゐるんだ。君の知つての通りあゝいふいつも親切な人だし、特に君が大好きなんだからね、きつと君の爲に巧い方法をとつてくれるよ。君もさう思ふだらう？　さあ君、來給へよ。』

併しラルフは愁に堪へぬ樣に打沈んで、只頭を振るのみであつた。で、マーテンは續けて言つた。

『僕あこんな風をしてゐる君を見てゐると悲しくてならないんだ。僅か一日二日で君はすつかり變つちやつた。君の顏の痩せたこと、そしてひどく寒さうだし、疲れてゐる。お腹も空いてゐる樣だ。あーあ、君、君にまあ何てクリスマスを迎へたものだらう！　兎に角僕の家へ來て休み給へ。そして何か食べたらいゝぢあないか。その上で行かなけりやならないといふなら何處へでも行き給へゝね』

『さうはいふけれど、君はいざとなると約束が果せまい。』ラルフは穩かに答へた。『駄目だ。放して呉れた方がいゝよ。左樣ならマーテン君、今度はもつと幸福な身になつて會へるだらうよ。さうでなければ……。』

天國で會はうといひかけて口を噤んだ。そしてマーテンの手を強く捩ぎ取つて後さまにずんずん歩き出した。

マーテンは名殘惜しさうに彼の後を見送つたが、爲す術を知らなかつた。その時ラルフは振り返つて言つた。

『マーテン君、家へ歸つても僕に會つたことは話さないでね。』

『いや話す。』マーテンは悲しげに、『第一に僕が君の事をいろいろと考へて氣の毒に思へば父はすぐに感付いてしまふよ。それから父や君のお父さまが君の居所を知つてゐた方がどんなにか君の爲になるだらう。ラルフ君、君は一體どうして暮してゐるの？』

『聞かないで呉れ給へ。それより君はどうしても僕の事を話すの？』

『そりや話さなければね。けれども話した方がずつと君の爲だと思へばこそだよ、君。だから話しても宥して呉れるだらうね？』

『宥すも宥さんもないさ。誰一人何一つ僕に同情して呉れるものはないんだが、君だけはいつも親切にして呉れた。今も變らないと思ふよ。だけれど、どうしても話すといふなら僕は何處かへ隱れなけりやならない。ロンドンは廣いんだからね。君たちが何處までも探すといふなら一日や二日には行くまいと思ふ。』

彼はかういひながら淋しく微笑んだ。その微な、しかも腸を掻き挫られる思のこもつた微笑は何

よりもサーテンを痛ましく思はせた。

薄幸な我が友が今し、通りの突き當りまで達して振り込り様に手を振つて永い別れを告げて、やがて姿をかくして終つたのを、なほぢつと見守つてゐる彼の兩眼からは熱い涙が溢れ出るのであつた。

二十三

ラルフはもう以前の様にぶらぶら歩いてはゐられなかつた。彼はサー・ヘンリイ・アラビイ氏が必と探しに來ると思つたので、見付からぬうちに遠くへ去つてしまふ事が今は第一の目的であつた。而も彼には一錢の貯さへ無いのだ。何時の間にか吹き出した寒風一陣また一陣、チラチラと降り積む雪を吹きつけてゐるこの冬の夜に、彼は宿るべき所を見つけるさへも、少しの見込もつかぬ始末なのだ。乞食か？　それは思つただけでもぞつとするほど堪らない事である。併し、繰返していふ如く、飢は鋭い刺戟である。特に強健な發育盛りの青年には。

彼がなほ如何にすべきかとつおいつしてゐる時、一人の少年が樂しげに何か俗歌めいたものを小聲で唄ひながら傍を過ぎて行つた。ラルフはそれから突然或る暗示を與へられた。彼は歌を歌つて食物と宿の料を得ようと思ひついたのだ。まだハイ・ストリートでは人々がぞろぞろと往きかひしてゐるのに、此處の四辻は割合に寂然としてゐるので、彼は引き返して大通りへ出ようと決心した。

彼は實際恥しくて堪らなかつた。暫くの間聲を出さうにも思ひ切つて出せなかつたほど恥しさで

一ぱいであつた。而も飢や寒さや悲しさや生きんが爲といふ絶對絶命の必要には迫られたし、その上何よりも幸に最早全く暗くなつて、瓦斯燈から數歩離れて立つなら、顏を明瞭見られる心配はなくなつたので、斯く歌ひ出すことが出來た。

彼はキング・ウエンセラスといふ美しい古い小唄を思ひ出して、今歌ふには適當だと考へた。彼はその歌をよく知つてゐた。のみならず降誕祭であり雪が降つてゐるので、兎も角もこの歌がこの場合適當だつたのだ。咳拂ひをしてから彼は歌ひ出した、——始めは弱く危うけに、震へて、併し次第々々に力をこめて、一節を歌ひ終らぬに人々は何十人となく足を止めてこの歌に聞き入つた。彼の聲は清くて珍しいほど人の心を奪ふ美しさがあつた。強くて、明瞭してゐて、全く自然であつた。若し聲樂家にでもなつたら富を成したかも知れないと思はれる程であつた。のみならず十分音樂の素養があるのである。彼は歌ひ進むに伴れて人々を惹きつけた。そして我と我が感情に動かされて、一節一節全く自然に、或は陽氣になり或は哀を催させて最後の一節までつゞけた——。

だが、その一節を歌ふ時に——嬉しい希望に滿ちた調子で歌ひ終らなければならない筈だつたが——彼の聲は際立つて慄へ出して遂には殆ど途切れかゝつた。

歌ひ終るずつと前から彼の周圍をかなりの群集が取り卷いてゐた。終つた時、人々の巧い巧いとつぶやく聲は中々止まなかつた。そして見物の中には直ぐ樣財布の紐をほどく人が大勢あつた。彼は少しも催促しなかつたのだが、歌ひ終るや否や四方八方から銅貨が與へられた中には小さな銀貨の幾枚さへも彼の手に握らせられた。

『ありやどう見ても紳士だよ、慥に。』

といふのは彼に近く立つてゐる牛津大學の學生であつた。

『それに君、漂浪者には迚もあんなに巧く歌へるものぢやない。』

とその友人は答へた。

『ねえ君、僕はモオドリン・チヤペルでだつてこれより巧いのは聞いたことがないね。』

二人はずつとラルフに接近して立つてゐたので二人の言葉はラルフの耳に入つた。

『僕は漂浪者なんぞぢやありません。』彼は靜に言つた。『たゞ仕事が見つからなかつたので、少しの金が得られるかと思つて歌つたんです。食べるものと一夜の宿が得られればいゝんです。』

『さう、それぢあも一つ歌つて呉れ給へ、どうぞ、何ならなお今のでもいゝですよ。あんなのは二度と聞けませんからね。』

『歌つて呉れ。』

と數人の人々が近くで言つた。

『もう歌ひたくないんです。一日二日はしのげるだけのお金を戴きましたから。ですが、お望みならもう一つ頌歌をやりませう。』

彼は美しい歌を歌つた。だが疲れと恥しさとで、前の様に巧には歌へなかつた。

途中まで全く氣持のよいほど自然に歌つてきたのであつたが併し結びにはまだ達せぬのに、彼の聲は不意に止つてしまつた。そして身體の疲れと心の悲しみとに打ち負けて、如何に堪へても堪へ切れなくなつた彼は激しい歔欷を始めた。

『氣の毒にー　僕が悪かつた。濟まなかつたねえ。』と氣立のいゝ大學生は言つた。『さあ、これは御禮ですよ。』

彼は半クラウンの銀貨を二枚ラルフに與へた。同伴の友も同じく銀貨一枚添へた。他の人たちにも金を上げようと言つたものが大勢あつたが、ラルフは感謝して、もう當分の必要には餘る程戴いたからこれ以上は欲しくありませんと斷つた。

大學生——若いバリオル（オックスフォードのカレッヂの名）の學生——は友人の手を取つて其

處を立去り乍ら言つた。

『僕はあの少年が可哀さうで堪らないよ。』

『全くだね。ハント君、あれは明かに紳士の息子だね。何か苦しい事情があるんだよ。何とかして救ひ出すことが出來ないものかね、誰か。』

『ね、かうしよう。』ハントは言つた。『戻つて行つて僕の家へ伴れて行かう。そして名を聞いた上で出來るものなら何とかしてやらうよ。何かいゝ事をしようと思つてゐた所なんだからこれで今日の降誕祭が一層愉快に過せるわけだ。』

彼らが立歸つた時、ラルフは未だ大して遠くへは行つてゐなかつた。二本の路に挟まれた小さな草地を取り圍んだ柵に背を當てて倚りかゝつてゐた。彼は二人を認めると頭を下げた。

『ねえ君、君は何か心配事があるんでせう。僕に打明けて呉れませんか？　出來るなら力になつて上げたいんですが。』

とハントは親切に言つた。ラルフは如何にも悲しげに打沈んで、

『有難う御座いますが、……只何か仕事さへ見つかればいゝんです。』

『さうですか、ではそれは明日探して上げることにして——兎に角僕の處へいらつしやい。そして

事情をすつかり聞かして下さい。何にしてもまあ御飯を上げたいと思ひますからね。そして是非泊つて戴きたいんですよ。いや君、お禮なんて言はんで下さい。御樣子で間違ひつこないんですよ、君が十分信用出來る人だつてことは。』

ラルフはもう胸が一杯で何もいふことが出來なかつた。たゞ默したまゝ二人の大學生についてハントの下宿へと歩いて行つた。そこにハントは牛津大學での卒業試驗の準備にロンドンで或る家庭教師について勉強する爲に下宿をとつてゐたのだ。食卓が二人の爲に氣持よく用意されてあつた。ハントは下女を呼んでラルフの爲にもう一つ椅子を運べとてきぱき命ずるのであつた。

『あの、僕あなた方と御同席は出來ません。』

『なぜ？　君、』

『でも、僕は往來で寢たんですし。』と赤くなりながらラルフは言つた。『それにろくにお湯に入ることも出來ませんでしたし、着物は埃だらけですからね。』

『あゝ！　さうですか、いやよく分りました。』溫い心を持つた靑年はうなづいた。『そんな心配は要らんですよ。それぢや着替部屋へ御案內しますからね、其處に風呂が出來てますから。そして今夜は何でも君の着たいと思ふものを貸して上げませう。君の着物は明日の朝に間に合ふ樣に洗濯させて

置きますからね。』

ラルフは只心から感謝して彼の深い同情に甘へるより外は無かつた。三十分ほどしてさつぱりときれいになつて再び顏を出たラルフの姿は、みなりこそ粗末なれ、誰が眼にも立派な、良い英國の家庭に育つた少年だつた。氣立も生れも、ものごし擧動も慥に紳士だつた。

彼が入つて來た時二人の學生はチラと眼を交して、全く豫想してゐた通りだつたなといふ風に心でうなづき合つたのをラルフは見て取つた。また實際ラルフは自分のほんたうの境遇を二人に隱さうとはしなかつたのだ。たゞ彼等が名を尋ねた時、彼は斯う答へた。

『どうぞ僕のほんとの名は聞かないで下さい。何とでも呼んで下さい。』

『さうですか。ぢあ當分X君と呼びますよ、未知數としてね、ハハヽヽヽ。』ハントは笑ひながら、『只出來るなら力になつて上げたいんだから、君が此處を出られるまでにも少し君の祕密を打明けて呉れ給へ。ところで僕たちの方では君が何處からか逃げ出したんだつて事はよく分つてゐるつて事を言つて置いた方がいゝでせう。』

ラルフは默つてゐた。彼の顏に苦の色が表れたので、ハントは續けた。

『まあ、そんな事は後にしよう。さ、粗末ですが僕たちのクリスマス・ディナーです。目出度い晩

なんですからね、難かしい顔をしつこなしにしませう。さあ、元氣を出し給へ。』

食事が濟んでも、葡萄酒を飲み乍らストーヴを圍んで長く打寛いて談笑した。だが仕舞にヘリック（ハントの友）が立上つて、お寢みなさいと言つて出て行つた後でハントは言つた。

『それぢあX君、僕は鄕里へレターを書かなけりやならんですからね、直ぐに寢みたいと言ふんでなければ二三十分の間何か君の好きなものを讀んでて吳れ給へ。それまで少し爲なければならん仕事がありますからね。それが終へたら否でも應でも寢んで貰ひますから。』

『ありがたう。ぢあ靜にしてゐます。決してお邪魔はしません。何を讀んだらいゝでせう？』

『これは今日のタイムス新聞です、お讀みなさい。』

ラルフはそれを受取つた。そして廣告面をのけて置かうとしたその時、そこに自分の名が出てゐるのをチラと見とめてどきつとした。そこに勿論例の相談欄であつた。廣告は次の樣に書かれてあつた。

ラルフ——すぐ家に歸れ。恥ではないか。無分別な行は止めよ。何も恐れることはない。——エ・ダ、

もしこれだけなら、こんな廣告を却つて彼を遠退かせるだけだつたらうが、その次にはまるで別

の性質の廣告があつた。

ラルフさん！　どうぞ、後生です、あなたの愛するものたちの爲を思つて歸つて下さい。おゝ、ラルフさん、よく私達と離れてゐられるんですね。ク——は大變に惡いのですよ。思ひ出すでせう、あの事があつてからまだ五ケ月にもならないんですよ。あなたが居なくなればどんなことになるか考へて見て下さい。私は信じます、あなたは心の廣いキリスト信者の少年らしく必ず歸つて下さることを。

讀み終つた時、深い懊惱のうめきが彼の唇を洩れた。そして、すぐに抑へかくさうとしたが外に現れる心の動搖を何うする事もできなかつた。

『何うしました？　何か新聞にあつたんですか？　お貸しなさい。あゝ、然うですか、分りました。分りました。』

彼は席を離れて優しくラルフの頭を起した。そしてその面をぢつと正面に見たが、

『それぢや君はラルフ、ダ——君ですね？』

といつた。

『何んにも聞かないで下さい。』

ラルフは歔り泣き乍ら言ふのであつた。ハントは無言のまゝ部屋を出て行つた。そして下女を呼んで斯う聞いた。

『あの今夜洗つて呉れる様に頼んだシャツに何か名前がついてなかつたかい。』

『御座いました。シャツとハンケチについてゐました。ラ・ダグラスとついてゐました。』

『有難う。』

ハントは哀れなラルフの所へ戻つて來て、手を取つてストーヴの傍へ伴れて來た。そして言つた。

『さあ、君、僕の傍へかけ給へ、話さうぢやないか。ぢやあ君はこの廣告に出てゐるラルフ・ダグラス君ですね。それで、家を逃げ出して來たんですね？　ねえ、もう君の名前は分つたんです。さうこつちへ寄つて僕にみんな話して呉れ給へ。』

ラルフはヲールター・ハントの物に恐れない正直さうな顔をぢつと見つめたが、やがて答へた。

『はい……』

そして同情を求める一念から己が身の上をば手短に物語つた。その遠慮勝ちな、飾りのない言葉に熱心に耳を傾けてゐたハントは、聞き終ると言つた。

『あゝ、如何にもお氣の毒だ。いやお察ししします。お察ししますけれども、今になつて見れば惡かつたと氣が付いたでせう、どうです？　さうは思はないですか？　君の義務は家にあるんだといふ事、その義務を脫れて出て來た結果は自分の不幸になるより外に何の甲斐も無かつたといふ事にお氣が付きましたでせうね？』

『あゝハントさん、あなたには僕の心持がお分りにならないんです。僕は何うしても家へは歸れないんです——駄目なんです。それは出來ない話なんです。そんならいつそ僕は死んだ方が——餓死した方が增しです……』

ハントは再び廣告に眼をやりながら、

『——思ひ出すでせう、あの事があつてからまだ五ケ月にもならないんですよ。——あなたがゐなくなれば何んなことになるか考へて見て下さい……』低い、同情の籠つた調子で彼は聲を出して繰返し讀んだ。『ラルフ君、これは何ういふ意味なんです？』

彼は靜にハントに話した。——狂犬の牙から弟を救つた事を。それから後は弟を昂奮させたり激しく氣をもませたりすると、必ずその纖弱な身體に惡い結果を齎すので、家の人たちは絕えずそれを何より恐れてゐたのだといふ事を——

『それで、さういふ事情があるのに、君は歸らないであつた。』ラルフ君、君にそんな事が出來るなら僕は君を見損つた。そんな君ぢやないと思つたですよ。僕にも可愛い弟が居るのですがね、僕なら斯ういふ場合に會つたら何うしたつて弟を捨てる事は出來ませんがね？』

『でもあなたは僕を家へ引渡すとか捨てゝ、仕舞ふつもりはないんでせうね？』

『そんなことはしませんよ。家へ歸るにしても君の自由意志からでなければならないんですからね。たゞ僕は君が必ず歸ると思ふんですよ。君にはお母さまの胸を破らせたり、恐らくは弟さんの死を促す事になる樣な事は出來る筈が無いですから。お氣の毒だ。全くお氣の毒だけれど、君の話して呉れた事をよく考へると、何うしても君はほんとに惡かつたと思ふ、——いや、殆ど許すべからざることだと思ふんです——家を逃出した事はね。』

『あゝどうぞそんなに仰らないで下さい。』

ラルフは絶望の悲に堪えぬ樣に我と我が手を絞る樣にするのであつた。『僕は本當にいゝ子供になりたいと思つて努めて來たのでした。ラグビイへ行つてお聞きになれば分ります。僕が何んな人間だつて事は。そしたらみんなが僕の性質は良いんだつて證明してくれます。あゝ僕がどんなに辛い思ひを堪えて來たかはあなたは御存知ないんです——左樣です、御存知ないんです。』

『ラルフ君、僕はたゞ君をかうして不思議な緣で知る樣になつた以上は、只君を救つて上げたい許りなんですよ。だが君、まあ僕を信じて呉れ給へ。こゝに一つ良い方法があるんだ。而もたつた一つの方法ですよ。それはね、出來るだけ急いで家へ歸る事です。どんな友だちにした所で、正しい判斷をする人なら誰だつてこれより外の方法は敎へることは出來ないと思ひますよ。ね、神が君に與へた義務を果さうと君が決心しない中は、たゞもう深い悲と良心の苛責に會ふより外は決して心の平和は得られないんですよ。』

『僕は家へ歸ります。』ラルフは言つた。『ですが、何うしても家に落付く事は出來ないと思ふんです。』

『先づ現在の義務を果し給へ。將來の事を考へるのは然る後です。「一時に一事」ですよ。ぢや君、家へ歸ると約束しましたね。有難う。僕には君の顏を見たゞけで、君が正しい道を踏む人だと分るんです。そして必と間違つた事は出來ない人間だと思へたんです。』

『明日出發します。歩いて行けば二日か三日かゝるでせう。併しいよ〳〵何うともならなくなつたら僕は食を乞ひます——いや歌を歌ひます。』涙を溜めた眼で微笑みながら更に附け加へた。『それが

一番うまく行く樣ですから。』

『いやそんな心配は無用です。君に乞食なんかさせませんよ。お家へ歸るまでの金は僕が喜んで上げます。さ、そんなお禮を言ひつこなし。いや、上げるのではなくて貸して上げませう。何時か後に返して戴く事にして、すればお互の交際を續けて行く言譯になりませう。實際こんなに珍しい緣で成立つた友情を今更絕つのはいやですものね。』

『ほんとに種々とお世話下さいまして……。』

『君、お禮を言ひつこなしつて言つたぢやありませんか。君は言ふことを聞かない男だ。ハハ……。ぢや君に金を儲けさして上げましよう。』

『僕に出來ることでしたら……。』

『いや、一つ二つ歌つて貰つて儲けさして上げるんです。厭ですか？　此處の主婦にね、他處へ嫁いだ娘があるんですよ。それとその友だちが二三人招かれて來て居るんですがね、君が降誕祭の頌歌を一つ二つ聽かして上げたらそれは嬉しがるだらうと思ふんですよ。』

『遣ります、出來るだけやります。』

歌つて行きながら彼の聲は少し慄へて、或は途中で歌へなくなるのではないかと思へたが、兎に角途中で止めないでやんだ。そして、彼等が熱心に聞いて呉れたので、本當に喜ばすことが出來たなと知ることが出來た。一同は深くラルフにお禮を言つた。ハントはラルフに、『隨分疲れたでせう。色々の目に會つて。』といつて寢ることを勸めた。

ラルフの出て行つた後でハントは宿の女將に、

『如何です、妙な友人でせう、通りで近づきになつたんです。』

『ほんとですね。でもあの人、たゞの若い者ぢや御座いませんよ。慥に。』

『その通りです。立派な家の息子なんですがね。家を飛び出したんです。イズリントで歌を歌つて居る所を見付けたんですが、親達の所へ歸れつて今までいろ〳〵と勸めたんです。明日は立たせますよ。』

『そりやよい事をなさいました。神樣があなたをお惠み下さいます樣に。ではお寢みなさいまし。あなたは深い、惠まれた眠につけませう。天使たちがかう兩手であなたのお眼を閉ぢて下さいます。ほんとに、あなたの樣な方が安々お寢りなさらないなら世の中に靜かに眠れる人なんてあるもんぢや御座いません。』

ハントは腕椅子をストーヴの傍へ滑らして行きながら獨り北叟笑んだ。

『あゝ、老人の祝福はとにかくいゝもんですよ。實際人間は自分が何か善い事を仕たいと心がけた後でそれを思ひ出すことほど喩へ様もなく嬉しい時はありませんね。併し可哀さうになあ！　彼は……。』

二十四

ハントは朝食を用意して居間にラルフを待せてゐた。そして元氣のいゝ、友情のこもつた朝の挨拶をした。冷たい鳥肉だの、ハムに鷄卵だの、パンを燒いてバタをつけたのなど澤山仕度してラルフにすゝめた。これから家までの長い鐵道旅行をするのだからその間の力をつけて置かないと不可んからといふのであつた。それから何時の汽車で立つかをラルフに尋ねた。確か零時半の列車があると思ふから、それに乘つて行けば暗くはなるがまだ宵のうちにアルトンに着く筈だとラルフは答へた。

『ぢやあそれが一番いゝでせう。それでは此處に三ポンドあります。これで家までは間に合ふでせうね？』

『えゝ、間に合ひますとも！　これでは大變に多過ぎます。』

『餘つたら小遣に取つて置き給へ。それとも僕から從順が第一の義務だと聞いた記念に何か買ひ給へ。さあ、もう僕はお別れをしなければならん。これから先生の所へ教はりに行くんですからね。そして歸るまでには君は出發するんですから。ぢや君失敬、お家へ着いたらどんな風か知らして呉

れ給へ、ね。』

『上げますとも！　それではハントさん、左樣なら。僕はこの苦を救つて下すつた御親切に何と御禮を申し上げていゝのか分りません。何ですかもう長年の友人の樣な氣がして。』

『何時までも友達でゐたいですね。』ハントは微笑しながら手を握つて言つた。『さようなら。忘れつこなしですよ！』

彼はハントを送り出して、その後姿の見えなくなるまで見送つたが、やがてストーヴの傍へ腰かけて思ひに沈んだ。それからそれへと悲しい思ひが續いて行つたが、下女が入つて來た爲に彼は迷想から醒めた。下女は新聞を持つて來た。それはハントの所へ毎日持つて來るものなのだ。彼女が部屋を出ると直ぐ、ラルフは熱心にそれを取上げて見た。昨日の二つの廣告は未だ出てゐた。而もラルフは第三番目の、次の樣な廣告に眼を止めた。

——親愛なるラルフ君よ。眞の友の忠告を容れ給へ。家へ歸り給へ。若しそれを恐れるか恥しく思はるゝならア——の家まで來て呉れ給へ。私はどんなにも斡旋の勞をとります。この願をマーテンも重ねてします。私達は今日ロンドンを出發してア——へ行きます。

君の誠意ある友へ・ア、

『駄目だ。』彼は聲を出して斯ういつた。『僕には出來ない。まだ何うしても歸ることは出來ない。たゞクリスティやお母さまを喜ばせに一旦歸つて見よう。が、そのまゝ家に居つくことは出來ない。あゝ神樣お赦し下さい！　僕はあの家での最後の晩の事を忘れてしまふまでには、まだもう少し待たねばならないんです。』

彼は立上つた。帽子を取り上げた。その時不圖かう思つた——永久に兩親の懷に歸ると思つたればこそハントさんは金を與へて下さつたのだ。だからこの金は貰つて行く權利はない——といふ考へが浮んだ。最早彼は金錢の價値を知つてゐた。それが無ければ夜となく晝となく寒さと饑と悲とに攻められる恐のあることも知つてゐた。そしてそれは小說や物語でこそ美しけれ、恐ろしい悲痛な現實の中では何の美しい所も見出し得られないことを正しくないと思はれる事をするのと較べては彼にとつて何でも無いことだつた。で、少しも躊躇することなしに、彼はポケツトから金を取り出し、文房具を入れてある箱の中から書簡箋を一枚借り出して、それへ書き附けたのである。

ハント樣、僕は半日中考へ拔いたのですが、やつぱり家へ歸つても、そのまゝ居つく事は出來ません。あなたがこれを下さつたのは、家に居れとの御心だと承知してをります。ですからお心に

背く僕にはこのお金を拝借する權利さへ有りません。若し拝借するとしても、僕の力でお返しする事が出來るか何うか分りません。恩知らずな奴だと思はないで下さい。僕はあなたを思ふ毎に深い感謝を捧げずにゐられないでせう。

さようなら——ラ・ダ、

彼は三ポンドの金をその紙で包んで封筒に入れ、ハントに宛て、表書を認めて、さて再び旅の人となつた。

ラールターは歸つてこの置手紙を見ると、深く後悔した。だが何れにせよラルフは必ず一時は家に歸るといふ約束を果すに違ひないと彼には十分信じられるので、後を追つて彼を捕へさせる必要はないと思つた。廣告では彼の家の方角さへ知れなかつたし、ラルフも何處に住むとも語らなかつたので、彼には翌くる日の新聞に次の樣な廣告を更に加へるより外に何うする方法も見つからなかつた。

ラルフ・ダー君に偶然ロンドンで會つた男ですが、彼は今家へ歸りつゝあると思はれる理由があります。——ロンドンのキヤンブリツヂ・アンド・オックスフォード・クラブにてウ・ハ、より。

それから二日たつと、彼はダグラス氏から問合せの手紙を受取つた。で、事の次第を書いて返事

を出したが、それに對しての形式的な禮狀によつて、まだその時にはラルフは家に見えなかつたことを知つた。そしてしばらくの間はラルフの噂を聞かなかつた。

時々街道に出沒する無賴漢の群に惱まされた位の外に、ラルフは格別困る事件にも出會はないで旅を續けた。かくて、ロンドンを出てから五日目の黄昏、ほの暗くなつた頃アルトンへ着いた。其處から家までは六哩あつた。疲れて、饑ゑて、渇いて、心は惱み足は痛んで、殆どへと〳〵になつてゐた。

彼はこの小さな町のかけ離れた小路に入つて行つた。そして、人に見つけられる心配の決して無いと思はれる小さな食品店へ立寄つて、最後の數錢をはたいて饑を充たしてから、胸を躍らせながら我が家へ向つて最後の旅を續けて行つた。

彼は逃げ出した時にくゞつたくゞり戸を開けて屋敷の中へ入つた。そして忍び足で歩きながら草園へ行つた。入口が開いてゐた。彼はこの隅に物置のあるのを知つてゐるので、今宵はそこで明かさうと決心したのである。彼は祈禱の鐘の音を聞いて、召使たちが廊下を通るのを見た。それから應接間の電燈の消えるのも見た。それによつて母とクリスティは寢に行つたのだと思つた。彼はカーテンに映る母の影さへ見た。それからクリスティの姿が遠くにチラと見えた。それはその部屋の

窓にカーテンが引いてなかつたからである。それからクリスティは窓に近づいて、それを開けて、そして何時までも物思はし氣に外を眺めてゐる。やがて窓を閉めた。次にはクリスティが跪いて祈を捧けてゐる姿を見ることが出來た。ラルフの胸は燃えるやうな戀しさに激しく波打つた。熱い涙が覺えず頰を傳つた。併し彼はぢつと堪へて動かなかつた。クリスティが蠟燭を消すのも見え、母の部屋の燈が消えるのも見えた。やがて家中が眞暗になつて、たゞ一つダグラス氏の書齋の燈だけが殘つた。

斯ういふ場合、ラルフに心地よく眠られようとは誰しも思ふものはない。寒い、灰色の黎明が東の空に懐へ初めるまでには未だしばらくあるのにラルフは眼を覺した。彼はガースといふ少年が出てくるのを待ちうけてゐた。ガースは園丁の手傳で、母屋の方も手傳ひ、また厩の世話の手傳もするのであつた。ラルフはガースが何時も朝早く榮園へ來る事を知つてゐた。が、彼は果して間もなく起きて來て、仕事に取りかゝつた。で、彼は物置をこつそり脫け出して、ロウレズチナス（一種の常綠樹）といふ灌木の茂みの蔭へかくれた。そしてガースの仕事をしてゐる近くへ寄つて、『ガース』と呼んだ。ガースは吃驚してクル〳〵あたりを見廻したが、再び呼ばれてラルフの聲と知り更に驚いた。

『ラルフ樣ぢやございませんか？』

『さうだよ。話があるからね。どうか物置へ來て呉れないか。』

『まあ、ラルフ樣でございましたか、よく歸つて來なさつた。わし、ほんとに嬉しうございます。』

ラルフが傍へよつた時、彼はかういつた。

『だけんど、お前さまあ、そんな着物を着てござらして、お氣の毒でなりましねえ。』

『ガース、僕は自分勝手で家を飛び出したんだからね。自分で出來るだけやつて行かなけりやならないんだ。だがね、僕はお前に賴みたいことがあるんだよ。』

『へえ、お前さまの爲なら何んな事でもしますだよ。』

『あり難う。ぢやね、お前クリステイが一人切りでゐる所を見つけてね、僕が來たつて、そして話をしたいからつてね、お前話してお呉れ。僕は島へ行つて彼處で待つてゐるからね。それとも、お前に話しかけられないと何だから、誰も見てゐない所で僕の手紙を渡しておくれ。こゝに鉛筆と古い手紙があるから、この裏へ一寸一行書くからね。』

『へい承知しました。御心配なせいますな。』

『だけれどガース、お前それをあんまり突然に出すんぢやないよ。吃驚するだらうからね。』

『へい、氣をつけてやります。外になんにも御用は御ぜいませんか？』
『さうだね、若し持つて來られたら何か食べるものと飲むものを持つて來ておくれ。誰にも知られない樣にね。』
『ようございます。』
やがてガースはバタ付きのパンの厚いのを澤山持つて來た。それから又、彼はうまくビールを一杯運んで呉れた。
『それぢやもう左樣ならだよ、ガース。隨分お世話をかけたね。お前は此處にゐない方がいゝよ。誰かに妙に疑られるといけないからね。』
『御免なせいまし、ラルフ樣。お前さま、もうずつと家にゐなさるんでねえですかね？』
『まだ駄目なんだよ、ガース。けれどもね、何時か又歸つて來るよ。どうだね、クリスティが可哀さうだからお前出來るだけ氣をつけておくれね、僕が居なくなつたら。ね、いゝだらう？』
『坊ちやまの爲ならわし何んな事でも堪へますだよ、ラルフ樣。坊ちやまはほんとにおとなしい人だあ。わし、どんな人だつて坊ちやまの爲ならさうしねえ者あ無いと思ひますだよ。』
粗い外套の袖で兩頬の涙をおし拭ひながら正直なその男は母屋へ入つて行つた。そのひまにラル

フは庭の細路に沿うて、常綠樹の蔭に身をひそめつゝ、池の方へと進みより、小舟の一つに乘り移ると、櫂を握つて島へ向つた。
島に待つてゐると漸くして、池の向ふ岸に輕やかな、併し忙しげな足音が聞えたので、ラルフは鋭い不安に耳を敢てた。やがて、櫂の水を打つ音が彼の耳に響き、ついで島の砂利に小舟の底の軋る音が聞えた。遂に息をはずませながら低い聲で『兄さん』と呼ぶ聲を聞いた。
クリスティは窓を開けた。そして半ば狂喜し半ば懊惱して、泣聲を漏さじと堪へ乍らも、いきなり兄に飛びついた。そして兩手を兄の首に投げかけて、堪へかねて激しくすゝり泣いた。
ラルフは强く强く、心ゆくまで抱きしめた。長い間、二人は餘りに激しく感動して、物を言ふ事が出來なかつた。
併しラルフは弟の顏をみつめたとき、言ひ表すことも出來ないほど胸を衝かれた。あゝそれは慥にクリスティであつた。とはいへ、僅か數日前のクリスティが、まあ何といふ變り樣をしたものであらう！　美しい髮の毛は變らなかつた。可愛らしい顏付も、おとなしやかな眼も元のまゝである。だのに、あの圓くふくよかであつた頬の肉は今や全く落ち窪んでしまつてゐるではないか。なほ見よ、その兩の頬に見えて薄赤かつた血の色さへも、さながら落日の最後の色が彼の白雲から消え去る

にも似て果敢なくなつてゐるではないか。

クリステイもまた、兄が雨風に曝され、餓と艱苦に惱まされて、すつかり變り切つた樣を見ては兄に劣らず胸を痛めたのである。その痛々しい顏付き、その薄汚ない着物、更にその縺れた髮のために彼の樣子全體が變り果ててゐたのである。

この氣を滅入らす樣な悲しい沈默を、先づ破つたのはラルフであつた。

『あゝクリスティ、大變身體が惡さうぢやないか！』

『さう？　だつて僕、兄さんが行つてしまつてからほんとに悲しかつたんですもの。ほんとに何んなに悲しかつたでせう！　お母さまだつてそれは僕と同じ事だつたんです。兄さんは隨分ひどい。僕はまさか兄さんが僕たちを捨てていらつしやらうとは思はなかつた。』

『僕だつてお前やお母さまを捨てようなんて思やしなかつたんだよ。ね、クリステイ。僕がゐなくなつたら初めは何んなに悲しくつても、それが過ぎれば、僕がゐない方がお前もお母さまも本當に幸福になれるんだとあの時思つたればこそ出たんだよ。』

『兄さん！』

クリステイは答める樣に強く言つた。

『兎に角、お父樣だけはさう思つていらつしやるんだよクリスティ。ほら、あゝいふ事を仰つたんだもの。』

『あゝ兄さん、なぜそんな事を僕に仰るんです？　あの時はお父さまは怒つていらしたからなんぢやありませんか。』

『お父さまは怒つていらつしやる時でもなけりや滅多に僕には口をきいて下さる事はないんだ……だけれど、もうそんな話は止めようよ。僕がゐなくなつてお父さまは嘆いていらしたかい？』

『いゝえ、別に嘆きも……。たゞね、ひどく御機嫌が惡くてね、苦い顏していらしたけれど。けれども、兄さんが惡いんでせう、家を出てしまふなんて？』

『僕には分らない。何んな事が正しいのか、何んな事が正しくないのか、もう分らなくなつちまつたんだ。時々ごたごたしてしまつて何が何だか分らなくなるんだ。だけれど、もうそんな話は止めにしようよ。過ぎ去つた事ぢやあないか。それに貴い時間なんだ。僕はたゞねクリステイ、お前に別を告げに來たゞけなんだよ。』

『えゝつ！　また行くんですか！』

クリステイは悶えてかう叫んだ。

『兄さん、また僕たちを捨てようなんて、まさか本當ぢやないでせう。』

ラルフは弟が餘りに激しく感情を動かしたのを見るとハッと思つた。クリスティは兄の片腕が自分の肩を抱へてゐるにも拘らず、わなわなと慄へるのであつた。そして彼の青い顏はいよいよ青くなつた樣だつた。ラルフは弟の髮を撫でて優しい聲で慰め乍ら、幼い頃よくした樣に膝の上にのせて勞つたけれど、弟の心は靜まらなかつた。クリスティは止めどなく歎り上げて何うしても慰められなかつた。

たうとうラルフは嚴格な口調になつて氣を鎭める樣にと賴むのであつた。

『クリスティ、僕の言ふ事をお聞き。お前もつと確りして呉れなけりや僕の身を破滅させる事になるんだよ。僕はお前に左樣ならを言ひたくて來たんだ。そしてお前からお母さまへ僕の左樣ならを告げて貰ふ樣にわざわざ來たんだ。長いことはないよ、固く約束する——お前も知つてる通り僕は決して約束を破つたことなんかないだらう——ね、固く固く約束するよ。必と歸つて來るつてことを。何んな事があつても一年のうちには、いや大抵は四五ケ月のうちに歸つてくるよ。そしたらその時は總てがうまく行くだらう。お父樣だつて僕の歸るのを待つて下さる樣になるかも知れない。お怒りも忘れてしまひなさるだらう。だが何んなことがあつてもお前のためやお母さまの爲なら屹度戻つて來るから。僕はこれを話しに來たんだよ。此處まで歩いて來たんだよクリスティ——ロンドンからずつと歩いて來たんだよ。たゞお前が僕の爲を思つて辛棒して少しでも安心して呉れる樣に。さうして僕の居ないのもほんの僅の間だつて事を信じて呉れると思つてこそ來たんだよー　これが僕たちに取つて一番いゝ方法だと思ふ。どうかお前もお母さまもさう思つて下さるなら僕はほんとに……嬉へ樣もないほど嬉しいんだ。ね、これでもお前機嫌を直して呉れないの？』

『仕方がありません……。』

『ぢや辛棒してゐて呉れるね。そして僕の爲だと思つて喜んでゐて呉れるね。兄さんは自分の身よりお前の方が可愛いんだよ。』

『僕、辛棒します。だけれど兄さん、喜んでゐるなんて約束は迚も出來ません。』

『クリスティ、若し僕がまた居なくなるためにお前が身體を一層惡くするんなら——今もそんなに弱つてゐる樣にね——そんなら僕は行かないよ。何んなに悲しい目に逢つたつて行かない。そりや口でいふ事の出來ない程僕は悲しい目に逢はせるなんて、そんなことは出來ません。』

『兄さん！　僕は、僕は自分の爲に兄さんを悲しい目に逢はせるなんて、そんなこと出來ません。』

『そんならクリスティ、お前は男らしく確りしてくれなくつちやいけないよ。そしてお母さまを慰

めて呉れなくつちや、慰めて元氣にして上げなくつちや——して呉れる？』

『して見ます、兄さん。』

『約束するね？』

『約束します。』

『それで僕は幸福なんだ。そしたら今度はお前に賴みたい事がある。第一に寢室へ行つてね。僕に一番入用なものを一まとめにして持つて來て貰ひたいんだ——ブラシと櫛と、それから爽りしたシヤツやカラの類と、それに着替への着物をね——それから何か食べるものを持つて行きたいから運んでお呉れ。うまくまとめて持つてこられるかい？』

『大丈夫よ兄さん。家のものは僕が此處へ來るのを知つてゐるんだし、いろんな物をよく運んてくるのも知つてるんだから。』

二十分程たつてクリステイは小さいけれどもぎつしり詰め込んだ旅行鞄を下げて戻つて來た。その鞄は彼がこの島で何時間か過したくなると時々持つて來ることになつてゐたので、今それを持ち出しても誰も少しも怪しむものはなかつた。それどころか、家の人たちはラルフが見えなくなつてからといふものクリステイがたゞ茫然と自分の部屋に腰をかけて默つてゐるばかりであつたのが、

また今までの樣な樂みをし始めたのだと思つて、非常に喜ぶばかりであつた。それにこの祕密を見つからない爲に幸福な事に、丁度その日ダグラス夫人は氣分が優れないので自分の部屋へ閉ぢこもつたまゝ出てくる元氣さへも無くしてゐた。若し彼女が部屋に引き込んでゐなかつたらクリステイの足音が何時になく元氣になつてゐることや、その眼が嬉しげに輝いてゐるのを見のがす筈は無かつたから。

クリステイが戻つてくると、二人は長い間樣々な話を交した。ラルフは話の中に、自分はこれから船乘りになつて一航海して歸つてくる。そしたらお父さまが何んな義務を負はせるとも必とそれを受入れて仕遂けようと思つてゐると語つた。それまでには樣々な變化があるに違ない。多分はお父さまも居なくなつた自分を哀にも思ひ、淋しいとお思ひなさるかもしれないと彼は思つた。それ、からまた、彼はクリステイにどうぞ自分が來た事は明日の夕方まではお母さまに知らせないで呉れ、それまでには追手の及ばない所まで行つてしまへるだらうからと賴むのであつた。彼はまたこんな悲しい話ばかりでなく、一方には希望や慰安を與へる樣な、また愛情に滿ちた面白い土產話をいろいろと話して聞かせた。この話がまた母に傳へられて、母が現在の悲みを止めて、自分の歸るのを希望に滿ちた心で待つてゐて呉れるやうにと思つたのである。

さて長い別をせねばならない痛ましくも悲しい時は來たのである。ラルフは出來るだけ優しく愛情をこめて弟の心に別れの準備をさせた。弟を抱いて、その頭を撫でて、さて心の底から謙遜な祈禱を捧げて、どうぞクリスティの爲に我等二人の身に幸を與へ給へ、二人を守らせ給へと、そして父母の上に幸あれ、わが家が再び幸福な家庭であれと、神に祈つた。

祈禱が終へると彼は言つた。

『それぢやクリスティ、僕はもうたつた一つ何でもない事だけれども頼みたい事があるんだがね。』

クリスティは物を言ふことが出來なかつた。ただ「兄さんの仰る事なら何でもきゝます」といふ意を知らせるために彼の手を強く握るだけであつた。

『それはね、お前もお母さまも毎晩九時になつたら僕を思ひ出してね、僕の幸福を祈つて貰ひたいの。僕も丁度その時間にお前やお母さまを思つて二人の爲にお祈りを上げるから。ね、そしたら假令お互の體はどんなに離れてゐても、お互の心はその時は會へるから滿足だよ。』

クリスティは堪へ切れぬ涙が頻に流れ出るのをかくさうとして顔を背けた。ラルフは再び心ゆくまで弟を抱きしめ、弟の青白い頰に接吻し、弟の手を堅く握り締めてから、思ひ切つて出て行つた。クリスティは腰を下したまゝ身動きもせずにゐたが、微かな、音樂的な櫂の水を打つ音が島の蔭に

聞えて、やがて向う岸へ着いた音が彼の耳に入つた。彼は今一度兄の姿を一寸なりとも見ようものと、己がボートを滑ぎ出して兄の後を追つた。そして、ラルフが淋しい一本道を海の方へと辿つて行くのを見た。ラルフは振り返つてクリスティの姿を見た、そして頭の上で帽子を振つて別を告げやがて遠く見えなくなつた。

二十五

ラルフは最初畠の中を通つたが、やがて點々として在る森を抜け、到當海岸によくある廣い荒蕪地を横切ると、そこはボートライアズと呼ぶ小さな港場だつた。そこにはほんとに人家が數へる程しかない位で、而もこれ等の家は、大抵は漁夫が住つたり、水夫等が住つてゐた。ラルフが此處に來たのは、こゝの港は定期に海岸廻りのスクーナー（帆船）がはひつてくることを、知つてゐたからである。そして又この界隈の港場では、こゝが人目を避けるのに一番に都合がよいと考へたからでもあつた。

港には幾つか船が泊つてゐる。そこで彼はその一つの船の所へ行くと、船が何處の港をさして行くのでも差し支へないから、それに乘せて貰ひたい。その船賃は船の中で勞働して拂ふことにするからと申し出た。併し、老船長は、その船にはもう水夫はいらないと斷つた上に、次の樣なことをぶつきら棒な調子でいつたので、ラルフはハタと當惑した。

『若いの、家へ歸りな、お前さんは、逃け出して來て船乘にならうつていふんだらう。俺も若かつた時に、やつぱり家を飛び出して船乘になつたんだ。だけど、お前さん、後悔するだらう、一生。』

俺がそれなんだ。』

『僕はまた家へ戻るんです。いゝをりを見て。』

『俺もさう思つたんだ。』

船長は簡單にさう答へて行つてしまつた。

併し水夫の一人が、その會話を立ち聞きしてゐて、ラルフに、此の港には、翌朝早く出帆する小さいバーク型の船が泊つてること、そしてその船なら一人位は乘せてくれるだらう、と敎へて呉れた。ラルフは直ぐにその船に行つて見ると、その船は手不足だつたので、船長はリバプールへ出かけるのに船ボーイとして、非常に喜んで、彼を雇つてくれた。ラルフは翌朝船には乘り組むことを約束したが、その交涉がすむと、一體それまでも空いた時間をどうして過さうかと迷つた。

ラルフは海邊に腰を下ろした。海を見はるかしてゐると、彼は心が躍るやうだつた。小さい時から海といへば、ラルフには殆んど形容の出來ないくらゐ嬉しいものであつたのだ。ラルフの思ひはやがて家族の人々の上にむかつた。そして彼は今長い間家を開けようとしてゐるのだから、家へ歸つて、もう一度だけ生家の近くでゝも夜を過したいと思つた。人目につかないやうに隱れてながら母や弟の眠つてゐる部屋の窓を見詰めてゐると、そこには哀愁のうちにも悦びがあつた。それにあの

納屋は、無事に夜を過すのには一番いゝ場所だ。さう思ふと、彼は早速出かけて夜の暗闇が落ちないうちに、家につくようにと歩き出したが、途中で不圖、今夜はアラビイの邸で内輪の者が集つて例の劇をすることになつてゐるのだといふことを思ひ出した。

少し廻り路をすればそこへ行かれる、それに、そこへ行きつくまでには、全く闇になつてしまふだらうから、さうなればそこへはひつて行つても、危險もなく、誰にも疑はれずに、マーテンやダレナリンに最後の別れに、一眼丈見ることが出來るだらう。ラルフは、自分ではかくまでに苦しい心配をしなければならないやうな場合でさへも、グレナリンの困つてゐることは、決して忘れなかつたのである。

急ぎ足でアラビーの邸へやつて來た。彼は、よく開け放しになつてゐる勝手口から、屋敷の中にはひり込んで行くのに、さしたる困難も感じなかつた。だから、ラルフは誰呼などされないで、容易に庭園にまはることが出來た。やがて庭園を抜けると、母屋へやつて來た。

家庭劇はすんでしまつて居た。といふのは、ラルフがこゝへ着いたのは、八時半だつたから、それまでに招かれて集つた可成り澤山の子供等を喜ばせる爲に、早くから初めてしまつたのだ。そこでお客樣達は、各自に奇妙な、趣好をこらした衣裳を身にまとつて、大きな客間に押し合ひながら

はひつて來出した。招かれた人々は、非常な多數だつたので、只庭園へ面したガラス戸が、廣々と開け放たれたばかりでなく、窓掛もやはり開けてあつた。だから、ラルフは常綠樹の深い繁みに立つて、中で行はれてゐることをすつかり、思ひがけなくも、手にとるやうに見てゐたのであつた。

その光景を見てゐても非常に面白くて、きらびやかで、人の波がうつてゐるやうに見える。その部屋は年若い人々や、美しい人々で混雜を極めてゐたが、誰の顏を見ても、心から、その華やかさを喜んでゐるやうに見える。遂に彼はマーテンを認めた。彼は若い騎士テンプラーの上衣に美々しく着かざり、まがひの黃金の甲冑の上に、赤い十字架を縫ひとつた、純白の羽織をきて、サキソン・ロウイーナと一しよに舞踏してゐて、そのうれしさうな顏は、日頃よりも一層引き立つて見えた。併しマーテンも、その部屋のうちの他の人々も、皆、ロード・グレナリンの華麗な服裝にはおされて見えた。グレナリンの只でさへも目鼻立ちのとゝのつた立派な容貌は、身に纏つた、頗稀なきらびやかな衣服のために、一段と引き立つてゐた。彼は『アボット』の中のマスター・オブ・セイタンに扮してゐる。そして彼の父の伯爵は、見得を飾りたがる性格でもあつたし、また現にこの晚は見物に來た、自分や世間の手前に、ふさはしい服裝をさせようと氣をつかつたのである。伯爵邸の武器庫や衣裳部屋には、衣裳の材料は十分にあつた。それに彼は傳家の寶石をいくつも身につけて出たの

である。穿いてゐる靴までが、その扣金にダイヤモンドを飾つてあつた。グレナリンの衣服はビロードでつくられ、古風な縫取レースで飾られてゐる。立派な赤紫色の、ビロードの小形のマントを兩肩に品よく羽織つてゐる。嵩張つた黃金製の鎖は、彼の首の周圍にたれさがつてゐる。劍、それはトルコ帝から、彼の祖父に贈つたところの劍だつたが、その劍の柄と鞘とは銀でつくられてゐていろ〳〵の模樣が打ち出されており、ルビーやサファイヤ等で飾鋲が打つてあつた。彼の赤紫色のビロードの帽子の頂につけられ、彼の髮の毛の上に柔かくそつと垂れかゝつてゐる、その白い駝鳥の羽を止める爲の釦金でさへも、大きな高價な金剛石でキラ〳〵輝いてゐる。ラルフはこれまで、今のあたりに見る此の室全體の美しさにまさる美しさを見たことがなかつた。併しこの部屋の中では、どの顏もどの服裝も、グレナリンの半分も人目をひくのはなかつた。

ラルフが此の輝かしい場面に、一時間か、それともつと、の間も覗入つてゐたと思つた時、ラルフの立つ窓へ、ラルフとは反對の側から近づいて來る忍び足の音をきゝつけた。すると、一人の男が現れたが、その男は彼と同じやうに、その部屋がすつかり見える場所を占めたのである。ラルフは、それは單に召使の誰かゞ、好奇心にそゝられて見にやつて來たのだと想像したので、最初はその人影にちつとも目をくれなかつた。併し間もなくその男が身體を前に屈めたとき、明りが一瞬間

彼の顏を眞正面に照らした。ラルフはすぐそれがロード・グレナリンの召使のクラークであることを知つた。グレナリンが仕出かした不始末や罪惡の懺悔話を自分へした中に、此の男の名が、大分に入つてゐたことを思ひ出したので、ラルフは疑や不安を抱き乍ら、その男の行動をみはり初めた。ところが見れば見る程その男の眼は、例へば蛇がしつこく、その犧牲者の上につきまとつて行くかのやうに、その舞踏の人ごみを透して、彼の若主人の一擧一動につきまとひ、そのほかのことには少しも興味を感じてゐないやうだといふことが分つた。それから又ラルフがグレナリンの擧動をよく氣をつけて見てゐると、落つかないことが分つた。成程、グレナリンは無理に揚氣な風をつくろつて、時には嬉しくて堪らないやうな風にも見えたのだが、時々彼の顏の上を、たとへば雲の樣に過ぎて行くのも見られた。そして聲を立てゝ笑つた後に突然に彼の顏色は憂ひに惱み、落膽の樣子となることがあつた。あるダンスが終つた後、若子爵は運動の爲に熱くなつて、窓ぎはのところへピツタリとよつて腰を下ろしたが、身體は半分程カアテンのひだで、他人目から隱れた。ラルフは手を差しのばせば、グレナリンの身に屆いたに違ひない程二人の間は接近してゐた。そしてこんなに近よつて見ると、たしかにグレナリンには何か困つたことが出來たな、と思ふことが、ます〳〵分明に思はれた。その上、彼は、友が抑へようとして抑

へ切れなかつた當惑し切つた溜息をついたのも耳にした。クラークは此の機會をつかまへたらしかつた。といふのは、クラークは低いが併しよく透る聲でいつた。

「若樣！」

グレナリンは罪人が物に驚くやうな、驚き方をした。で彼がすぐ頭を擡げたときには、彼の顏色には非常に驚きの表情がはつきり見られた。併しすぐグレナリンはあたりを見廻し、聞えないふりをして椅子から立ち上つた。併しグレナリンを苦しめにかゝつた男は、彼を逃さうとはしなかつた。そして前よりもずつと大きな聲で、もつと威嚇のきく聲でいつた。

「若樣、私なんですよ。逃げたり等しないで、こゝへ來てお話なさつた方がお爲でせう——餘程。」

グレナリンは、ぢつと腹の蟲をおさへて、足で床を踏みつけ乍ら、若しや誰かゞ聞きはしなかつたかと四邊を見まはして、一寸息を入れると、他人が見てゐない隙を見て、庭園へ降り立つて、暗闇の中に、クラークと並んで二人の見物のやうな風をした。

「逃げ出さう等となさつても駄目ですよ、若樣。」

クラークがかういふのをラルフは聞いた。

「窓の側を離れてこつちへ來い。うるさい奴だな。」

ロード・グレナリンは、腹立たしげに云つたが、さういひ乍ら、高い樹木や灌木などで陰つてゐる庭園の中の小路へ歩み入つた。

悪い性格の男だとは、誰の目にもしるくその面に書かれてある程の、あの召使が、何か悪いことを企んでゐるんだと心配して、ラルフは音を立てないやうに、二人の方に近づいて行つた。低い話聲をたよりに、又一方には、うす明りの中でさへピカ〳〵光る、グレナリンの身につけた高貴な寶石の光りを便りにして、さて近よつて聞くと、召使は冷酷な、殘虐な、そして斷乎たる調子で話してゐた。

「ね、若樣、若し若樣から明朝あの一方の百封度のお金を頂かれませんやうなら、すぐに大殿樣のところへ、小切手を持つて行きます。」

「出來ない。これつきりでそんな話は打ち切りだ。」

むつとした返事のしかたゞつた。

「ではよう御座いますか。」

「あゝ、貴樣は、實に憎い、忌々しい惡黨だ。」

低い、人をひどく馬鹿にした笑ひ聲が、その返事だつた。それから、その男はなほつけ加へてい

つた。

『とにかく、私は僞造はしませんからね。何も仰るには及びませんよ、あなたがダイヤモンドづくめのビロード服で、飾り立つてゐらつしやつたつて、私しや、貴方の身になりたかああありませんね。大方、遠からず貴方もノーホーク島にでも流されるんでせうよ。貴方はそれがお好きなんですかね。』

グレナリンは恥しさと、腹立しさの餘り、齒をぎり〳〵と嚙み鳴らして後を向くと、段々暗い蔭を奥へ奥へと這入り込んで行つた。クラークは後を追はうとはしなかつたが、はつきりと、そして容赦しないといつた風にいつた。

『覺えていらつしやい。若樣。お金は明朝ですよ。でなきや、すつかりばれちまふんだ。』

すると低い聲でクス〳〵笑つて、何時ともなしに邸を取り巻いた闇の中に消えてしまつた。グレナリンは烈しい心の動搖を感じつゝ、小路を行つたり來たりしてゐた。ラルフは、眼が今は暗闇の中になれきつたので、友のしつかと握りしめた拳や、しどろもどろの足取を見ることも出來た。それからグレナリンが壓へやうと努める下から、息のとまるやうな歔欷の聲が洩れ出てくるのも聞くことが出來た。ラルフは氣の毒に思つた。わけてもグレナリンは、彼がこれ迄想像に描いてゐたよ

りはずつと深く、とても救はれない程の深みに落ちこんでしまつてゐるといふこと、又どこまでも下等で拔目のない無賴漢のために、全く自由に飜弄されてゐることを知ると、一層同情の念は湧き起るのであつた。グレナリンの心の動亂は刻一刻に增して來るのを見たとき、ラルフは一寸の間でもいゝから、彼の氣をわきへ外らしてやるのが親切なことだと思つたので、彼は足でがさ〳〵と音をたてた。その時グレナリンが驚いたのを見ると、低聲で友の名を呼びながら、グレナリンの所にやつて來た。

『誰？』

グレナリンは、後しざりしながら驚いた調子で尋ねた。

『僕——ラルフ・ダグラスだよ。』

『なに、ラルフ君？　君か。』

グレナリンは吃驚仰天していふと、同時に、心をこめて友の手を握りしめて振るのであつた。

『それにしてもどうして此處へやつて來たの。』

『君なら、僕の來たことを洩らしはしまいね。』

『僕が？　ラルフ君、どうして君はそんな物の言ひ方をするの。』とグレナリンはいつた。

『ぢやあね、僕明日の朝は船へ乘るつもりでゐるんだよ。で今夜は何も用事がないから、こゝへ來て、假裝會を一眼見て、倘君等には隱れて、君やマーテン君の顏を見て行きたいと思つたんだ。』

『きいた——君。今の一件をきいたか。ラルフ君。』

『あゝ、少し聞いたよ、聞かないわけには行かなかつたんだ。僕きゝたくはなかつたがね、クラークが君を呼ぶのを見ると、彼奴が何か惡だくみをしてゐるんぢやないかと思つたので、僕はあとをつけたんだよ。』

『さうだつたか。ぢや君はすつかり知つてゐるんだね。』

『彼奴、何だか君の祕密を握つてゐるやうだね。』

『さうなんだ。ねえ。ラルフ君。僕はお父樣の名で小切手を僞造したんだ。彼奴はそれで名家の名を傷つけることが出來るといふことも知つてゐて、僕から金を捲き上げようと思つてゐるんだ。あゝどうしたらいゝんだらう。』

グレナリンはうなだれて、歔欷のために殆んど口も利けなかつた。

『僕木當に、氣の毒だねえ。グレナリン君。』

『ラルフ君！　どうか僕を救つて呉れ給へ。どうしたらいゝか教へて呉れ給へ。』

『すぐお父樣に打ちあけて詫び給へ。そしてお父さまに縋つて助けて頂くさ。』

『駄目！　そんなことをする位なら死んだ方がいゝんだ。いつかお父樣に嘘をいつた事がお父樣に分つてしまつた時の、あの顏色は決して忘れることは出來ない。それに今度のはもつとずつと罪が大きいんだ。こんなことが知れゝば、お父樣は死んでおしまひになる。兎に角、ドネリル家の名を傷したといふことは、僕の生きてゐる限り、決して赦しては下さらないだらう。』

『そんならヘンリイ・アラビイ樣にいひ給へ。』

『それはお父樣にいふのと同じことなんだ。』突然、一生懸命な調子で『ラルフ君！』と叫んだ。

『一しよにつれて行つてくれ給へ。』

『なに！　船へ？　ねえ、君、分つて言つてゐるのかい。なに一つ慰安なしに、船の中で生活し、あの口汚ない水夫たちと同じ樣に、眞黑な水夫部屋の中の、汚ない釣床の中で寢るんだよ。ずるく迄る甲板の上に、雜巾をかけて、極くまずいものを、皿やフォークなしで食べることはしよつちゆうでね。暴風雨の中で命がけで帆を縮め、それに小汚い舟の船長の多分は、無學文盲の醉つぱらひで、人の顏さへ見りや、ひつぱたくやうな、そんな船長の自由にこきつかはれるんだ。僕は覺悟の上だからね、それに忍べることが出來るんだが、併し、君は——』

ラルフはグレナリンの船に乗りたいといふ考をきいて、少し嘲り氣味に笑はざるを得なかつた。

『だつて今日明日と二日、こゝにゐたなら、僕はもつと〳〵辛い目を見なけりやならないだらう。』

『併し君は、僕と一しよには行けない。そりや駄目だよ。第一、君はどんなことになるのか分つてゐない。それに又、誰にしたつて僕が唆かして君を連れ出したのだといふに違ひないんだ。ところが、それは僕として迚も堪へられない。自分丈のことでももう背負ひきれないんだ。』

『さうか、ぢや君が僕を憫む憫まないといふのは、君の勝手にして置いて、僕はきつと行つて見せるよ。僕は君と一しよに行くにしろ、行かないにしろ、どうしても今夜、家を跳び出すよ。僕の父はもう家に歸つて行つてるんだ。それに僕は父に言つておいたんだ。會は大變おそくならなければ解散まないだらうから、マーテン君は大抵こゝに泊つて行けといつて呉れるでせう。だから若し彼が、さういへば僕はいはれるまゝに泊つて行きますからつて、だから、家の人たちは僕を明日の晝飯がすまなければ、かへらないと思つてるでせう。そして此家の人等は、勿論、僕が家に歸つたのだと思ふだらうから、皆が氣がつくまでには、僕はずつと逃げのびれるだらう。だから僕は君に誓つておくよ、どうしても今夜は家を跳び出すんだ。』

『どうしても出るんだつて！　矢張船へか。』

『いや、さうとも定めてゐない。僕は、此の一兩日來身をかくす所を考へて居たんだ。そして思ひついたところがあるんだ。蘇格蘭の北部に、僕の母の姉にあたるコロンセイ伯爵夫人といふ、年とつた伯母が住んでるんだ。伯母には、息子がないんだ。僕を大層可愛がつてくれてね、いつかも僕があの女の後嗣になるんだなんて、僕に話したことがある位なんだ。父はどんなことがあつても伯母だけは怒らせないのを僕は知つてるんだ。伯母に賴めば、誰にも知られないやうに、どこまでも僕をかくまつてくれると思ふんだ。僕は伯母の許に行かう、そして此の事件がすつかり落着する迄、世話になつて居よう。』

『併しどう落着するんだね。』

『その事も矢張考へてゐる。僕はサー・ヘンリイにあてゝ、手紙を書いたんだ。あの方は僕の名親ですよ。僕が過去に犯したことを全部告白して、僕が家出をしたことを書いたんだ。屹度、サー・ヘンリイと父とで、どうにか法をつけて、此の不名譽を葬つて下さるだらうよ。而して年月が立つたら、或は皆さんに顏向けの出來る時も來るだらう。ねえ、ラルフ君、僕も一しよにつれてつて呉れ給へ。』

『連れて行かないでどうしよう。世間の批難はすつかり僕が引き受ける。』とラルフは投げ出したや

うにいつた。

『今の僕の心では、何が正しいのか、何が悪いのか、殆んど判斷がつかないんだ。僕は、君が僕の惡い手本を眞似ないやうに、あれ程いつたのに、君が强して家出をするといふのなら、僕にはそれをとめる力はない。あゝあ、グレナリン君！　併し君に僕が家出以來、どんな苦しい目に逢つたかが分るなら、君は家出をしないで、どんな辛棒でもするだらうにねえ。』

『あゝ、どんな辛棒でもするが、恥ばかりは耐へられないんだ。ラルフ君、僕はこゝに止つてゐるくらゐなら、死んだ方が增しだ。どうか僕を連れてつて呉れ給へ。』

ラルフは何か口の中で囁いたが、グレナリンはそれを、嫌々ながらも承認したのだ、と解釋しようと思つた。

『そんなら、僕をこゝで待つてゝ呉れ給へ。ラルフ君、逃げるにはいゝ機會だ。皆は夕食にはひつたんだ。僕の姿が見えないで、少しは驚くだらうよ。併し今晩早いうちに僕は頭が痛むとマーテン君に話してあるから、マーテン君は僕が家にかへつたと思ふだらう。僕は此の衣裳や寶石類を、これ等は皆僕のお母樣のものだが、マーテン君の寢室に置いて來よう。僕はそこで着がへをしたんだ。僕等は皆一しよに明日こゝで假裝したまゝで寫眞をとる筈になつてるんだから、その爲に衣裳は殘

しておいたのだと、マーテン君は思ふだらう。僕は大急ぎでこゝへ來るから。併し機會を見なければやならない。殊にあの惡人奴の目にかゝらぬやうに。』

彼は口の中でつぶやいた。

ラルフは待つてゐた。そして、彼が寒い靜かな夜に、庭の腰掛に腰を下ろしてゐると、彼の心の惱みはます〳〵强くなつて、此處に又ラルフの上には、新らしい心配と、新らしい負擔と、新しい困難とが、彼の身に背負はされた。ラルフには遂に休むときはないのだらうか。悲しい低い聲が暗闇の中で、次のやうに私語やくやうだつた。

『道に違ふものの行く道は苦し。』

物の二十分程たつて、グレナリンは常の服に着かへて出て來た。グレナリンは階下の部屋の窓からこつそり拔け出して來たが、その部屋はマーテンの書齋となつてゐたのだ。

『さて、どこへ行くんだ。』とグレナリンは尋ねた。

『ライアズ港へ。僕は島の中を拔けて來たんだ。併しもう暗くて通れない。この邸を出たら本道を通つて行かう。』

『そりや素的にいゝ都合だ。郵便局の前を通るから、サー・ヘンリーへ手紙を出せる。』

『併し君のお父様が迎への馬車をお寄越しになつて、君は見つけられやしないかね。』

『いゝや、僕はこゝの召使の一人に、若し家の御者が來たら、馬車はいらないといつて返して呉れるやうに頼んでおいた。御者は僕が此邸に泊るのだと思ふだらう。チエツ、馬車が來た。父が迎へに寄越したんだ。ね、早く隱れよう、うつかりしてゐると見つかつてしまふから。』

二人の少年は生垣に沿つて身をすくませた。すると馬車は、二人の側を驅けて行つた。彼等はその車輪の響きが、遠くへ消えてしまふ迄身動き一つしなかつた。

『それでは、ラルフ君、急がうぢやないか。僕は最早や、足に羽が生えでもしたやうな氣持だ。もう恐しさの重荷が、僕の心から取りのけられた樣だ。ねえ、ラルフ君。僕がこの一月の間どんなに苦しい目を見たかは、君に知つて貰ひたくない。』

『僕だつて矢張り、苦しい目を見たんだよ。』とラルフがいつた。

『ふむ、併し、君は罪と恐しさとから來る苦しさは知らないだらう。僕の樣に、その苦しさつたら他のどんな苦痛よりもまさつてゐる。君は僕を見下げた奴だと思ふかい。』

『どうして、僕は、君を氣の毒に思ふ。人が惡いことをしたからといつて、見下げるなんて、僕はしたくないよ。それに、僕は今困つてゐてそれどころぢやないんだ。クリスチイと母とのことは決

して忘れられない。思ひ出すと望も、何もなくなつてしまふ。』

『あの足音は僕等をつけてくるのぢやないか。』グレナリンは尋ねた。

『違ふよ。驚かなくつてもいゝよ。若し君も、僕が近頃歩いたやうに、暗闇の中を歩いたら、ありや自分の足音の響が森閑としてゐる中に聞えるのだ、といふことが知れるだらうよ。それから僕は、自分等の前に、何だか黒い物影がうつつたのを見て、君が一二度ビクツとしたのを見た。ありやね、只自分たちの影が、生垣や石垣にうつるんだよ。さあ、僕の腕につかまり給へ、工合よく行けるから。』

グレナリンはラルフの胸に縋つた。そして二人は足早やに歩いて、二時間程たつと、夜が明けるまでに、まだ五六時間はあつた。それにバーク型船は、八時にならなければ出帆しないのだ。併しもう何處も閉ざされてゐたので、宿をとるわけに行かなかつた。そこでラルフはグレナリンに、牛小屋に眠らなければならないだらうといつた。

翌朝ラルフは船の出帆間際まで、目を覺まさなかつた。グレナリンを起すと、一しよに朝食のパンを買ひに、ライアズ港の小さい麥麭屋に行つた。それからすぐバーク型船、シイメイド號のところへ行つた。グレナリンは、二封度の金を持つてゐたが、十五シリングを支拂ひ、それから乘船して

からは出來る丈の仕事をするからといふ申込みに、船長はすぐ引き受けて、彼をリバプールまで乘せて行くことになつた。

十時には、シイメイド號は、スタート岬に向つて、可成り強い風を受けて疾走してゐた。ところがそれと殆んど同時刻にダグラス邸では、朝食がすんだところであつた。ダグラス氏は自分の書齋に引つ込んでしまつて、クリスティはラルフの訪ねたことや、やがて歸つてくるといふ兄の約束などを、母に話してゐた。そのしらせは彼女に恐ろしい衝動をあたへて、彼女は口へ出てくる傷々しい泣き聲を、抑へることが出來なかつた。

『まあ、そんならたつて行く前に、せめて一度丈私に顏を見せてくれてもよさゝうなものだ。ほんの少しの間でもよかつたから。ねえ、ラルフさん。——ねえ、ラルフさん！　ひどいぢやありませんか、ラルフさん！』

そしてくり返し、くり返し、くり返し彼女はつぶやいた。

『ねえ、ラルフさん！　ひどいぢやありませんか、ひどいぢやありませんか。』

『お母樣！　兄さんが仰つたことを、悉皆、きいて下さい。』

クリスティはかういつてから、ラルフが言ひ殘した優しい愛情をこめたいろ〳〵の傳言や、巢

い約束などを、眞心こめてくり返して話した。でもそれは甲斐がなかつた。ダグラス夫人は傷々しい、容易に治まらないヒステリーの發作を起した。その騷ぎをきゝつけた夫のダグラス氏は、遂に書齋から出て來た。

夫人は夫の顏を見ると、たゞ同じ文句ばかりしか言ふことが出來なかつた。そして夫人は何回も何回も惱み切つた語調で繰り返すのであつた。

『あなた！　ラルフはうちへ來たんですつて！　來たんですつて！』

彼の女の感情は、見る眼にも恐ろしいまでに興奮つた。それはダグラス氏のあの冷酷な、嚴格な心さへも動かした。ダグラス氏は妻の傍に膝まづくと、彼女に接吻し、彼女の前額を冷やしてやつた。そして人を慰めることには拙い人であつたが、あらゆる手だてを盡して、夫人をなだめたり、靜めようとした。併し彼女は靜まらないで、幾回となく同じことを繰り返すのみだつた。それは例へば、巢を失つた哀れな鳥が、その悲しみを表はすに、たゞ一つの節しか歌へぬにも似てゐた。

『あなた！　クリスティは昨日彼の子に逢つたのですよ——彼の子はこゝに來たんですよ！』

二十六

アラビイ邸に集つた多くの客人等は、グレナリンの姿が舞踏から突然に、かき消されてしまつたので驚いた。併しマーテンは、人々の疑問に答へて、グレナリン君はあまり氣分がすぐれなかつたんだから、非常に疲れでもしたので、家に歸つてしまつたのだと思はれる、と、只それ丈より答へられなかつた。會の終つた眞夜中をずつと過ぎてからであつたが、翌朝晩くなつてから、サー・ヘンリイ・アラビイが、朝の食事をしてゐる時に、例のグレナリンの、不幸な告白の手紙が着いた。此の手紙の中に、グレナリンは、誘惑の魔力に引きずられて、思ひがけもない罪惡を犯すやうになつたこと、又自分を欺いて、自分の本當の性質を盲目にしてしまつたことを述べて、事實を明かに少しも包み隱さなかつた。そしてその罪の露顯から來る恥かしさには、迚も耐へられないことを述べて、今夜家を飛び出してしまつたから、ヘンリイ卿に出來る丈、穩やかに、彼の犯した罪と、出奔の報道を、ロード・ドネリルに打ちあけ、母のない只一人の息子の爲に、父の憐憫と宥しを賴んで頂きたいと書いてあつた。

『一體どうしたんですか、お父樣。何かグレナリン君の身に起つたのですか。』

グレナリンの手紙だと知り、それから父の面に表はれた哀愁と驚呆とに氣がつくと、かう尋ねた。

『さうだよ。大變なことが起つてしまつたんだ。私は手紙の內容を、お前にきかせるわけには行かないがね。何分にもたゞ私とグレナリンのお父樣とだけに、全く任せるといふんだからね。併しお前はやがてみんなから、グレナリンが家を跳び出してしまつたといふことを聞きませうよ。』

『家を跳び出したのですつて！　まあ、まだ昨夜はあんなにしてたんだのに、可哀さうに、ラルフ・ダグラス君が聞いたら、自分の惡い手本が、もう眞似られたかと思つて、どんなにしかることでせう。』とマーテンはいつた。

『お定まりのことなんだよ。いつでもね。惡いことの力は非常に勢が强くつて、蔓延し易いものなんだよ、善いことの力よりはね。併し今は一刻も猶豫は出來ないんだ。勿論出來ることなら引き止めなくつちやならない。まだ、遠くへ逃げのびてはゐるまい。お前に出來るだけの問ひ合はせは、して見てくれ。ね、用もない噂は立てさせないやうにして。お前ならよく考へておだやかな處置が取れるだらう。私は直ぐ伯爵邸に馬を跳ばせなくちやならない。』

伯爵邸に着いた時、ロード・ドネリルは食事中だときいたけれども、直ぐ取り次いでもらうやうに願つて、直ぐ部屋へ通された。

『よう、ヘンリイ君。昨夜のお祭り騒ぎのあとだのに、貴君は僕よりも御勉強だね。グレナリンは貴君と同道で歸つて來ましたかしら。』と伯爵はいつた。

『いゝえ、令息はまだです。お食事がすんだら、直ぐ、緊急の事件でお話したいんですが。』

『事件ですつて！　子供の事ぢやないでせうね。』伯爵はそわ〳〵して尋ねた。

『御食事が濟んでからにしませう。』

ヘンリイ卿は召使たちの方をチラッと見ていつた。

ロード・ドネリルは召使たちに直ぐ部屋を立ち去るやうにと、合圖をした。それから心配さうに再び尋ねた。

『或る不祥な事が起つてるんですから、その都合でゐなくつちやいけませんよ、それは、あなたの心を非常に惱ますことなんですが。』とヘンリイ卿はいつた。

『さうですか。併しどんなことにしても、早く伺つた方がいゝんです。一體何なんですか。』伯爵は青くなつていふのであつた。

『よろしい。ではお氣の毒なことですが、可哀さうに、グレナリンさんは家を跳び出したんですつて！』

『跳び出したんですつて！』

さういつてロード・ドネリルは卓の上に立ち上つたかと思ふと、

『止めなくつちやならない——直ぐに止めなくつちやあ。四方に召使たちを馬で飛ばせませう。』

『まあ、お待ちなさい。』

ヘンリイ卿はかう叫んで、ドネリル伯が呼鈴を鳴らさうとする手を押へたが、遲かつたので、呼鈴はけたたましく鳴り渡つた。

『お待ちなさいといふのに。そんなにしちや大變なことになりますから。まだお話があるんですよ。』

呼びに應じて、クラークがやつて來た。而もその來方が呼鈴がなるとすぐだつたので、これまでにつて何時も此の男を信用しもしなかつたし、蟲が好かないと思つてゐたヘンリイ卿は、直ぐ、『こいつ戸口で窺み聞きしてゐたんだなと疑つた。またそれが事實であつたのだ。

『さしあたり用はないから、あちらへ行つて下さい。』

ヘンリイ卿は、手嚴しく顏を蹙めながらいひ放つた。そして伯爵が狼狽へて急きこんだあまり、伯爵にとつても亦息子にとつても、取りかへしのつかない失敗を演ずるかも知れないと見てとつたから、どん〳〵自分が先に立つて、

『それから君にいつておくことは、君はもう來なくてもいゝんだ。君に用事のあるときはさういつ

て呼ぶのだから。』

クラークが、こそ〳〵と逃げて行くと、ヘンリイ卿はいふのであつた。

『伯爵、失敬しました。どうも事件は貴方が多分想像も及ばない程に、難しくなつてゐます。が、今の奴があやつつてゐるのです。何處かぬすみ聞きなどせられないやうな部屋で、暫く、靜かにお話が願ひたいんですが。』

ロード・ドネリルは、自分獨りだけで使ふ書齋へ、ヘンリイ卿を案内した。この部屋こそは、ロード・グレナリンが罪を犯した當の部屋だつたのだ。そしてそこで、伯爵は悲しみやら、驚きやら、憤りやらに、心も轉倒しながら、息子が不幸な懺悔をさらけ出した手紙を讀み聞かされたのである。伯爵は生れてまだこれ程に心の苦しみを覺えたことはなかつた。その苦しみは、彼の心をおしつぶすやうであつて、この世に生きながらへる全ての希望が、一時に滅亡するやうに思はれた。

ロード・グレナリンは、その手紙の中に、クラークは決して僞造の事實を握つてはゐない。ただ疑をもとに威嚇するのであるといふ點を明かにして、ただ自分の擧動が、彼に疑が當つてゐるな、と思はせたかも知れない、と書いてゐるが、その小切手は、金とかへる爲に、銀行の方にはまだもつて行かれたのではない。そしてこれ迄にクラークがいろ〳〵と手をかへ品をかへての嚇し文句をきゝながらも、まだそれが僞造だといふことは、決して白狀しなかつた、といふこともヘンリイ卿に、明白に告げてあつた。その小切手は僞造だといふことを、信じてゐながら、それを使用しようと考へ、又それを種に若子爵を嚇して、尙此の上にも罪を犯させようとする考へを持つからには、クラークには少しも同情したり、斟酌したりすることは無い。今度の事件で、クラークの遣口はその性格が下劣極まることを暴露したのである。だから、顏のよいヘンリイ卿は、此處へ馬に乘つて來る途中で、どう處置すれば一番いゝかといふことを、ずん〳〵取りきめてしまつて、クラークを慈悲などかけるに足らぬ惡漢として、ちつとも容赦なくテキパキと處分するつもりであつた。

第一にやらなければならないことは、その小切手をこちらの手にとりかへすことであつた。第二には是が非でもクラークの口を留めて言ひふらさせないことだつた。

伯爵の心は、非常に動亂の狀態にあつたので、ヘンリイ卿は、自分が初めに考へてゐたよりも、もつともつと急いで事件をとり運んで、これ以上の不安をのける方が、得策だと思つた。實のところ、ロード・ドネリルはすつかり氣が挫けてしまつて、ヘンリイ卿の立派な品性と實行的の手腕とにすつかり寄り縋つたから、ヘンリイ卿は、兎に角、此の傷ましい事件が滿足な結着を見るまでは、あなたの側を去らないと約束をした。猶豫は勿論ならないので、ヘンリイ卿は、今直ぐにもクラー

クに會つて、出來れば彼の意志は何處にあるかを、見破りたいと申し出た。從つて、ロード・グレナリンに、出來る丈顏色と感情とを抑へて、その惡人の前では、自分の感情を洩らさないやうに、長年相手の誰彼を問はず、斃さう斃さうとかかつてゐる惡黨だから、決して油斷をしないやうにと賴んで置いて、呼鈴を鳴らしてクラークに主人からのお呼びだ、と傳へることを、召使の取締に命じた。

クラークが不本意ながら、二人の保安官の前に立つた時には、罪を犯した者の感ずる、あの疑惧の念が、下卑たクラークの狡猾な面にさへ、他人目に見とれるやうに現れてゐた。彼はヘンリイ卿のやうな、嚴肅な態度と、純潔な德操の備つた、崇高い人の面前に、出なければならないとは、思ひもうけないことだつたので、その前では、人からも感づかれるほどに氣を滅入らせてしまつてゐて、ヘンリイ卿に見られると、すぐ下を見ずにはゐられなかつた。クラークは今日の機會に於て、勝鬪をあけ、そして復讐もかなつて、同時に、一生遊んで暮らせる程の財產が得られることと、兼ねて待ち受けてゐたのだ。然るに、いよいよとなつて見れば却つて、膝がブル〳〵打ち震へ、苦しい蒼白の色が、顏に忍び出て、彼の兩眼は床の敷物からそりと、大抵は主人の顏を偸み見ることが出來ただけだつた。

伯爵に請はるゝままに、ヘンリイ卿はその會見の取りはからひを、總べて一身に引き受けたのであるが、彼は殆んど一分一厘をも曲げない斷乎たる態度ではあつたが、それと同時に靜かな優しい態度でそれを進めて行つて、非常に嚴肅な中にも、人を罵つたり侮つたりする態度はなかつた。

『君はロード・ドネリルの小切手を持つてゐませう。ロード・ドネリルから、可なりの大金を支拂ふ代りに渡された小切手を。それは幾枚かの證文の代りに渡されたのださうだが、君は證文を持つてゐて放さないさうだ。』

これはクラークにとつては、全く豫想だにしなかつた方面のことだつたので、彼は長い間無言のまゝ、本當のことを話して呉れゝば、私たちは有難いし、また君のためにもたしかになるのだから。』

儘ぢつとしてゐると、ヘンリイ卿は更にくり返していつた。

『君はその小切手をもつてゐるか、ゐないのか。それに答へるくらゐは何でもないでせう。』

『左樣で御座いますか、ハイ、もつてゐます。』クラークは澁々ながらいつた。

『それで今まで、それを持つてゐたんだね。』

クラークは少し躊躇つてゐたので、ヘンリイ卿は靜に附け加へていつた。

『た〻、本當のことを話して呉れゝば、私たちは有難いし、また君のためにもたしかになるのだから。』

『左樣で御座います、持つてゐましたんで、若樣が御手づから渡して下さいました。』

その答は本當に意味あり氣で、チラと伯爵の方を見やりながらされたのである。

『その通りです。そのことは、私たちはよく承知してゐる。そして、君はその小切手を使用するつもりでゐますか。』

靜かに、ヘンリイ・アラビイ卿がいつた。

『左樣で御座います。いけないので御座いませうか。』

クラークは金を失ふのを恐れ、『先の百より今五十』の主義から、躊躇せず、テキパキと答へた。

『そんなら、その小切手を金にかへたいと思つてるんだね。』

『左樣でございます。』

『なるほど、よろしい。さあ、それをお出しなさい。』

クラークは躊躇つた。

『いや、君の勝手なんだから、君の好いた時に、何時でもそれを出しさへすればいゝんです。さうすりや、すぐ金にかへて貰へるからね。だけれど、君の出來る間にその金を受けとつておく方が、君の爲には便利だらうね。何故つて、どうしても、君には今日此の邸を去つて貰ひますから。兎に

角、君がどんな手段にその小切手を手に入れたかは、聞かれない方が君の爲めだかも知れない。』と從男爵はいつた。

『先刻申し上げました通り、若樣がお手づから下さいましたのです。』とその男は拗ねて出て來た。

『で、そのことについちや、私たちもよう承知してるんだと、さつきから言つてるぢやないか。』

ヘンリイ卿は答へた。それから伯爵に向つて、

『閣下、此の男が小切手をどうしませうと、ちつとも構ひませんね。今出して金と引きかへましても、今出さないで、好いた時に銀行に持つて行きましても。閣下からは、もう此の男に御用はありませんか。』

『何もありません。只その男にいつておくことは、長くも二時間半たつたら、もうこの邸から暇をとつて貰ひたいんです。』

『二時間ですつて、御前。』

『二時間だよ。よいか、お前の給金は、すぐ執事に拂はせるから。お前の荷物を纏める閑がないならば後から、送りとどけさせよう。』

『二體、どんな不調法を私が仕出かしたんですか。』

「深く立ち入つて、穿鑿しない方が、君の爲だらうぢやないか。」とヘンリイ卿は意味あり氣な語調でいつた。

「小切手を僞造なすつたつて、私の所爲ぢや御座いません。」

これはクラークが、とつときの最後の一矢であつて、彼はこれを大膽に又不遜の態度で射出したが、二人の聽き手を忽ち壓倒するだけの勢があると思つたのである。

「小切手――一體どの小切手なのだ。――君が今話してゐたその小切手かへ。君が使用する心意だといつた？」

ヘンリイ卿は靜かに尋ねた。それから、再びロード・ドネリルの方を向いて、彼はいつた。

「閣下、こりや容易ならんことです。あなたも私もこの者のいふことを書きとめておいた方がいゝでせう。さあ、クラーク、お前さんの言分は、どの小切手なんです。」

「あの若樣がお渡し下さつた百五十封度の小切手だと信じますといつてゐながら、その小切手を使用する心意でゐたんだね。よろしい。その通り書きとめたよ。それから、證文の代りに小切手を受けとつておき乍ら、明かにその證文を二度役に立たせる意志で返さなかつたのだね。それではお前

は。」といつたが、ヘンリイ卿は椅子にそり返つて、ぢつとクラークを睨まへながら、「只これだけで他のことはいはないでも、君は最も重い罪を犯したのであつて、實際、十分法律に觸れてゐるんだ。」

クラークは、ヘンリイ卿が眞劍でいつてるのを見て取つた。そして相手は飽くまで初志を屈げないこと、そして容赦なく斷乎たる處置に出る人だといふことを感じた。亦、若し彼の過去にやつたこれ以外の多くの事に就て、少しでも詮議立てをされるならば、その結果は彼の身にとつて由々しいことになるだらうといふことも知つた。それからまた、年端が行かず、世馴れないグレナリンを嚇すのには、うまく成功したものの、さて自分はグレナリンが僞造をしたといふ證據は、毛ほども握つてはゐないのであつて、あの小切手を種に、うまい汁を吸はうといふ希望は、此際綺麗に捨ててしまはなければ、自分の言分は決して通されないことを知るだけの智慧はあつた。グレナリンの家出は立聞きしてしつてゐるし、その代りにヘンリイ卿と掛合ひする考は少しもなかつたのである。そこに怖えてぐづ〳〵と立上ると、心に咎めるところがあるから起つてくる意氣地もないさまだつたが。遂に吃りながら、その小切手が僞造かどうかは知らないといつた。

「よろしい。さう書きつけました。閣下は證人ですよ。この男の持つてゐるあの小切手は僞造されたものか、どうか此男は知らない、と、此の男が明かに言つてることの證人ですよ。さあ、クラー

ク、もし此の小切手に對する金が入用だといふなら、すぐそれをお出しなさい。そこに持つてるだらうと思ふが、持つてますか。是非それは現金に引きかへなさい。出來ろうちに。さうしてすぐ此の地を立退くがよろしい。』

クラークは一言の答もなく、その小切手を差し出した。ヘンリイ卿は、それを指の間で挟んだが、クラークは手を離さない。

『よろしい。私はちやんと金を用意して來てゐるんだ。貰つておけるうちに貰つて置いた方がいゝ。さあ、これから受取をかくから署名をなさい。併し若し、その一枚の紙片をもつてゐて、身を滅ぼしたければ持つてお出で、そりや勝手だよ。誰も強ひて手離させようといふんぢやないから。』

クラークのさもしい心には、紙幣を見ると堪へられなかつた。小切手を卓の上に置いて、金に代へて貰ひたいと請求した。

『一寸お待ち。』

ヘンリイ卿はその小切手を卓の上に置いたまゝにしていつた。

『勿論、證文も出して、それに棒を引つぱつて、それから受取書に正式に署名するまでは、金を受けとるわけには行かないんだよ。』

クラークは蒼白になつて怒り、何か毒づきながら、證文を出さない。併しヘンリイ卿はやがて彼を落ちつかせた。

『そりや君の勝手だがね。法律上はその證文の署名は無效だよ（證文の署名は、グレナリンであつて伯爵ではなかつた。）その上、證文の中には贋物もあると疑つてるんだ。見分けるのは六ケ敷くはなからうと思ふ。』

この攻撃は的中したので、此の男の犯罪は、顔の中にすつかり描き出された。彼は自分のやつて來た邪惡な手段をすつかり思ひ運らして見たとき、もはや我が惡計もこれまでであつて、自分はすべての點で、抜つてゐたことを知つた。さうなつて見れば、ヘンリイ卿の前にゐること丈でも、ブル〳〵震へて來た。そしてヘンリイ卿の眼は、自分の惡計のどん底までも見抜かんばかりに思はれた。クラークは、どうせ敵はぬ爭から、これだけの都合のよい條件で手を引くのを非常に喜んだ。

『お金を頂き度ふ御座います。』

クラークは小切手の外に、借用證文をも並べていつた。

ヘンリイ卿は、どんなことを引きおこすやも知れないと、氣を揉ませ上げたその小切手を、卓から取り上げると、ロード・ドネリルの手にそれを渡した。そしてクラークがその紙幣を數へてゐる

ときに、ヘンリイ卿は、綿密に證文を調べ出した。クラークは、ロード・ドネリルと從男爵とが、クラークが偽つて、こしらへた而も一寸見てすぐ分るやうな、不細工な贋物のを三枚、すぐ見つけ出したことを見てとつた。併し二人は此の三枚の證文とは離しておいただけで、これについては、別段何ともいはなかつた。

『勘定は間違つてゐないかね。』とヘンリイ卿は頭をあげて、クラークが金を數へ終つたときに尋ねた。

『間違ひは御座いません。』

『そんなら此の受取證に署名なさい。それでよろしい。どうかペンを拭つて下さい。もう一言だけつけ加へて置きませう。私から、君の爲を思つて勸めるんだが、君は自分の口から、今度の一件に關する君の祕密をいはないやうになさい。おしやべりをすれば、君自身の上に容易ならぬことがふりかゝつて來るんだよ。御覽、私はかうして證文を保つておきます。特に此の三枚は氣をつけてね——私はもう此の男に話すことはありません。閣下は？』

ロード・ドネリルは怒に慄へる聲でいふのである。

『さう、一寸いひませう。お前は今金を受けとつたね。執事はすぐお前に一季分の勞銀を支拂ふだらうから。では確と聞いて貰ひたい。——これから二時間たつたら、此の邸内のどこにも姿を見せないやうに。もし二時間たつて愚圖々々してるなら、すぐお前を追拂はせるから。そしてお前がどんなに罰せられても、私は知らない。一體、お前は罰せられる値打は十分にあるんだ。』

その男はすぐ部屋を出て行つたが、部屋の戸がしまるや否や、ロード・ドネリルは氣が揉める樣子で、その小切手をずた〳〵に引き裂いてしまつて、それを暖爐の眞中へ投げこんだ。

彼はすぐ立ち上つて、ヘンリイ卿の手を固く握つて云ふのであつた。

『一番の心配が拔けました。ヘンリイさん、あなたは、私の一生の中の一番苦しいところを、御覽です。私は今日のことは、死ぬまで忘れません。そして臨終の際には私は今日あなたから助けられたことを思ひ出して、深く有難く思ふこゝでせう。ヘンリイさん。私も屹度今日から色々の點で、生れ變つたやうになつてお目にかけませう。』

恐れて縮み上つたものの、無事に金を手に入れたことをせめてもの慰めとして、クラークは、大あわてにあわてて、急いで退出したのであつた。そして下男部屋に歸りついてから、始めてふだんの元氣と、不遜とが恢復しかゝつた。ところが、そこで仲間たちが彼を迎へた態度が、再び彼の心持をかき亂した。グレナリンの出奔の噂は、例へば野火の擴がつて行くやうに忽ちに知れ渡つてゐ

た。一體悪いことの噂は、不思議な速力で擴まるものだ。召使等は此の不幸の眞當の原因を知らないので、それをクラークのいつもの不正と無能とに歸してゐた。クラークは皆が怒つて自分を睨んでゐるのや、表面にあらはして自分を毛蟲のやうにあしらふのを、見違へることは出來なかつた。

クラークは『勇氣には分別が大切』といふ諺を考へ出して、爭はずに急いで退却した。彼は執事から一季分の勞銀を受けとると、馬車に入口まで迎へにくるやうにいつて遣り、そして荷造を終へると、大した勢で出て來た。そして彼の最も立派な身づくろひを見せつけて、俺は勝ちほこつて出て行くのだぞ、といふ強い印象を與へようと心組んでゐた。彼は、方々で別れの挨拶に二言三言侮辱の言葉を發したのに、皆からニヤ〳〵笑はれたので、少し當が外れた感じがした。併し、この氣味惡い微笑の外には、次にどんなことが、彼を待設けてゐるか幸にも知らないでゐた。ところが、彼が馬車のところへ來るか來ないかに、召使仲間の一群にバラ〳〵と取圍まれ、人は分らなかつたが、その中の誰彼につかまへられ、目隱をして、中庭のボンプのところへ、大急ぎで連れて行かれた。そこで、彼は猿ぐつはを通して、頼んだり、毒づいたりしたけれど、多勢からぶつ續けに、水をかけられたので、クラークの衣服は、びしよ濡れになつてしまつた。この有樣で、馬車へ投げこまれ、恐れと怒りで、はつきり口も利けないながら、いつかは仕返しを見せてやるから、といひい

ひ、ドネリル邸を追放になつたのである。

二十七

一方、マーテンは決してぼんやりしてゐなかつた。彼は第一に、アルトンに馬を飛ばせて、ロード・グレナリンが停車場から汽車でたつたかどうかを調べようと考へた。それは、グレナリンがロンドンをよく知つてゐるし、また用もないのに苦しむ少年でないことを、マーテンは充分に知つて居たからである。

ところが、母屋を廻つて厩へやつて來るとき、マーテンの目は、客間の窓際の雪の上から始まつて、邸から外へ拔ける小路の上についてゐる二人の足跡に引きつけられた。二人の足跡は明かに少年のそれに違ひなかつた。そしてそのうちの一人のは、ロード・グレナリンの靴の形だといふことを、はつきりマーテンは識別けることが出來た。併し、雪の中の足跡は、庭の垣から先は、後をつけて行くことが出來なくなつてゐる。垣根の外を本道が通つてゐるが、二人の逃亡者が何方へ逃げたのか、全く知るよすがはなかつた。

二人の逃亡者。とはいへ、それではグレナリンと一しよだつたのは一體誰だらう？マーテンはそこに考へを向けると、殆んど疑ふ餘地は持たなかつた。その足跡は正しく少年に違ひなかつたのだ

から、たとへマーテンは、ラルフが近所にゐたのを知らなかつたにせよ、グレナリンが一しよに行つたのは、ラルフをおいては、外にないと思つた。彼の心の上に、その確信が起り初めるにつれて重苦しい落膽の念が、彼を襲つてきたのである。

不安の念に滿ちて、マーテンは小馬に股がると、ダグラス邸に走せ向つた。建物の日當りのよい側の鋪道を、クリスティが往きつ戻りつしながら、散歩してゐる。書物を手にしてはゐたが、それを讀んではゐない。そして弱いがキラ〳〵輝いてゐる冬の陽の光を浴びて、只ブラ〳〵と歩いてゐるさまは、いかにも寒さうに見えた。それでもマーテンは、クリスティの顏が、この前會つた時よりは、ずつと希望に滿ちてゐると思つたので、苦しめるやうな話を、話さなければならないと思ふと、堪らなく嫌になるのであつた。

クリスティはマーテンを認めるや否や、嬉しさに晴れやかな表情になつて、小門のところまで馳せつけて來た。マーテンは駒を垣にしつかり繋いでおいて、彼は握手しながらいつた。

『クリスティ君、君の樣子はまたもとの通りになりかゝつたと思ふよ。』

『僕もさう思つてますよ。』

『そんなら、ラルフ兄さんからでも、便りがあつたに違ひないね。屹度。』

「それどころか、もつといゝことなんですよ。』とクリスティは微笑み乍らいつた。
「一體どうしたの——話さなくつてもいゝのなら。」
「僕ね。兄さんに逢つたんです。」
マーテンは最も恐れた疑念が、確かめられたので驚いてしまつた。
「逢つたんだつて——何時のこと。」
「昨日の朝。」
それからクリスティは、ラルフが歸つて來た一部始終やら、いかにおそくなつても一年もたてば、多分、六ケ月程さへたてばいゝと思ふのだが、その時には彼は再び家へ歸つて來て、若しお父さんがいやだといはなければ家に止まると、眞面目に約束したことなどをかいつまんでマーテンに話してきかせた。ラルフにとつては、いつもあれ丈友情の熱かつたマーテンのことだから、此のいゝらせをきけば、喜ぶことだらうと豫想してゐたのに、マーテンは却つて、それを默つて、そして悲しげにきいてゐるやうに見えた。そしてマーテンの口から出た批評はたゞこれ丈だつた。
「ねえ、クリスティ君。」
「ねえ、六ケ月なんて直ぐにたつてしまふでせう。それに、兄さんはそんなにたゝなくつたつて、

歸つてくるに違ひないんですもの。』とクリスティはいつた。
「そんなことぢやないの。クリスティ君——そんなことぢやないんだよ。』
「どうしたの、一體どうしたつていふんです。』
「僕ね、君に話したくはないんだよ。君、グレナリン君も家を飛び出したんだ。それが、ラルフ君と一しよに行つたのだと思ふと、僕は悲しくなるんだ。』
「兄さんと一しよにですつて！　まさか、どうしてそんなことが信じられるものですか。兄さんは、僕と昨日お晝頃には別れてゐるんですもの。それに、マーテンさん、兄さんがグレナリン君と逢つて行くやうな心意でゐたのだつたら、僕にそれを屹度話してくれるに違ひないと思ひます。』
マーテンが、たゞ頭を横にふつてゐるので、クリスティは言葉を續けた。
「君は、まさか兄さんがグレナリン君を連れ出すやうな、そんな惡いことをするとは思はないでせうね。』
マーテンは、邸の庭で見て來たことを詳しく話し、そしてラルフがこゝへ來たといふ事實によつて、自分の強い、そして當然な疑ぐりが、いかにも中つてゐるさうに思はれるといつた。
クリスティは暫しの間は默つてゐたが、その感情の現はれ易い顏は、彼の心中の苦しみを語つた。

「成程、困つたことに違ひないですけれど、僕は兄さんを知つてゐます。兄さんにはそんなことは決して出來ません。何か後にひそんでゐるに違ひないんです。君は兄さんを捨てゝもかまひません。そして惡い奴だと思つたつていゝんです。僕だけは、さうは思ひません。兄さんは金より堅い人です。何時かは分るでせう。』

クリスティの兩の瞳は、涙にぬれて輝き、その聲は語り乍らに打ち震へてゐた。マーテンは哀れなその蒼白い顏色を見ては、ひどく感動して同情の念をおこしたのではあるが、ラルフが重い罪と思はれる罪を、犯して居るのを赦すことは出來なかつた。

『君は、僕がどれ程ラルフ君を好いてるか知つてるでせう。だから、此の事があつたつて、僕がラルフ君を愛する心は、少しも變らないんだよ。併し、クリスティ君、僕は近頃、ラルフ君の心は亂れてゐるのだと思ふ。家を跳び出すといふ罪を犯してから、良心が顚倒したんでせう。ねえ、泣いちやいけない。僕等は皆でラルフ君を引き戻すやうに骨を折らなけりやならない。兄さんは別れるときに、何處へ行くのだといつたの。』

『兄さんは、たしかには話してくれません。けれども、兄さんは畑を抜けて行つたんです。此の向ふの。』

『うん、分つた。その路はライアズ港へ出る途なんだ。僕はたび〳〵ラルフ君とあの港へ行つたことがある。これから馬で行つて、出かけたかどうか、詳しいことを調べて來よう。クリスティ君、失敬するよ。元氣を出してね。』

『元氣を出して』とはいふには容易いが、事實クリスティの心は沈んでしまつた。そして、心持が透き通るやうにあらはれる彼の顏は、彼の心の切なさを現してゐた。ダグラス夫人はすぐにそれに目をとめて、クリスティを側に引きよせたが、ラルフのことでなければ、そんなに深く心を動かすわけがない、と思つたので、問ひかけた。

『何か兄さんのことで、また困つたことがあるの。』

『えゝ。』

『どうしたんです、又兄さんに逢ひでもしたの。それとも兄さんのことを聞かされたの、クリスティさん、若し兄さんが此の近くへでもゐるんなら、お願ひだから、兄さんをお母さんの所へつれて來て頂戴——兄さんをつれて來て頂戴。』

『兄さんは行つてしまつてゐないんですよ。兄さんは昨日たつたんです。だけれど——』

クリスティは顏を掩ふと、涙は彼のピツタリとくつつけた指の間から、湧くやうに流れ出た。

「だけれど、それから先はどうしたの。」

『ロード・グレナリン君までが家を出たんですつて。そして皆で兄さんとグレナリン君は一しよに逃げ出してゐる。そして兄さんが、グレナリン君を唆したのだと思つてゐるやうなんです。可哀さうです。兄さんが可哀さうです。みんな、兄さんを敵のやうに見るんです。誰一人として兄さんを愛して上げる者はないんです。』

『私達が兄さんを愛してますわ、ね。私たちだけは兄さんを信じてます。何んで皆はそんな噂を立てるのでせう。』

クリスティはマーテンの話を母に話した。夫人は出來る限り、クリスティを慰めてやつた。——神々しい、母子の本能的の愛に充ちてゐたので、彼女は一すだつてラルフの正直なことを疑はなかつた。ラルフの潔白だと思ふ信念に、一すのゆらぎさへも感じなかつた。そして全てのことが明かになつた曉には、ラルフの潔白なことも分つてくるだらうと、心の中で信じ切つてゐた。併し、今新しく起つた事件も確に苦しい打撃であつて、二人ともそれを強く感じたのである。二人はダグラス氏と夕食に顔を會はしたときには、ダグラス氏が早くもグレナリンの出奔のことを聽知つてゐるのが分つた。而もそれがラルフの惡例にならつたのだといふ評判だとさへ聞いたのである。ダグラ

ス氏は腹立たしけに、物一つ言はなかつたが、併し二人はその時、こんな氣がしたのである。父は氣位が高くて外にはあらはさないが、心の中ではいくらかラルフに同情するやうになつた。殊にラルフがみんなから批難の種となり出してから、一段とさうなつたやうに感ぜられた。クリスティはマーテンから聞いたことを是非なく父に話すと、父は非常に驚いた——驚くと共に悲しんだ——併し父でさへも、自分はラルフを充分知つてゐるが、人を唆かして罪を犯させるやうなことは、萬ないといつた。

マーテンは、ダグラス邸を辭してから、ライアズ港に眞直に馬を飛ばせた。そして、そこではいろ〳〵と尋ねた結果、彼の豫想が當つてゐたと思ひ込んだ。二人の少年は、ところの人たちの目にとまつてゐた——二人の內一人は非常に身なりがよくて、もう一人の方は普通の衣服を纏つてゐたが、それでも、矢張樣子に紳士の息子らしいところがあつた。二人は今朝リバプールに向けて出帆したシイメイド號に乘り込んで、こゝを立つたといふことであつた。

マーテンは最早や心に少しの疑ひの起らぬまで、充分に聞き合はせてしまふと、家路に向つて馬を驅つた。日はずつと前から曇つてゐたが、やがて短か夜の帷は、すでに落されてしまつた。頭髮は濡れ、亂れ、外套の上には一面に厚く雪が積つて、彼は一直線に客間にはひつて行つた。

それは料理番から家の人々が、彼のことを案じ出したと聞いたからである。マーテンはそこに亦ドネリル卿をも見た。皆に氣遣はせまいと、かへつたことを言ひ置いて、着替へに二階にかけ上つた。降りてから大切な報告を話すと、二人の紳士は、苦しい思ひをしながら熱心にきゝ入つた。ラルフが連れ出したらしいのを、二人とも遺憾に思つた。それは、これが爲にグレナリンの過去の色々の不始末と何か關係があるやうに思はれるのを、恐れたからである。グレナリンの不始末といへば澤山あつて、家を飛び出したことなぞは、前後の事情からいへば、最も輕い不始末だと伯爵は考へたのである。

ヘンリイ卿の計畫はすぐ定められた。それは、ドネリル卿と一しよで、それに若しダグラス氏も同道したいといふなら、ダグラス氏をも加へて、リバプールに向けて出發し、そこでシイメイド號を待ち受けて、少年たちを家につれ戻るといふ手筈だつたのだ。一刻も猶豫すべき時でないから、翌朝出立することに手筈をして、すぐ使をダグラス氏のところへやつた。さうして彼等が聞いた一部始終をダグラス氏に告げ、同行する考の有無を尋ねさせた。

使の者は、ひどい吹雪の中を馬を走らせて、ダグラスからの心からの感謝と、同行を熱望する旨の返事を持ち歸つた。

『僕もお父樣と一しよにつれてつて下さるでせうか。』

マーテンは、伯爵が辭し去るや否やいふのであつた。

『連れて行くとも。喜んでね。お前は今日は大變な骨折をして呉れたんだもの。私の最も近い二人の隣人がかうしたひどい困難と心配とに苦しんでるのに、私の長男は、かくまで慰安と幸福との源になつてゐる。それを思へば、私は幸福で、神に感謝しなければならない。』

ヘンリー卿は手をマーテンの頭の上に置き乍らいつた。

マーテンはすぐ父の顏を見上げた。

『そりやお父樣がしよつちゆう僕を愛して下さるし、本當に親切でよく面倒を見て下さるからなんです。』

マーテンは低いそして溫和しい語調でいつた。

『一しよにおつれ下さるのは、僕本當に嬉しいんです。邪魔にはならないで、お役に立つやうにします。』

ところが、翌朝になつて、彼等の豫定を變へるやうになつた。ライアズ港の海岸守をしてゐる男は、もとヘンリイ卿の邸に雇はれてゐた。その男が風雪の中を態々邸へ訪ねて來て、シイメイド號

のことについて、色々知つてることを話したが、かうした暴風が何時間も續いてゐるんだから、シイメイド號の航海を續けるのは迚も出來ない。屹度シアグラス港に避難しただらう。その港は、ここから六十哩程離れてゐて、あの嶮しい海岸が長い間續いてゐるところで、避難所と名のつくものは唯一つきりなんだから、といふ此の男の話を聞いて、一行はリバプールに向ふのをやめ、シアグラス港に向つた。

二十八

最初シイメイドの舟路は、例へば行路難に於ける初めのうちの下り坂といつた樣に、晴れやかに景氣が好くて、極く穩かなものだつた。爽かな海波は、冬の陽光に、にこやかに笑ひ、キラ〳〵と輝くのである。そして船は、一羽の美しい海鳥のやうに、白い帆には風を孕んで、華かに波の上を躍り進んで行つた。——船首には花環なして水泡が巻き上り、赤紫色の海水は船側に、ヒタ〳〵と音樂を奏で、漣を作り、舐めるやうに洗つて行くのであつた。

ラルフの船小使としての仕事は、初めのうちは苦しいといふ程のものではなかつた。そして、どんな用事もハキ〳〵と喜び勇んでやつたし、グレナリンにしても、ラルフと一しよになつて甲斐甲斐しく立働いたので、乘組員はみな、二人にやさしくよくして呉れた。

併し、この航海の喜も、束の間に過ぎなかつた。一刻一刻と風が募つて來た。——微風から疾風に、疾風から暴風に、暴風から颶風に、だからまだ三時間と經たないうちに、浪は高くなつて、前甲板といはず後甲板といはず、洗ひ去り、四方八方におひかぶさつてきて、物を浚つて行くのであつた。

短かい陽の光はかくれて、空は一面に黒雲で覆はれてしまつた。乘組んだ者は誰も打ちつけてくる浪をかぶつて、肌までびしよ濡れになつてしまつた。そして眼もあけられぬ程の雪と霙とが混り初めて、怖しい勢で彼等の面に打ちつけてきた時には、船から僅の距離にあるものさへ、何が何やら殆ど見分けることすら出來なくなつてしまつた。やがて暴風雨の中に日は暮れて、四邊は眞黒となつたから、船長は船を止めて、錨を下し、そして出來ることなら夜明けまで停止したまゝ、暴風雨を肋がうと思つた。

併し、明け方、錨の綱が斷れてしまつたので、彼らはその暴風雨の中を衝いて、航海を續けなければならなかつた。前部の中檣帆の桁は、既に折れた上に、その中檣帆さへ吹き飛ばされてしまつてゐるし、それにかうして疾風の場合の常として、帆はその縫目が切れて、すつかりずた〳〵に裂けてしまつてゐた。乘組員の運命は、非常な危險に瀕してゐるといふ感じが、誰も彼もの頭に、明かに浮んでゐた。船の凌材は、揉み立てる浪に打たれて、歪んで來て、呻吟するやうに鳴り、ミシリ〳〵と軋んだ。皆の只一つの望といへば、それはシアグラスに避難することであつた。同じく遭難した他の船も、もはやその港を指して進んでゐた。ところが、その夜のうちにシイメイドには大きな漏口を生じてしまつた。水をかへ出しにかゝつた水夫等の、あらん限りの努力も、船の腹にどん〳〵這入つてくる水を、くひ止めるには、殆ど甲斐ない有樣だつた。幸福にも、その船長は沈着で、手ぬかりなどのない人で、初めから終りまで、最善をつくした。その命令に從つて、船員等は元氣に立ち働いて、船を救ふ爲には少しの手ぬかりもなかつた。

シイメイドのボートは、ずつと前に吹き飛ばされてしまつた。船は手不足だつた。といふのが、少い船員等のうちの二人は、既に波の爲に船からさらはれたのである。併し殘つた船員等は、ラルフとグレナリンとも加はつて、男らしく各自の義務を果してゐた。運轉士ともう一人の水夫は、舵手をつとめてゐた。そして、まだ安全だといふ望を抱いても差支ないやうに思はれた。併し今になつて見れば、恐しい海は、恐しい烈しさで船の鐵板の上に打ち上げて來て、雷となり、舵輪を粉碎して、船緣（甲板よりは上の部分）の一部を衝き抜き、前記の勇敢な元の舵手を働けないやうにした。もう手の施し樣もなかつた。シイメイドは風と浪とに揉まれる一個の廢船にすぎなかつた。そこで、船長の命令によつて全船員は絶望の努力をやつた。そして、折れた帆桁や裂けた帆布や、切れた綱などの、ごちや〳〵に絡み合つたところへ一同引込んでゐた。

二十九

ラルフとグレナリンとは甲板の上で、氷のやうに冷え、慄え、肌までも濡れ徹つて、刺すやうに冷い霙のために、殆んど眼もあけられず、氷つてツル〳〵と滑る圓材に並んでしがみついて、絶えず咆哮する波浪に洗はれてゐた。彼等は今迄、英國の勇敢な少年にふさはしく、持ちこたへて來たのであつた。そして今は、到底免れられない恐ろしい死が、突然迫つたのである。それに落ついて立向うのは、容易ではなかつた。ラルフは今になつて、家出したその罪と心得違ひとが、いかにも強い明るい光りで、パツとラルフの目に映されたのである。又グレナリンは過去の生活はいかにも輕薄なものであつたが、終りは我儘な、恥づべき罪を犯すやうになつた、その過去の輕薄が目ざめて、恐れ戰く良心にははつきり映つて、どんなに苦しかつたであらう。二人が逃げ出して來た家と、棄て去つた親兄弟の愛、無分別にも投げやつた家庭の慰安と保護とは、どんなに輝かしく、どんなに平和に、どんなに幸福なものに見えただらう。ラルフはグレナリンよりも遙かに落ついてゐた。彼は默禱を捧げてゐるのに、グレナリンは堪え難い苦しみから發する誓ひの言葉と祈りとを、聲高らかに言はないではゐられなかつた。その祈りと誓ひの聲とは、颶風の切れ目、切れ目に水夫

の耳にはひるのであつた。

船長は二人にいつた。

『さあ、お祈りなさい。お祈りなさい。お前さん方あ、ひどい皮切りをやつたもんだ。家にゐた方がよかつたんだね。私はこれまで、度々と危險な場合や難破にも出會してはゐるがね、こんなにひどいのは始めてだ。』

たうとう一同の運命の危機が迫つて來た。船は續けざまに打たれ、破されてゐて、乘組員等は、今にも水底へ沈むかと繩えず豫期してはゐたけれども、それでも或は持耐へたかも知れなかつたのに、突然、軋むやうな、碎けるやうな、摩れ合ふやうな音が聞えた。身内もふるへる音、それは經驗のある人でなければ、迚も分らない音であつた。途端に、ぐら〳〵つと衝動を感じて、船首の材木が引き裂けたかと思ふと、舟は隱れてゐた暗礁の上に投げ上げられて、ギザ〳〵に割れたその裂目に、礁がピツタリ挾まつてしまつた。物狂はしい叫びが、船員の口から擧つた——それは口にされない絶望を語る叫びである——そこで、遂にシイメイドは望みのない難破船となつてしまつたのである。

グレナリンは飢餓と良心の苛責におそはれ、尚それに半ばは凍えんばかりとなつて、齒は寒氣と

恐怖さにガタ〳〵と鳴らしながら、ラルフの側にピッタリよりそつて、彼の援けを乞ふた。ラルフはさわがず、自己の心をよく抑へながらグレナリンを勵ますことにつとめた。そして、片手をのばして、グレナリンをしつかりと抱へ、片手は、自分の身體をさゝへる爲に、鐵棒の一つにつかまつた。若しかうした援けがなかつたならば、グレナリンのぶる〳〵と震へ、力の抜けた兩手は決して身を支へることが出來なかつただらう。たゞ身體を支へられたばかりでなく、ラルフの取り亂さない態度を見てグレナリンは、多少恥しく思つて泣叫ばずに、時々は彼の心に、微かな希望と勇氣の光りとさへ出たのである。

『ねえ、ラルフ君、逃れる望みがちつとはあるのだらうか。』

彼は小さい聲でいつた。

『どうかね。僕はあると思ふんだけれど。外の船が僕等の難船を見たに違ひない。シアグラスへ行つて知らせるだらうが、シアグラスには救助船があるまい。それから、燈臺でも僕等を見たかも知れないね。さうすりや救ひに來てくれるだらう。たゞ危險なのは、助けが來ないうちに、船が碎けやしないか知らん。』とラルフは言つた。

『僕はもうこらへられなくなつた。僕は氣持ちが惡いし、疲れてゐる。』

『そんなに强くつかまらなくつてもいゝよ。波がやつて來る時の外は、元氣を出してね、神樣のお助けを祈り給へ。』

『ラルフ君、僕等二人の爲に——いゝえ、皆の爲に祈つてくれ給へ。』

ラルフは聲は低かつたが眞情のこもつた聲で祈つた。

『神樣。吾等の父上。私等の危急をお助け下さい。若し出來ませんならば、私等の罪の全てをお許し下さい。私等に死に方をお教へ下さい。さうして、死にます時にはどうか神のみもとにお招き下さい、キリストの御名のために。アーメン。』

グレナリンは默つてゐた。大きな白浪は、暗闇の彼方から、燐光のやうに波頭をキラ〳〵と光らせ、泡立て乍ら押しよせて來て、マストを、例へば葦のやうにぐらつかせ、打ち震はせて、瞬間にそれがポキツと折れでもするかのやうに、キイ〳〵と鳴らすのであつた。ラルフでさへも戰慄を全身に感じた。といふのは、彼はグレナリンの見とめなかつたものを見とめ、グレナリンが耳にしなかつたものを耳にしたからであつた——水に落ちて行く人影、微かな叫び。それがほんの一瞬間、波の表に一つの黑點となつて、可愛さうにその船員はさらはれて死んだのだ。

『もうあんまり永くは續かない。』とラルフがいつた。

「ねえ、ラルフ君。あの恐ろしい、恐ろしい奈落の淵に投げ込まれるんだね？」

グレナリンは海面を見下しながらいふのであつた。

「その暗い渦の底にまきこまれて、埋もれてしまふなんて……」

「見下しちやいけない。恐くなるだけだよ。元氣になれる法なんかゞあるの。」

「こんなときに、元氣になれる法を教へようか。」

「丁度今、お母さまと弟とが僕——ことによつたら僕たち二人のことを、屹度祈つてゐてくれるんだ。」

「だつてどうしてそれが分るの。」

「今、船長さんが九時だといつたね。九時には僕のことを思ひ出して、お祈りをして呉れる約束になつてるんだよ。」

「まあ、君は神樣が私たちを御覽になつてゐながら、こんな海を荒れさせるなんて、信じられるかね。」

「僕は信ずるよ。そして僕は又、お母さまや弟などのやうな、あゝいふ心からのお祈は、神樣が屹度お聞き下さるに違ひないと思ふ。」

「なるほどねえ。ラルフ君！　君のいふことを聞いて、僕の心に希望が出て來た。あゝ、若し神樣が助けてさへ下さるなら、僕はどんなにか變つて見せよう。僕のこれまでの行は、何といふ愚かな、何といふ惡い行だつただらう。いよ〳〵死ぬといふ場合には、こんなに不思議な、こんなに恐ろしいことが頭の中に浮んで來ることが前以つて分つてたなら、これまでのやうな行は、決して出來なかつたでせう。ラルフ君！　こんなに年が若くて、こんな色々のことを知る間もないうちに死ぬなんて、耐へられないやうに思はれるね。』とグレナリンはいつた。

喜悅と驚呆とから來る、聞く人の心にしみ透るやうな叫びが、ラルフの唇をついて出て、全ての乘組員の注意をひいた。

「ボートが見える。左舷の方に——小帆船だ。こちらへさしてやつてくるよ。僕等を助けに來るんだ。」と彼はいつた。

皆が見やると、たしかにその船は一生懸命に山なす大浪を切り拔けてこちらへやつて來る。そしてその瞬間、歡聲が彼等の耳にきこえたので、それに應ずるやうに、皆も各自の疲れ切つた聲を振絞つて、弱々しい答を送つた。

「ね、グレナリン君、あのお祈を神樣がお聞き下さつたのだね。』とラルフは小囁いた。

居てもたつても居られない程の不安の念にかられて、一同は、自分たちを救助しようと、生命を賭して進んでくる、八人の勇敢な人々を乘せた小帆船が、暴風雨と戰つて波の上に打ち上げられ、波の底に打ちおとされ、あちこちへ打ち飛ばされ、揉み叩かれてゐるのを、ぢつと見すゑてゐた。その救助船は九死一生の危險の中を奮闘してゐたのであつて、今一呼吸で、難破船に達しかゝつた時、暗礁に當つてはね返つた激浪が、救助船の横腹目がけて眞正面に打ちかゝり船側に大きな裂目をこしらへたかと思ふと、そこへ海水は無暗と侵入し初めたので、救助船は非常な速さで船尾から沈んで行つた。その時救助船の勇敢な船員等の死の叫び——それはシイメイドの乘組員等が、前に擧げたのよりももつと大きな、もつと甲高い聲だつた——が暫しの間、ヒユー〳〵と唸る疾風や、突進する怒濤の中に物凄く聞えてゐた。

と見る間に、ラルフは水夫たちが止める叫び聲や、ロード・グレナリンの切な願をふりすてゝ綱具からスル〳〵と滑り下りて來た。そこへ皆は避難してゐたのだ。彼の目は、敏くも、一人の人を見つけてゐたのであつた——救助船の乘組員中姿の見えたのは只一人だつた。その人は泳ぎの上手と見え、波の中をあちらこちらへ揉まれながら泳いでゐた。ラルフの耳は敏くも、荒れ狂ふ波の音の中から、この人が救助を呼ぶ微かな叫び聲を聞いたのであつた。甲板に下り立つたとき、波は又

一同の上に打ちかぶつて來たのでラルフは、兩手で索の端を摑まへないわけには行かなかつた。併し、その激浪が引き去つて行くと、すぐ救命の浮子をとつて、それを結びつけてあつた紐を、ナイフで切り放つと、その浮子に繩をつけて、よく狙つてその泳いで居る男に投げつけた。その男はそれにつかまつて、あぶなく一命を取り止めた。ラルフは片腕をマストにまきつけ、あらん限りの力を費して、その男を難破船の船側に引きよせることが出來た。彼は繩に縋つて、素足く上つて來た。

『生命がけでつかまつて下さい！』

大きな波が又かぶさつて來た時に、ラルフは叫んだ。そして波が逃げ去ると、二人は綱具へ登つて行つた。そこには疲れ切り、餓ゑ切つた船員等がつかまつてゐたが、その一團の中に二人が戻つて來たのを見るや、歡聲を擧げた。それは危險と困難とを充分に語るやうな、微かな弱り切つた力ないものであつた。

その新來の客は、彼等に勇氣をつけ又希望をもたらした。その助かつた人に一同が深い感謝を表はし、又突然に、勇敢な同僚を失つたその人の悲痛を、いろ〳〵と慰さめたときに、その人は次のやうな事實を語つて皆に元氣をつけた。その話によれば、シアグラスで救助船の仕度中であつたから、もう一時間か二時間持ちこたへることさへ出來れば、皆は救はれる望みはあるといふのであつ

た。彼は此の話を一同に話し終ると、その時眞心をこめてラルフの手を握りしめていつた。

『全くあなたのお蔭で今は命拾ひしました。神様のお助けのもとに。しつかりしてゐて下さい。吃度私たちは救はれますから。私の妻や子供たちにもお禮をさせます。』

此の難破船の水夫等は、皆疲れ切つて氣を揉んでゐたので、時のたつのがのろ〳〵ともどかしかつた。併し、遂にその闇をすかして、ラルフはもう一度、その墨を流したやうな波の上に、白く光つて進んでくる救助船を見つけた。そこで今は、全ての船員が綱具から下りて船縁に立つて、救助船から投げられる繩をつかまへた。そして難破船の、風下に安全に救助船がはひつた時に、その中に跳び込まふと待ちかまへた。ラルフはグレナリンを兩腕に支へた。といふのが、此の時にはグレナリンは疲れ切つて居たので、殆んど身動きが出來なかつた。で彼は波の高まるのに乘つて、こちらから手のとゞく所まで救助船が寄つて來た途端に、その中にグレナリンを抱き入れた。その時おしあひ、へし合ひ、慌てふためきながら、我先にと救助船へ跳び込んだ。二つの大波は、前後して卷きよせて來て、遠雷のやうな音響をたてゝ、助けられた人、助ける人の上をかぶつて行き、水泡と水煙はあたり一面を埋め、人々は誰も彼も耳を聾にし、心はをの〳〵くのであつた。

一同は暗闇を透かして凝視したけれど、難破船の姿は跡方もなく消え失せて、あの黒い一條の線

を劃してゆらいで立つてゐた。マストももう見えなかつた。たゞ、暗礁のあたりに沸き返る泡が渦を卷いてゐるだけであつた。

『もうすんだ。もうすべきことは何もない。さあ、生命がけで海岸まで漕ぐんだ。殘らず助けたらうねっ』

皆は數へた。もとの十一人の船員は、七人だけ殘つてゐた。

『子供は一人丈かい。』と救助船の船長はいつた。

『おや！　一人しか助からなかつたか。』

先に一人だけ助かつたあの小帆船の船長は、興奮した語調で叫んだ。

『あの沈んだ船には、若い衆が二人乘り込んでゐたんだ。現に横檣索の中では、私は二人のすぐ傍にゐたんだ。あゝ大變だ！　私の生命を助けて呉れた方なんだ、亡くなつたのは。役に立ちさうな若い衆だつたに！　あんな若い衆は見たことがない。——自分が代つて死んでやりたかつたくらゐだ。自分は年をとつて來かゝつたし、もう船も失くし、仲間も殺して仕まつたんだ。あの若い衆はまだほんの子供だつたのに。』

その男は腰を下ろして子供のやうに號泣んだ。けれど物をいつてる時はなかつた。船員等は生命

がけで潜いだ。いまにも水をかぶりさうな危險が絶えずあつた。

一行が海岸に近づくと、待つてゐた大勢の強い人等は、波の中に駈け込んで、船から投げた繩をとつて、安全にボートを引き上げた。歡聲が何度も何度も起つた。——その聲は興奮と喜びに充ちた聲であつた。救助に赴いた立派な水夫たちと、難破船から援けられた人々を、あの英國人でなければ出來ない熱誠こめた歡迎ぶりで、歡迎したのである。

救はれた人々——その外の人々は果して何處にゐるのか？　二人は終日終夜のあの暴風雨に波はれてしまつたので、一同は彼等二人を恐ろしい海の中に死んでしまつたものと思ひ込んでゐた。一人は彼の哀れな、身の自由のきかなくなつた運轉士で、舟が岩にぶちあたつてしまつてから、疲れ切つて、胸が惡くなつて來て、檣頭の横木から水の中に落ちてしまつたのであつた。そして後の一人のラルフ・ダグラスのことは、その蒼白な、併し靜かな顏が下を見てゐるのを、水夫の一人が見たといふ丈で、その他には何も分らなかつた。ボートの中に跳び込まふとしてゐる樣子だつたが、その途端に、波がやつて來たのだ——あの殆んど皆を呑んでしまひかゝつたあの波が。

三十

波の飛沫が屆かない所まで救助船が無事に引き上げられた時に、大勢の氣を揉んでゐた見物人がその舟のまはりにドヤ〳〵と押合つた。そして、その中に立まぢつて氣遣にワナ〳〵と慄へて、ドネリル伯爵、ヘンリイ・アラビイ卿、マーテン、ダグラス氏の四人がゐた。此の四人はその難破船がシイメイドだつたことは、よく知つてゐた。それは外の幾つかの船が、遭難中のシイメイドを見かけて、その側を通りながら、信號で話しかけたのが、報告を齎して來たのであつた。群集は四人に敬意を拂つて道を開けた。といふのが、この四人がどういふ人々であるかといふことや、ドネリル卿が救助船の水夫一同へ、百ポンドの金を分配する約束したことが、豫て知れ渡つてゐたからだ。救助の顚末を聞き、誰が救はれたかを知るまでは、恐ろしい不安があつた。

「グレナリン君だ。」

だしぬけに叫んだ聲をきいて、四人の心は湧き立つやうであつた。聲の主はマーテンであつて、その鋭い眼は覺束ない燈火の中に、グレナリンの顏を眞先に見分けることが出來たのである。

「本當に居るんですか。」伯爵は尋ねた。

『あゝ、居ました。有難い――ハワド！　ハワドで！』

グレナリンは、これまで仍苦闘に疲れ切つて居たが、その聞きなれた聲が耳に入つたときは、全く狐につまゝれた思ひで、その方を見やつた。提灯の光りが、父の立派な顔をまともに照したので、半ばは喜悦と半ばは疑惑とに、ワッと泣き出し乍ら、父の所へ跳んで行き、膝まづき、痙攣的に父につかまり、海岸の濡れた砂利の上に突つぷしてしまつた。

ロード・ドネリルは柔しく彼を起すと、彼を自分の胸に抱きしめた。グレナリンの顔は蒼く窶れて、恐れと餓ゑとに窶れてゐた。そしてびしよ濡れだつたので、父が水夫の一人の手をかりて、グレナリンをすぐ近くのホテルへ、殆んど抱かんばかりに連れ込んだときには、水はグレナリンの頭髪や衣服から、父の腕に傳つて流れた。

マーテンとヘンリイ卿は、ダグラス氏と共に後に居残つた。さうして彼等の眼は、幾回となく救助船を探して見たけれど、見當らぬと知るや、いはうような疑念に打たれて、心が滅入るのを感じた。彼等が探し求める顔はなかつたのだ。

『これつきりですか。』

ヘンリイ卿は心配の語調でたづねた。

『これつきりで御座います。はい、これつきりで御座います。』水夫の一人が帽子に手をかけて、氣の毒さうに答へた。

『難破船に誰かを殘しておいたんですか。』

ダグラス氏は恐れと苦しみとで、殆んど聞きとれない程の聲でたづねた。

『一人も殘つてゐません。御前。』

救はれた水夫の一人はいつた。

『船は皆が救助船へ乘り移つた途端に、粉末塵にやられたんです。』

『そんなら船にゐた者はすつかり助けられたのかね。』ヘンリイ卿は尋ねた。

その男は悲しげに、頭をふつた。

『幾人亡くなりました。』

『大人三人と、子供が一人なんです。』

『その子供の名前を御存知ありませんか。』

『いえ、存じません。つい二日前に乘組んだばかりなのです。』

『あゝ、私の息子だ、私の息子のラルフだ。ラルフは死んだのだ――溺れたのだ！』

ダグラス氏は悲しみの念がこみ上げて來て、兩手を握りしめながら、叫んだのである。

『ラルフは溺れたのだ。あれが家を出たのも私が酷し過ぎたからなんだ。あれは私を憎み乍ら死んで行つたらう。あゝ、可哀さうに、何といふ可哀さうなことをしてしまつたのだ。』

たしかに、この場合、もう望みの與へやうもなく、慰めやうもなかつた。一體どんなことが言へやうか。ラルフ・ダグラスは死んだ！　といふ明かな恐ろしい事實は、殘忍な避けられないものとなつて、此の人の上に落ちかゝつて來たのだ。而も此の人はその子を失ふ迄、愛することを知らなかつた父なのだ。この人の憤りと嚴しさとに耐へかねて、その子は家出をしたのである。さうしてその子は父から宥しの一瞥も受けず、別れの一語も聞かずに永久に引離されて、無情の波に揉まれたゝかれて、『鎭めの歌』も捧げられずに、只慈悲も容赦もない風の、あの氣味惡い……叫びの音ばかりが、たけり狂ふ、渺茫たる海を墓として漂泊らつたのであつた。

さう。そこには言ふべき言葉も、慰めのすべもなかつた。一同はホテルに引きとつて行く途中、同じやうにさうした感に打たれてゐた。グレナリンは、部屋と寢臺が用意される間、ソーファの上に横たはつて、深い眠りに落ちてゐた。ロード・ドネリルの面は、感謝に滿ちて此の上もなく幸福を表はしてゐた。併し彼のその悅びは、ダグラス氏の煩悶のさまを見たとき、他人目にもそれと見えるほどに、憂の雲で蔽はれてしまつて、深い同情を感じたのである。ダグラス氏は暫し、ロード・グレナリンの寢顏を見守つてゐたが、やがてそこを辭し去ると、自分一人の部屋にとぢこもつて、人目を避けたのであつた。彼は、そこでは着のみ着のまゝ、寢床の上にガバと身を倒して、顏を枕にうづめた。眠らうなどとは、思ふだに空恐ろしい氣がした。耐えられないことであつた。ダグラス氏は立ち上ると、闇の中を長い長い間、言葉にあらはせぬ果敢ない思ひに、心まで冷え切つて部屋の中を重い足どりで歩いた。どうして此の事實を、あれ程までわが邸で心配して待つてゐる人等に明かせよう。この知らせを聞けば、クリスティやダグラス夫人はどうして、それに堪え得るだらうか？　彼はかうした思ひに苦しめられたとき、ガックリと膝まづいて、苦悶の祈禱に赤誠こめて魂までも張り詰めつゝ、神よ、ラルフを返し給へ、と祈るのであつた。彼の祈を、かなはぬ祈と笑はば笑へ。死人は生きぬと笑はゞ笑へ。祈りの力で、死者も再び蘇り、かなはぬこともなかつた例もあつたではないか。

次の日、朝早くマーテンは驛まで出かけて、アラビイ夫人に電報をうつた。

The vessel was wrecked, Glenullin is saved, we return to-day.

（フネナンバ　グレナリンブジ　ケフカヘル）

ラルフのことは言ふのをよした。といふのは、その報告がダグラス邸へ傳はつて、大變な騷ぎになるのを、氣づかつたからである。併し、無言は却つて有言だつた。

翌朝、食卓について、皆と顏を合はせたときのダグラス氏は、蒼ざめ面窶れしてゐた。一同は彼を見て驚いた。それは無理もない、彼の面影は變つてしまつてゐたのである。彼は昨日と比べれば十歲も老けて見えた。最初は皆と、一體何故そんなにまで、彼が變つてしまつたのか、合點がいかなかつたが次第にそれは分つて來たのである。前夜はたゞ幾本かの銀の條がダグラス氏の黒髪の中に見られたのであつたに、今は白髪に變つてゐたのを見ては、言ひ知れぬほど驚いた。あの僅か一夜の口にはいへない心の悶が、かうした身體の變化をもたらしたのであつた。

ロード・グレナリンは父の側に、まだ疲れはとれずに、心も恐ろしさに打ち沈んで、腰を下ろして居た。併し、外には別條はなかつた。グレナリンは殆んど口を利かなかつたのである。まだいろいろと話すほどの力はなかつたのである。併し人々が、自分に對する樣子からして、何事もすつかり知れて、何事も赦されたといふことを、自然に感じたのである。さうした考へは、彼のこれまでのあの物憂ひ、恐ろしい日には味はなかつた平和の氣分に戻らせて呉れた。併し彼にダグラス氏の變つた顏を見ると、堪らなくなつて、涙がハラ〳〵と流れた。

ダグラス氏はラルフのことは、直接には聞かなかつたので、今こそ尋ねる時が來たと思つたので男氣をよびおこすと、グレナリンにきいた。

『彼子ですか——ラルフですか——あなたに家を出るように唆かしたのは。』

『大違ひです。そんな風にとつて、ラルフ君を責めるのはひどう御座いますよ。』

グレナリンは眞面目になつて言ひ續けた。

『ラルフ君とは偶然に出會つたんです。僕の家出の考を一生懸命にとまらせようと、忠告をして呉れたんです。』

『有難い。それで安心しました。』とダグラス氏は吐息をついた。

『グレナリン君、君の身體が耐えられるなら、ダグラスさんは詳しく聞きたいんでせう。』

直ぐ隣つて椅子によつてゐたマーテンが私語いた。

グレナリンはその話を極くかいつまんで、簡單に話した。

『若しラルフ君がゐてくれなかつたら……僕は危難を逃れてはゐないでせう。ラルフ君は僕を綱具の中に援け上げてくれ、望みを失ふんぢやないと勵まして呉れました。僕に自分の着てゐた上衣を着せてかばつてくれたり、たつた一片になつたビスケットを、僕と一しよに分けて食べたのです。そ

れから、小帆船の船長の生命を救つてからは、また僕の側に戻つて呉れました。そして僕を綱具のところから下ろして呉れて、甲板を横切ると、僕をボートの中に抱入れてくれたんです。その時僕は氣が遠くなりかゝつて、うつら〳〵してゐたものですから、ラルフ君も自分につゞいてやつて來て、僕の側にゐることと思つてゐたんです。ところが最後の瞬間――』

グレナリンは聲を呑んでしまつて、暫しの間は、續けることが出來なかつた。しばらくして續けた。――

『最後の瞬間、僕は不圖我にかへつて見上げました。すると、ラルフ君の他は、皆、ボートに乘らうと押し合ひ、へし合ひ、大慌てに慌てゝゐたのです。ラルフ君は、僕を助けてから、一歩後へしざつて、他の人等の路を開けてやつたのです。僕はその時、ラルフ君の顏を見ました。ねえ、マーテン君！　本當にその顏付は、平常とちつとも變らないんです。あのいつもの靜かな、辛棒強い微笑が浮んでゐたんです。ところが、ラルフ君が丁度ボートに飛び移らうと待ちかまへてゐたとき、シシシ、ドドン――と凄じい波音が皆の耳に聞えて、僕たちは皆浪に卷きこまれたと思ひました。そしてこれが僕等の最後だと思つてゐたのです。ところが波がうねりを打つて去つて行つて見るとまだ救助船は水に吸ひ込まれもしないし、顚覆もしない。一同は見やつたのです――』

こゝでグレナリンの聲は再び途切れた。そこでダグラス氏は、彼の唇から出てくるその深い呻きを抑へることが出來なかつた。併し彼はその話を續けるやうに、グレナリンに手眞似をした。

『一同が見やつたときに、難破船はもう見えなかつたのです。而してラルフ君の貌は、ボートにも見えなかつたのです。』

グレナリンはおしまひの言葉を、息も止まりさうな聲で、目に涙を流し乍ら、口早にいつた。そして彼は食卓の上に頭をもたせると、もう制し切れなくなつて、愈々泣くのであつた。

伯爵は、悲しみはかうした出口を見つければ、薄らぐものだと思つて、別にそれを止めやうとはしなかつた。而して、その少年の烈しい悲しみが鎭つた時に、伯爵は靜かにグレナリンの手をとつていつた。

『ラルフさんは可哀さうに無くなつたんだね。併し、ハワド、神樣に私たち二人はどんなにも感謝しなければならないよ。神樣は、お前の生命を助けて、私の手にかへして下さつたのだから！』

『ほんとにさうです。そして神樣は、二人のうちでも、罪の深い方の私を助けて下さつたのですね。ラルフ君は別にちつとも惡いことはしてないんですよ。家から飛び出したといふことだけなんですもの。僕は――』

急に父の顔を見上げて、低い聲でいつた。

『お父樣、すつかり御存知ですか。』

『あゝ、すつかり知つてるよ。で若しそれからあとの此の心配や、苦しみが、私の心からそれを忘れさせなかつたなら、私はお前の仕出かしたことを苦にして、墓場に行つてゐたかも知れないんだよ。ねえ、ハワード！　お前の血管の中には、ドネリル家の血が波うつてゐるのだよ。それだのに、僞造をするなんて、——召使風情の奴隷になるなんて、——普通の罪人と同じところまで落ちるなんて。』

グレナリンは父の肩に頭を當てると、苦しみ、悔い、良心に責められて言葉もなかつた。

『ハワド、お前は此の出來事を、將來の戒めにしてくれるだらうね。』

『はい、戒めにします。若し、此の警告をおろそかにするなら、僕はもうこれ以上の惠みを受けるには當りません。さうです。僕はそれを決して忘れはしないと思ひます。あゝ、お分りになりませんでせう。もう今死ぬか、今死ぬかと思つてる時、私の心の中にいろ〳〵のことが、烈しい勢で、無暗と起つてくるのでした。』

『併しハワド、どうしてお前はあんなことをするようになつたのだい。お前はどうしてあんな不面

目を仕出かすやうになつたのだい。』

『分りません。あのことを仕出かす一時間前にでも、お前はかういふことを仕出かすだらう、といはれたならば、私はまさか、といつて信じなかつたでせう。ところが、誘惑は突然に僕の上に襲つて來たのです。例へば野獸が非常な勢で跳びかゝつて來たやうに。そして僕はそれ迄、誘惑に抵抗した經驗が無かつたものだから、僕にはそれに抵抗することが出來なかつたんです。それにかて加へて、いろ〳〵といけないことが湧いて來たのです。いろ〳〵のことがよつて、罪を犯すことになつたんです。それ等のことは、とてもお父樣に話されたものではありません。』

『あゝ、ハワド、子と父との間には信賴がなくつちや不可ないんだ。これからは、お前と私との間には、すつかり愛し合ひ、すつかり信じ合はふではないか。』

『お父樣、僕を宥して下さいましたか。』

『すつかり宥すよ。もう何もかも落着したんだよ。小切手は支拂はれたし、その受取證はとつたしそしてクラークは行つてしまつたのだ。濠洲をさして行つたさうだ。』

グレナリンは救はれた氣持にホッと大きな氣安めの溜息が上つて來た。

『心から神樣に感謝します。それは僕が受けるには當らない位です——もつたいなさ過ぎます。お

父様。僕等は邸に歸るんですか。』

『お前も歸りたいでせう。』

『僕さうしたいと思ひます。暫らくは靜かにしてゐたいんです。家へかへれば、いくらでも落付かれます。お父様、僕はこれからはよい子になつて見せます。』

『今日歸らう。ダグラスさんはお氣の毒だ！　私はわが子と同道で歸るんだのに、ダグラスさんはどんなに悲しく思つてゐられることだらう。私は出來ることなら、どうにかして上げたい。併し、あることからはどうにもならないんだからね。』

シアグラスでしなければならない要件は、もう何もなかつた。救助船の乘組員等は、ロード・ドネリル、ヘンリイ卿、ダグラス氏等から、報酬を受けたばかりでなく、尚此の紳士たちは、シイメイドから救はれた船員たちに不自由のないやうに、充分な金を恵んでおいた。そして小帆船乘組員の家族のもので、夫をなくした妻や、子供等に義捐金が募られた時には、筆頭になつて身分相當に恥しからぬ程度に寄附をした。そこで、今は悲しい聯想をもつたこの場所を發つて行きさへすればよくなつた。

一行はアルトンに向けて汽車に乘つた。伯爵とヘンリイ卿とは、停車場に馬車をもつて迎へに出

るやうにと、前以つて打電してあつた。併しダグラス氏はそれをしてはゐなかつた。どうして唯一人、家に歸ることが出來よう——どうして、彼が使ひとなつた、あの心も打ち慄へさせるやうな報告を明かすことが出來よう——かうしたことは、彼に掩ひかゝつてゐた問題であつたのだが、それを解決することが出來なかつた。

かうしたことを考へてゐる中に、彼は氣がついて見れば、汽車は既にアルトンにはひつてゐたのだ。ヘンリイ卿は自分の馬車に彼をも同乘させた。馬車は是非ダグラス邸の前を通らねばならないのだ。マーテンの馬も又ちやんと停車場まで來てゐた。最後の瞬間——これまでもずうつと考へつめてをり、又口には出さない乍らも、その心では血の涙を呑んで泣いてゐたのであつたが、マーテンは先に駒をすゝませて、ダグラス氏の到着を、邸で待ち受けるやうに、あちらの人々に告げようと申し出たのであつた。

ダグラス氏は力なげに、マーテンの好意を謝し、有難くその申し出に應じて、次のやうにいつた。

『なるべくクリスティに會つて下さい。そしてあれの母親と、この私の爲だから、氣をたしかに持つて、女々しいことのない樣にと、呉々もおつしやつて下さいね。』

一行がアルトンについた時はもう午後になつて居たが、マーテンがダグラス邸の小門に駒をつな

いだのは、まだ日のあるうちだつた。ダグラス氏の留守中は、刻一刻と激しい心配の念が、たかまつてくるのであつた。といふのは、既に突然ではあるが、電報や他の音信が彼等の耳にと〻いて、彼等を何とも分らぬ不安に満たしてゐたのであつた。だから馬の蹄の響が、道路に沿つて憂々と聞えて來たとき、而もそれが門の前で止まつたと見るや、クリスティは、若しや父の歸つたのではないかと、帽子もかむらずに、家から外へかけ出した。そしてクリスティが見やると、それはマーテンであつたので、跳んで行つてマーテンを迎へた。マーテンは彼を見て胸をハツと打たれた。悲しけに色は蒼くて、心配の餘り死にさうな表情が、クリスティの美しい顔に浮んでゐた。その額は今山の端に隱れんとする殘りの陽に照らされて、悲しい聲を立てゝゐる風が、彼の前額のあたりの、髮の毛をなぶつてゐた。

マーテンは馬から下り立つてゐたが、何だかもじ〳〵と立ちつくしてゐた。如何にいへばいゝのだ。彼には事實の儘を話せば、死んでしまふだらうと思はれることを、どうしてその哀れな少年に告げることが出來ようか。彼が無言の儘クリスティの手を握りしめた時に、彼の瞼には涙が湧きおこつて來た。併し何もいはなかつた。その時クリスティは、一切の凶報を蟲が知らすか、それとなく感づいて、たゞ唇を開くと一語丈な小さくつぶやいた。

『兄さんは。』

マーテンは聞えぬふりをした。そして言つた。

『君のお父樣は後からいらつしやるんですよ。僕はね。たゞそれを知らせに、先にかけて來ただけですよ。』

『そして兄さんは。』

『兄さんのことは、君のお父樣から詳しいお話があるでせう。お氣の毒だね。』と彼はいつた。

『兄さんはお父樣と御一しよ。』

吾にもあらずマーテンは彼の頭を打ちふり乍ら泣き出してしまつた。それでクリスティは充分によめた。充分どころではなかつた。それですべてを彼は知つてしまつたのだ。彼はよろ〳〵となつた。長い甲走つた聲を擧げたが、マーテンは倒れかゝる彼の身體を、兩腕にさゝへた。

その叫びで、ダグラス夫人は戸口まで出て來た。彼女はクリスティが、氣も遠くなりかゝつてマーテンの腕に支へられてゐるのを見ると、夫人も亦全てのことを讀んでしまつた。併し、クリスティの樣子は、彼女が今は少しも自制を失つてはならぬ、といふ狀態だつた。やがて車輪の響きは聞えて來た。そしてダグラス氏は這入つて來た。彼女はクリスティに腰を屈けて掩ひかぶさるやうに

し乍ら、興奮劑で顳顬の上をひやしてゐた。併し彼女はいきなり立ち上つて、彼女の身を夫に投げかけて、夫に抱かれて涙にくれ乍ら、口の中で小さくいふのであつた。

『ねえ、あなた。どうしませう。』

三十一

生きてゐる子——クリスティ——に對する種々な世話や、不安な心配や、何うかして助けたいといふ切なる望みや、それからまた一日一日と募つて來る彼の病勢に、冷たい恐れが漸々強くなつて行くのが、その頃のダグラス夫人にとつては却つて幸福だつたのであらう、なぜならさうした心組や苦みの爲にラルフの事を思ひ詰める餘裕を心に與へられなかつたから。實際クリスティは重態であつた。痛心の爲の重態なので何んな名醫とても治されないほどひどく憔悴したのである。

クリスティに取つては、ラルフを無くしての生活は死よりも情ないものであつた。それは絶望の悲みと、堪らない心の空虚——たゞ取り殘された淋しさや相手を失つた悲みのみでは無い、心配してくれるもの、希望を與へてくれるものを失つた悲哀の爲の——に彼を茫然とさした。ラルフは實に幼い頃からクリスティの尊敬の的であつた。誇であつた。歡喜であつた。擁護者であつた。二人はかつて一度も論爭などしなかつた。ラルフはこの少年の只一人の兄であり、保護者である。指導者であり、友であつた。何物にも換へ難い貴い友であつた。彼の生命の源泉そのものであつた。彼の一生の詩であつた。太陽の光であつた。否

元氣を恢復させようと如何に努めても無駄であつた。かうした思出が少しも彼を休めなかつたのである。彼はどうしてもそれを拂ひ退けることが出來なかつた。否、彼は拂ひ退ける意志もなかつた。ましてそれだけの力はもう無かつたのだ。彼は思出に支配された、思出に打負けて何うすることも出來なかつた。寂寞として聲なき夜、眠れぬ間に更けてゆく夜の一刻また一刻、その思出は樣々な形になつて起り、樣々な切れ〴〵の夢となつて現れるのであつた。

父も母も決して枕頭を去らなかつた。ひたすら優しく心をこめた看護つて呉れた。長い時間を彼の枕邊に腰かけてゐて、悲しみ疲れた彼の額を冷し、痩せ衰へた手を與へ、熱にやゝ赤味を帶びた兩頬に微かにでも涙の光が見えれば、やさしく靜に拭き取つて呉れた。だが父も母も知つてゐた。二人には何うしても恐しい事實を自分たちの思ひからかくすことが出來なかつた。それは……クリスティは死ぬのだ——悲みの極死ぬのだ。そしてクリスティ自身が二人の樣に十分それを覺つてゐるのである。

彼が病床に臥してから十日ばかり後の或る夕方の事であつた。

『母さま。』餘りに弱つて立ち上る事さへ出來ぬクリスティは、母を呼び寄せると、兩手で母の首

に抱き付いて言つた。『僕はもう長くは保ちません。僕には死ぬのが分つてゐるのです。お母さま、お母樣には仰ることが出來ますか？　神のみ心のまゝに、と。』

母は心を籠めて抱き締めた。母の熱涙がわが頬に落ちるのをクリスティは感じた。

『でも、お母さま、あなたの樣なクリスチャンがなぜそんなに死ぬ事をお嘆きなさるんでせう？　僕にはそれが分りません。神樣はあの懷しい氣立のいゝ人だつた兄さんの樣に、僕をやつぱり天國へお召しになるんですよ。そしたら天國でお兄さんに會へるでせう。そしていまにお母さまも僕たちのところへいらつしやるでせう。僕は自分が死ぬんですからさう思へばもうお兄さんの死んだのがそんなに悲しくはないんです。お母さま、お母さま、お母さま！　なぜそんなにお泣きなさるんですか？　僕が幸福だからつてお泣きなさるんですか？　ね、お母さま、クリスチャンのくせに死ぬことをなぜそんなにお歎きなさるんです。僕にはそれが分りませんよ。』

『お前に別れるなんて、クリスティ……。これほど悲しい事があるでせうか……。』

『でもお母さま、それぢやお父さまが可哀さうですから、お母さまは我慢して下さるでせうね、え？　出來ない？　僕がゐなくなつたらお父さまはあなたより他に誰もゐて呉るものはないんですもの。お父さまを慰められるのはお母さま、あなた一人です。ねえお母さま、僕の爲に悲んだり氣をもま

ないで下さい。僕はちつとも恐くはないんですよ。もう死ぬんだつて事を知つてからは、兄さんが居なくなつてからにないほど嬉しいんですっ。僕は綠色の牧草の生えた、靜な水の湛へた處へ行くんです。僕はほんとに嬉しいの。でも、お母さま、僕はほんとに不思議な事を考へてゐるんですよ。今日は一日中考へてゐたんですがね。それを話したらお母さまはお笑ひでせうか、それともそれを聞いてお泣きなさるでせうか――？　どつちだか僕には分りませんけれど……。けれど、もうこれを心の中へしまつて置くのは我慢が出來ないんです。メースン先生がもう助からないつて話して下さつた時から自然に、漸々とこんな考が浮んで來てね、始終考へてゐるの。』

『何でせうね？』

『ね、お母さま。』彼はやゝ嚴かなほど眞面目になつて、『死にかゝつてゐる人は生きてゐる人よりも何でも瞭然と見えるんですつてね。それから、ことによると氣が付かないでひとりでに豫言の樣な事も出來るんですつて。僕本で讀んだことがあるの。それでね、お母さま、何だか斯う信じられるの。さういふ氣がするの。僕は今まで何時でも兄さんは死んだものとして話して來てゐるし思つてもゐるんですけれど、また僕自身ももうせいぜい二三日しか保たないと思ふんですけれどね――而もそれは慥に然うだと分つてゐるんですけれど――何だか、やつぱり未だかう思へてならないんです。

兄さんに會へる樣で、此處で會へる樣で……いゝえ、死なないで、生きてゐる兄さんに僕は死ぬ前にこの部屋で會へるやうな氣がしてならないんです。』

『クリスティー』母は堪らなささうに、

『ね、クリスティ、いゝ子だからそんな話は止して頂戴。あなたは心が迷つてるんですよ。私は辛くつて堪りません。血も氷る樣にゾッとします、そんな話を聞くと。ね、クリスティ、あの可愛いラルフが何處にゐるかは知つておいでぢやないの、怖しい海の底にゐるつて事を！』

『お母さま、』クリスティは尙更妙な口調になつて低く小さな聲で囁いた。兄さんの遺骸は未だ見付からないでせう。それに僕は夢の中でも、いろんな幻の中でも、いつも何時も死んだ兄さんに會つた事がないの。僕の耳の傍へ頭を持つて來て頂戴、大きい聲が出ませんから、そしてこれを話してしまつたらまた靜に寢てゐたいと思ふんです、お母さまさへ傍にゐて下されば。さあ、僕の手を握つてゐて下さい、さうして話を聞いて下さい。』

母は彼の上へ半身を覆ひかぶさる樣に曲げた。クリスティは弱々しい、然も美しい聲で――實際その時彼の聲は天使のそれの樣に美しかつた――囁くのであつた。

『お母さま、お母さまは僕達二人ともを失くすることはありませんよ。』

彼女は身も冷えわたる程ゾッとして身慄ひした。

あゝクリスティの心は果して迷つてゐるのであらうか。果して將に死なうとする人の囁語に過ぎないのか？　それとも死ぬ人の眼には瞭然と見える所の或る不可思議な眞理があつて、その眞理の微かな暗示なのであらうか？　彼女の心臟は餘りにひどく心を動かされた爲に頻りに鼓動した。漸くの事でヂッと氣を鎭めると彼女はクリスティの美しい髮を後ろに撫で上げてその額に接吻した。そしてその手を握つたまゝ再び枕もとに添うて腰を下した。——悲みの胸に樣々な物を思ひながら。

三十二

そしてラルフは？

クリスティの言葉は、それが夢であつたにしても、尙それは夢以上の或るものに違ひなかつた。——夢についてはエスキラスの語を借りて言へば、眠つてゐる人の魂は、輝かしいよく見える眼をもつて居るものである。——といふのは、ラルフは現に死んではゐなかつたからである。

あの突きかゝつて來て、全てのものを洗ひ去らなければおかない、何物も手向へないまでの大浪は、その打ちよせる波頭に救助船を跳ねとばし、難波船のありつたけの破片を撒き散してしまつて、不運なシイメイド號の上にドッと襲ひかゝつた。丁度その時はラルフは、ボートに我先にと混み合ひへし合ふ人々に道をよけて、靜かに落ちついて最後まで甲板の上に突つ立つて、いよ〳〵皆の後についてグレナリンの傍へ跳びこまうとしてゐたのである。この恐しい夜の荒れ狂ふ浪風の凄じい音の中にも、ラルフはその浪の進み來る音を際立つて聞き、暗の中に微かに光る波頭を見て、忽ちこれは自分を引つさらつて迚も助らない所へ持ち行くだらうと覺つた。併し生きんとする執着はまだ〳〵強かつたので、一生懸命に心の中で、神の助けを祈りながらラルフは今迄つかまへてゐた船

檣をはなして、水中に潜つた。かうしたのは、彼の足下で張り切つて震へる船材が、グラ〳〵ぐらつき出したので、これでは持ちこたへるのは難しいと思つたからのことである。そして彼は舟の碎けてしまつた材木等に、身體をぶつつけられようものなら、屹度死ぬに違ないといふこともよく知つて居たからである。ところが彼は一流の潜り手だつたから、濁り狂ふ深淵にまで深く躍り込んでしまつて、呼吸をせずにゐられなくなつてから始めて、水面に浮き上つて、我慢のし切れる丈は水底に沈んでゐて、漸く浮上つて見ると、此の時には浪はその狂暴の頂點は過ぎてゐたが、それでもまだ彼を跳ねとばし、突轉ばすだけの力があつたので、ヒューとなる物凄い音と、苦しい湧き立ち返る様な泡との中に、ラルフは喘ぎ、怖やかされ、身も心も全く疲れ果てさせられてしまつた。彼はどの位遠くまでまろばされ、飛ばされたか知らなかつた。併しその大きな波浪が衰へて行つた時に、そこに彼は難破船も見ることが出來なければ、暗礁も見られない、海岸も見えなければ救助船も見えなかつた。そして山なす大浪の中に打ちたゝかれながら、今は泳げるだけ泳いで死ぬより外に取るべき道とて無かつた。これが若し靜穩な海だつたら、ラルフは年が若く、水には強く平氣だつたから幾時間でも持ちこたへることが出來たに違ひなかつた。併しかうした暴風方で、かうした荒れ狂ふ大浪の中では、どうしてもそんな眞似は出來ないことだつた。もう一度あらん限りの聲

を出してラルフは神の救助を求めた。すると又再び彼の祈りは聞きとゞけられたのである。彼が次ににやつて來た大浪に乘つて行つた時に、彼は極く手近に長いものを見出した。それはシイメイドのマストだとすぐ想つた。彼はそれをさして泳ぎ出したが、無事にそれに行きついた。彼は兩手でそれにしがみつくと、それに股がつて身を支へた。

若し彼が黎明までさうして危機をしのぐことが出來たなら、彼は人々に見つけ出されて、救助されるであらう。併し彼の力の方がどん〳〵衰へて行くので、もう死を逃れ得ないことと決めてゐた。

彼の不安の時は極く暫しの間に過ぎなかつた。燈臺を守る三人の男等は、難破船からは程遠からぬ地點にあつて、ボートが用意されてあつた。燈臺は難破船があるのを前から見やつて居り、疾風の絶間には、瀕死の船員等の叫び聲を聞いたのであつた。流石に英國人の常として、彼等はその願を聞き流しては置かれなかつた。三人は命がけの仕事だとは承知でゐながら、一人は燈臺番に殘して置いて二人は白波の中へボートを下した。彼等は漕いで行き乍ら、その近くに黒いマストの漂つてゐるのに目をとめた。そして彼らの一人はそれに水夫がしがみついて居るのが見えたといつた。二人は舟を操つてそれに近づいたが、やがて彼等の勇敢な行の仕甲斐のあつた事を深く〳〵喜んだ。そして溺れかゝつて殆ど意識を失つたラルフを、マストから救ひ上げた。彼の髪は水に濡れて、そ

の前額のあたりにもつれ、顔色は死んだ人の樣に蒼く、衣服は重げに身體にからみついて鹽水を滴らせてゐた。併し彼の身體はまだ溫みがあつたし、それに彼が殆ど氣も心も疲れ果てゝ身體も冷たくなつて、知覺を失つて間もなく死ぬ所であつたが、まだ生命をとりとめる望みが全くなくなつたのではなかつた。

今は一刻も猶豫すべき時ではなかつた。一人が持つて來たブランディをラルフの口の中に注ぎ入れた。そして自分たちの着てゐた溫い上衣にラルフを親切にくるんでやると、オールをとつて全力をつくして、無二無三に漕いで、無事に燈臺へ歸りついたのである。

三人の男たちのうちの一人の妻は、燈臺にゐた。そして死ぬか生きるかの境に立つ人たちの元氣を取り返す爲に、何くれと心遣をして必要な用意をすつかり調へてゐた。ラルフが始めて正氣に返つた時には、變な眼付をして驚いて身を起したが、身のまはりに親切な人々の顏を見ると、またぐつたりと横はつて眼を閉ぢた。燈臺番の女房は物優しく言つた。

『それがよろしい。休みさへすればいゝんですから。』

我が子の事を思ひ出し乍ら、彼女はラルフに優しく夜着をかけて、燈光が少年の眼ぢかに當らない樣に遮つてやり乍ら、少年が次第に長い、深い安らかな眠に入つて行くのを見てゐた。

ラルフは次の日の晩方まで眼を覺まさなかつた。それは長い間ちつとも眠らなかつたからであつた。眼を覺ました時にはその部屋には誰も居なかつた。そして起上ると頑丈づくりな狹い二重窓から外を見やつた。

爽かな響が彼の耳に聞え出した。それは讃美歌を歌つてゐるのであつたが、ラルフはヂッと耳を澄まして聞き入つた。

歌聲がバッタリやんで戸が開いた。そしてラルフは、今這入つて來た婦人に、自然次の樣に問ひかけた。

『此處は何處でせう?』

『こゝはレールロックの燈臺なんですよ。あなたの助かつたのは奇蹟に近いのですから。神樣にお禮を仰つたがようございます。あなたは船頭さんの若い衆ぢやありませんか。』

『僕は船に乘つてからまだ一日二日にしかなりません。』

『とにかくひどい目に逢ひなさいましたね、お氣の毒に。家出をなさつたの? え?』

彼女はかういつて、眼の中に輕くだつたが犯し難い光を含めて彼を見つめた。それ迄はやさしい眼付を彼に向けて居たのであつた。ラルフが答へないので、その女房さんは、

『ねえ、そりや悪い事なんですよ。そして悪いことをすれば屹度難儀が起ります。貴方は福音書の中の、あの兩親を棄てて逃げ出した息子の話をお讀みになつたでせう。さう〳〵、私は貴方を咎める役ぢやなかつたんですね。下りていらつしやいよ。何か食物を上げませうね。さうしたら力がつきませう、まだ大變弱つてらつしやるやうだ。』

此の不思議な家庭にラルフは十日も滯留しなければならなかつた。その間といふものは、ずつと、暴風雨が荒れ續いてゐたから、シアグラスに危險を冒して舟を出すといふ事は、あまりに冒險すぎたことであつた。燈臺守の人等はメソヂスト信者であつて、彼等の生一本な信仰振りと、さうした物淋しいつまらなさうな境遇であり乍ら滿足して居るその樣子は、それを見るラルフに藥となつた。歌を歌つたり、本を讀んで聞かせたり、又出來る丈の手傳などをして、人々の親切に報いたいと心掛けた。心はふさぎ乍ら、強ひて快活な態度を裝つた樣なことも屢々だつた。蟲の知らせか不思議な豫感が彼の心に一ぱい影を落して居たのだつた。彼はグレナリンが何うしてゐるかゞ、無暗と知りたかつた。そして彼の思ひは絕間なく自分の家に向けられて、悲しい憶測をするのであつた。彼はクリステイが今死にかゝつてゐるといふ事はちつとも知らなかつた。そして、父や母は自分を喪はれたものとして心を痛めてゐるといふことをも知らなかつた。

毎日々々ラルフは、自分が向うへ上陸させて貰へるのは未だか未だかと、心配げに尋ねるのであつた。するといつも同じ答が繰り返された。まだ〳〵天氣があんなに荒れてるんだから、そんな眞似をしやうものなら、屹度あたら生命を、無駄に落してしまふ樣なものだから——と。併し皆はラルフに同情して、これなら常識で考へて安全に決行出來るといふ見込のつき次第、シアグラスに向けて舟を出して上陸させようと約束した。

さうかうする間に、ラルフが氣を揉み、待ち兼ねた有樣を見ては——彼が救はれてから一週間以上にわたつて——皆もいろ〳〵と何うすればよいかと思案した擧句、これ迄に一二度成功した方法によつて、向うの海岸に通信しようと思ひ立つた。それは潮が退き始めるのを待つて通知したい事柄を書いた紙片を入れて、外から密封した壜を、その引いてゆく潮の中へ投げこむのである。

ラルフはペンを取つた。

『一人の少年はシーメイド號から救助されて、今レールロック燈臺にゐます。で、もし救助船が出る樣な事があつたら、その少年を陸につれ歸つて頂きたいのです。どうかこれを港務長に屆けて下さい。』

彼等はその壜を海の中へ投げこんだ。ラルフは暫の間それが浪の上をポカリ〳〵と浮いては沈

み沈んでは浮いて、まるで躍る様にして流されてゆくのを見守つてゐた。

その夜、その壜は向うの海岸に投げ上げられて破れてゐた。次の日漁師の子がそれを拾ひ上げて見たが、やがてその手紙を宛てられた所へ持つて行つた。港務長は、シイメイドの難破については、ロード・ドネリルが非常に力を入れられたことを知つて居たので、その手紙を郵便で伯爵の許に届けた。グレナリンはその手紙が着いた時に、友と一しよにゐたのだが、父は驚きと感謝に思はず聲を上げた。グレナリンも自分の手にそれを取つて讀んだ時に、狂はんばかりに喜んで、それを持つてすぐ、ダグラス邸に行くといひ出した。行く途中、彼はマーテンを訪ねて、その嬉しい知らせをヘンリー卿の家族の人々に傳へた。マーテンはグレナリンと一しよになつて、馬に乗つて全速力でダグラス邸に向つた。

ダグラス氏の、あの切なる祈りに、驗が現れたのだと聞くと、有難いやら嬉しいやらで、ダグラス氏の心臟は跳び上つた。ダグラス氏はこれ迄、望が全くないと知り乍ら、度々神に、あの熱誠こめた祈りを捧げたのである。ダグラス氏は物靜かにその事を夫人に話した。夫人は自分の膝の上に突伏して、おろ〳〵聲で、惱みの只中にかゝる偉大な慈悲の光が恵まれた事を、神に感謝したのである。夫人は非常に晴やかな心になつて、クリスティの枕邊に戻つて來た。併しクリスティは衰弱

し切つて、その生命は、一筋の糸で釣り下げられた程の危さであつたから、突然「驚せば、不意の嬉しさに息が絶えるのを氣遣つて、すぐには言ひ出さなかつた。併し次第に、ゆつくりゆつくりと輕い暗示や、今迄よりは明るい顔色を見せたり、クリスティの口から出た豫言らしい言葉を引張つて來たりしてゐるうちは、その嬉しい知らせを、彼の心に分らせて行くのであつた。併しその結果は、彼女が心配した通であつた。可哀さうにその少年の心は、烈しい悦びを感じて胸騒ぎがしたのでその昂奮は、病をぶりかへして、危篤に陷らせてしまつた。そして皆は、クリスティが一同から全く離れて、見も知らぬ國に旅立つのかと、思ふ事が幾度もあつた。

マーテンの心は憐れなラルフ兄弟を思へば悲しさで一ぱいになるので、父に向つて、一しよにすぐシアグラスに出かけて、ラルフを伴れ歸らうといひ出した。サー・ヘンリイは、マーテンが只一人で出かけた方が萬事都合がよいと考へたので、翌朝マーテン一人で立つことになつた。

彼が向うへ着いたのは、夜も晩くなつてゐた。併し、翌朝早く出かけて、燈臺につく事が出來るかどうかを尋ねて見た。すると かういふ事が分つた。彼が此處へ來たのは既に遲かつたのだ。その前日、レールロックから始めてボートを出すことが出來て、ラルフをのせて送つて來たのであつた。ラルフの乘つた汽車と、マーテンの乘つた汽車とは、路ですれ違つたのに違ひなかつた。マーテン

は、それでラルフの漂泊の旅も終を告げたのだと、本當に信じたので、すぐ家に向けて立つた。

ラルフは夜晩くなつてアルトンに着いた。そして自分が見知られやうが、見知られまいが、そんな事は一向構はないで、町の或る旅館に宿つた。併し翌朝になれば、またどんなにか心を動亂させなければならないだらうかと思へば、迚も眠ることが出來ないので、その長々しい夜を、ラルフは落ちつかない思ひに、頻に寢返をして苦しんだのである。

三十三

翌朝彼は食堂で朝食を濟ました。そして氣が付くと給仕たちもそのホテルへ訪ねて來る人々も彼をぢろ〳〵と見つめてゐた。そんな事には平氣でゐたが、食事を終りかゝつてゐた時に酒場の處で話してゐる聲を洩れ聞いた時には、無關心ではゐられなかつた。

『あの若いのがラルフ・ダグラスさんぢやないかね？』

と一人の紳士が旅館の主人に聞いてゐるのを彼は耳にしたのである。

『成程素敵によく似てますなあ旦那。私や彼の人と一ぺん此の土地でクリッケットの試合のあつた時見ましたがな、ですがこりや違ひますよ。なぜつて旦那、ラルフさんは船が難破して溺れ死んぢまいましたからね。』

『何でも家を逃げ出したんだつてぢやないか？』

『へい、あれからといふもの、家では隨分お氣の毒な程心配なさつてゞさあ。それにこのお方はラルフ・ダグラスさんよりも顏が青くつて元氣がありませんや。』

『あの人には弟があつたつけが、さうだらう？』

へい有りましたよ。ですがたしか弟さんもやつぱりもう死んだと思ひますよ。幾日か前にもうお醫者から見離されたつて話でしたがね、それからこつち死んだつて噂を聞いてますよ。家の人足があすこの村を通つた時に、お葬儀の鐘が鳴つてたつてます。その男の言ふにや何でもダグラス樣の若樣のお葬ひに相違ないつてましたよ。大病で寢てるたんださうだから。」

それ以上ラルフは聞かなかつた。一語一語、彼の胸は葬ひの鐘の音を聞くやうに、否、ナイフで刺られるやうに苦しかつた。彼の顏は全く血の氣を失つた。やがて、一同の眼が自分に注がれてるのに氣がついて異常な努力で我と我が心を抑へ乍ら、宛ら夢見る人の樣にふらふらつと立上り、驚く主人に勘定書はダグラスの家へ送れと言ひ置いて、我が家に向う路を急いだ。

餘りに怖しい話を聞いてから、彼は氣が遠くなつた樣で、歩くといふよりも、よろ〳〵とよろめき乍ら行くのであつた。そして彼の眼に映るものは總て泳いでゐる樣にふら〳〵して見えた。

途中ではたつた一人の男としか逢はなかつた。その男といふのは救貧院の人夫で、可哀さうにびしよ濡れに濡れて茫然としながら、路傍の石を割つてるたのである。ラルフの近づく足音を聞いても、この老人は頭を上げてそれを見る力も殆どなかつた。だがラルフが直ぐ傍へ來て立止り、

『お爺さん、あなたはアールスボロウ養育院から來たの？』

と尋ねた時、やつと、

『はあ、さうだあよ。』

と答へるのであつた。

ダグラスさんの家の事を何か知つてるかい、お爺さん？』

『知つてますだあ。』彼はカチン、カチン、と單調な音をさせて打下すハンマーの手を休めて明ら樣にぢろつと見上げ乍ら言つた。

『一人の息子が逃げ出してなあ――』

ラルフは怖しい想像を描き乍ら聞いた。

『それで、も一人は？』

『も一人は死んだあよ――何でもはあさう聞いただ。』

彼はさういふとまた力なくハンマーを上げて石を懶げに叩いた。そしてもうそれ以上何も言はうとしなかつた。その時ラルフは思はず唇に洩れようとする深い深い呻き聲を殆ど制し切れぬ程であつたが、その儘疲れ切つた足を運ぶのであつた。それつ切り、誰一人にも會はないで彼はアールスボロウの墓地へと辿り着いた。墓地へ入ると、とある木槿へ腰かけて休んだが、次には一つ一つの

墓を心許なささうに細々としらべて行つた。彼が去つてからこの方に增えた新墓は一つ、只一つであつた。それは小さな墓であつた。そしてまだ覆ひの土は新しかつた。その瞬間、彼にはこの土の下に我が弟は眠つてゐるよといふ事を何うしても疑ふ事が出來なかつた。

それから一二時間經つた時、同じ路をマーテン・アラビイはやつて來たのである。彼はシアグラスから出來るだけ、早い汽車に乘つて出發した。同車の一人の農夫の馬車がアルトンの停車場に出迎へに來てゐたが、その農夫はマーテンをそれに載せてお邸までお送り申しませうと言ひ出した。もうラルフは家へ歸つたであらうし、彼が歸ればクリスティも健康を回復するに違ないと思つたマーテンは、晴々した氣持でゐた。彼は雨も風も問題にしなかつた。そして並んでゐる無口な農夫に樂しさうに話しかけたり、いろんな歌を口吟んだりしてゐた。

その馬車がアールスボロウの墓地の傍を通りかかつた時、彼はその農夫に向つて言つた。

「ブラウンさんの子供はもうお葬ひが濟んだんでせうね。」

「はあ、それ、あれがそのお墓ですよ。」

マーテンは指す方を見た。墓がある、だがその傍にゐるのは誰だらう？　彼はその姿を自分の見違ひではないと思ふと、農夫に遽々と送つて呉れた親切を厚く謝し、もう此處からは畑を近路して家

へ歸るからといつた。農夫は彼を降して歸つて行つた。マーテンは木柵を越えてその墓へ近づいて行つた。其處に、見よ、びしよびしよに雨に濡れ乍ら、じめじめした土に突つ伏して半ば顏をかくし、餘りの懊惱に身も世も忘れてマーテンの近づく足音も耳に入らずに泣いてゐるのはラルフ・ダグラスではないか！

「ラルフ君！」

マーテンは事の意外に吃驚して、抱き起し乍ら斯う叫ぶ樣に言つた。

ラルフは驚いてふと顏を上げたが、只ボカンとしてマーテンに摧りと摑まり乍ら、

「おゝ！　マーテン君！　どうぞ君、悉り話して呉れ給へ。」

「悉りつて何を？」

「すつかり話して呉れ給へ、クリスティの死んだ事を。ね、マーテン君！　僕は何と恐しい罰を受けなけりやならないんだ……。僕の罰は餘りに重い。」

「君、一體誰がグリスティさんを死んだなんて言つたの？」

ラルフは墓を指した。

「それはクリスティさんのお墓ぢやないんだよ。それは昨日失なつた或る百姓の子供なんだよ君。」

「でも或る人がクリスティは死んだつて言つたよ。」

「さうがも知れない。だつて村中でそんな噂が擴まつたからね。クリスティさんは實際危くつて、もう醫者にも見離されたんだから無理も無いんだ。だけれど、昨日は未だ變りはなかつた。今日だつてまだ必ず大丈夫だよ。おおラルフ君！　急ぎ給へ！　まだ恐らく君が行つたら助かるかも知れない――誰にだつて受合はれないが、兎に角君、まだもう一度會ふことは出來るよ。」

「君、一しよに來て呉れ給へ。」

ラルフは勇氣も挫けた樣に後ごみして言つた。

「行くともー　門口の處まで行くよ。だがまあ君はびしよ濡れになつて、それに泥だらけぢやないか。近路を通つて僕と來給へ。僕の家の方が君の家より近いから。そして家へ歸る前に僕の着物と着替へさして上げるからね。僕の着物は君に丁度いゝんだ。恥かしい事はないよ何も。すぐ僕の部屋へつれて上げるからね。そしたら誰も君に氣が付かないから。」

彼は押し默つたままおとなしくマーテンについて行つた。間もなく二人はマーテンの家に着いた。其處で彼が濡れた着物を着替へてゐる時に、マーテンは急いで階下へ駈ける樣に降りて行つて、すべてを父に打明けた。だがまだラルフ君に會ふのは待つて下さいと願つた。やがて二人はラルフの家に駈けつけた。いよ〳〵吾が家に近づくと、ラルフはわな〳〵と慄へてマーテンの腕に倚りかゝるのであつた。マーテンは玄關まで一しよに行つたが、其處で凉かしい言葉で彼に元氣をつけてやつて別れ去つた。門番にマーテンが急き込んで尋ねた所によると、クリスティはまだ大丈夫だといふ事であつた。

マーテンが去つてしまふと、ラルフはもぢもぢと入りかねて逡巡てゐて、すぐ家へ入ることは出來なかつた。何うしたら思ひ切つて入る事が出來るであらう？　何十回となく彼は呼鈴を鳴さうと思つて手を上げた。併し、幾度やつてもいざとなると勇氣が消えてしまふのであつた。で、彼は樹立に隱れられて母屋から見えない庭先きの路を往つたり來たりしてゐたが、仕舞には何うしても仕樣のないほど神經は昂奮し激動して來るし、膝がわな〳〵と打慄へて身を支へてゐられなくなつてしまつた。かうして彼はたつぷり一時間は、否それ以上も惡戰々々ためらつてゐたのである。あゝ何時までかうしてゐられやうか。遂に勇氣を出さねばならないと決心した。勇氣の出る樣に神に祈り乍ら、再びドアに近づいた彼は、ベルを窮々しく鳴らすだけの勇氣を漸く振ひ起した。

ベルの音にドアを開けた下男は、彼の姿を見ると仰天してたぢ〳〵と後へさがつた。併しラルフ

はそんな事に頓着してゐる場合でない、走る様にその男の傍を過ぎて眞直に父の書齋へと飛び込んだ。ダグラス氏は臂掛椅子に掛けて只一人でゐた。白髪の頭を手で支へ乍ら、悲しげにぢつとストーブの火を見つめてゐた。

彼は振り向いた。そして驚きと歡びとに思はず聲を上げた。今や激しい情緒は一時に爆發した。次の瞬間、父と子とは互ひに固く固く相抱いてゐた。ラルフは父の襟首のところに顏を伏せてよゝと泣いた。

『お父さま、おゆるし下さい。』

漸くにしてラルフは歔り泣き乍ら口を開いた。

『あゝ、わしをも宥して呉れ、ねえラルフ。わしを知らずにゐたんだ。ほんとに私はお前を苦しめて許りゐた。神樣がお前を返して下さつたのだ。ねえラルフ！　今こそわしはつひこのごろまで何んなにお前を愛してゐたかを知らずにゐたんだ。ほんとに私はお前を苦しめて許りゐた。神樣がお前を返して下さつたのだ。否、すでにすべては改められたのである。ラルフ！　今これからは何事も改めて行かうよ。』

すでに降つた。今降りつゝある。而もなほ降らうとしてゐるのである。あゝ、併しその痛みは遂に癒

さるべき痛みであつた。それに、若し罪もない人々にも亦罰の打撃が降りかゝるやうに見えるとしても、それは實に他からさういふ風に見えるだけで、實際はさうでは無かつた。とはいへ、若しラルフにして家出することなく、父にして早く悔い改めたならば、家はどんなにか平和な幸福なものであつたらう。今この家につき纏はる悲哀などは決して起る憂はなかつたであらう！『ねえラルソ……』父は言つた。二人の頰にはその時頻りに涙が傳はつた。『お前は歸つて來た、來たがお前は暗い悲しい家に歸つて來た。私たちが既に度々死の神の足音を聞いてゐるこの悲しい家へ。ラルフ、氣を落付けてお聞き、あの可愛い弟は、可愛い可愛いクリスティは死にさうなんだよ。メースンさんが、今朝も言ひました、もう恢復の見込はないんだとさ。』

『あゝ！　さ、お父さま、クリスティやお母さまに會はして下さい。』

『それぢや此處においで、ラルフ。お母さまを呼んで來るから。それからクリスティが會つても大丈夫ならば會はせて上げるから。』

夫人は吾が子戀しさに眼を輝かし、兩手を擴げてよろめきながら走つて來た。ラルフを一眼見るといきなり彼の首にひしと纏つて、強く強く、胸へと締めつけた。雨の樣に涙を落し乍ら續け樣に接吻した。二人が漸く聲を出すことが出來たのは暫くたつてからであつた。が、彼女は呟く樣に

ふのであつた。

「かうなるために、わが子は死んで斃り、失くなつてまた歸つた……」

併し乍ら更に胸もつぶるる對面がまだ一つ殘されてゐる。

「何んなにかクリスティに會ひたいだらうね、ラルフさん。」

ラルフが漸くの事で彼女の涙を接吻して駭め去つた時、彼女は言つた。そして靜かに彼を抱いてゐた手を放し乍ら。

「クリスティはね――」

「え、、知つてゐます、みんな。」

彼の聲は微かであつた。

「それぢや私、あちらへ行つてそれとなく言つて置きますからね。あなたは神樣にお祈りして下さい、ね。ラルフさん、クリスティがあなたに會へるのが餘り嬉しくつて、急に惡くなる樣な事の無い樣にね。ことによると元氣が出るかも知れないけれど、兎に角、外に望はないんですからね。」

三十分ほど經つて――ラルフには長い長い時間と思はれたのだが――彼が暖爐の枠に背を向けて倚りかゝつて耳を澄ましてゐた時、父が再びやつて來た。

「ぢあ會つてお呉れ、お前が來たのを知つてるからね。聞いた時は恐しいほど昂奮したが、もうちつと寢て安靜にしてゐる。ねえ、ラルフ！　あれの生命は絲につないでかけてある樣なものだ。わしはこの面會が恐しい。靜に、ねえラルフ。どうか靜に會つてお呉れよ。」

恐る恐る爪立ちしつゝ、ラルフは階段を上つて忍び足に――忍び足に小さな部屋へ近づいて行つた。そこは彼等兄弟にあてられた懷しい室なので、クリスティはそのまゝ何處へも移されなかつたのである。ちつと高まつてくる息を殺して、彼はそつと微かにドアを叩いた。母の聲が聞えた。――『お入り。』激しく矢鱈に昂まる我が胸の動悸を聞き乍ら、音をも立てずにドアの把手を握つた。そして中へ入つた――入つたまゝ動かなかつた。

たゞ一つ寂しい焰が暖爐の石炭の上で明滅して、ゆら〳〵と搖れる外は、宛ら室の中は死の樣な靜けさであつた。枕もとに置いてある覆ひをかけたランプが只一つ、パツと光を四散してゐる外は室は茫と薄暗かつた。見れば其處に白い枕に支へられ乍ら、ランプの光がさつと流れて暗がりの中から浮き出させてゐる所に、そこにクリスティは横になつてゐる。涙にうるんだ、輝いた眼、兄に逢ふ事の期待と昂奮とで生々と熱して光つて赤味を帶びてゐる頬、それに罪のない無邪氣な顏立ちは、病むもの、しかも死に臨んでゐるものにも似ず實に何物も及ばぬほど、この世ならぬ美しさを持

つてゐた。弱々しい、併し透き通るやうな聲で、『兄さん！』と囁く樣に呼んだ時、ラルフの胸は刺されるやうであつた。今は思はず聲を上げて泣かうとする心を辛くも抑へて、ラルフは駈けよりざま、枕近く跪き、激情的に強くかき抱いて弟を壓しつけた。するとクリスティの心臟が自分の心臟に較べて速く速く而も不齊一に鳴り且つは躍つてゐるのが感じられた。そして溢れ出る涙にくれつゝ熱い接吻を兄の頰に押し當てるのを。

ラルフは今までいつもして來た樣に、弟の心を靜めようと試みた。彼は優しく弟の美しい髮を撫でさすり乍ら、途切れ途切れになりつゝも慰めの言葉を與へてやつた。その言葉は弟の耳に入る事だらうと思つたので。疲れ切つたクリスティは、やがて短い併し平和な眠に落ちた。そして眼を覺ました時、ラルフはまだ傍にゐて彼を支へてゐて呉れた。母もゐてくれた。父も居て呉れた。それで枕元でぢつと彼を見つめてゐた。

『兄さん、よく歸つて呉れたのね。』その瞬間、彼は昔の樣な優しい微笑を顏に示して囁いた。『兄さん、ほんとに兄さんが歸つて呉れて僕は何といつて神樣に御禮を申上げたらいゝんだらう！……。もうこれでみんな此處へ揃つたんですね。——お父さまもお母さまも兄さんも、何だか僕も生きてゐたくなつた……』

『おゝ！　僕の爲だから死なないでお呉れ、クリスティ！』

斯ういつたラルフは何を言ふべきかさへ分らなかつた。

『もう駄目なの、兄さん。……僕たちは一生離れないで暮して來ましたね。だけれど、もう今度は別れなければならないの。僕は夢でエス樣が呼んでゐる聲を度々聞いたもの。』

『あゝクリスティ、お前を殺すのは僕なんだ！』

ラルフは苦しみ悶えてすゝり泣いた。

『いゝえ、いゝえ兄さん。どうぞそんな事を言はないで……二度とそんな事か考へないで頂戴。ね兄さん、僕の爲だから。僕は小さい頃にこの子は大人になるまでは生きられないつて言はれたのを兄さんも知つてるでせう。それに、兄さん。僕はほんとに幸福に死んで行くの。ほんとに幸福は、今日からはお父さまは兄さんを可愛がつて下さるし、兄さんもお父樣を大事にしますね。——ね兄さん、お父樣の頭の毛が白くなつたのを見て？——さうしてみんなしてこの哀れなクリスティの事を靜に平和な心持で思ひ出して下さるでせう。そして何時かはまた會ふ時が——みんなして會ふ時が——あるんだから……。』

最後の言葉は暫く間を置いて、苦しげにそろそろと語られた。言ひ終ると、彼の頭はラルフの肩

の上へ靜に沈む樣に落ちて行つた。微かな息が洩れた。嗚呼かうしてクリステイ・ダグラスは兄の手に抱かれたまゝ永遠にこの世を去つてしまつた。

次の日、初めの餘りに深い悲に取り亂れた心が漸く靜まつた時に、父と母とラルフとは變る變る一人づつその室へ入つて來て、其處に靜な死の眠に就いてゐるクリステイを見守るのであつた。

凡そ人が何物かに出會つた時、始めて今までの高慢だつた自己を明瞭と見せつけられ、愚だつた事を、邪だつたことを、考の狹かつた事を心の奥底から發見し、悟り、承認しなければならないほど哀れな、みじめな事が又とあらうか？　而も思ひ切つた男らしい悔い改めへと達するには、苦い痛ましい經驗といふ門を通らねばならないのである。そして今やわがダグラス氏の上にその時は來たのである。それは實にこの二三日の間に彼の心身に與へた恐しい激動を齎したのである。冷え切つて全く硬張つてしまつて其處に横たはつてゐる我が子の——彼があれほど人目も厭はす偏頗な程に愛情を注いでゐた、またあらゆる望みをその子の上に集めて、その華やかなるべき將來を何よりも嬉しく樂み待つてゐたその子の——美しい骸が其の時な教へて呉れたのである。ダグラス氏に此堪へられなかつた。彼は我が子の氷の樣な額から長いこと接吻の唇を放さなかつた。そして遂には床の上に打伏して餘りの悲に身を悶えた。心臟も張り裂けるかと思はれるほど。そして彼は熱誠を籠めて神に祈る事によつてその悲から脫れたが、祈り乍ら彼自身の幻を見た。嚴しさ、不公平さ、慘酷さ、利己主義、尊大——然うしたものをみんな持つた幻を見る事が出來た。狂人はいざ知らず、誰が斯ういふ幻を見て堪へ得ようぞ。だが幻は更にもう一つの光榮を彼に見せた、それは彼の失望を見下してゐる愛と憐みとの姿であつた。救世主キリストの聖く尊い記憶が、苦い悲しい罪の自覺を持つて彼の所へ來たのである。そして罪業深い過去の、暗い暗い眞夜中にゐた彼の上へ憤ひによつて神の赦しを受けられるかも知れぬといふ希望の光を次第々々に明るく投げ出したのである。こゝまで考へた時、彼は身慄ひした。そして、この尊い記憶は決して永久に忘れることはなかつた。その瞬間から彼の缺點だつた自我心は失くなつてしまつた。彼は生れ變つたのだ。「彼の肉體は幼い子の肉體となつて」彼に蘇つたのである。

ラルフも亦、失はれた愛する弟の傍に立つた時、その死せる者の唇から何物かを聞いたのである。弟の死は何を彼に物語つたか——如何なる聲よりも、人の肺腑を刺す沈默を以て、何んな素晴らしい雄辯も及ばぬ程強く强く哀愁をそゝる力を以て——。彼は聞いた、彼がこのたび學び得た教訓を取り逃してはならないといふことを。更にまた、彼が義務の道を進まうとする時、——その道は實に神が彼の進路をそれへ定められた路なのだが、これまでは、屢々艱難といふ獅子を見たのであ

こが、その獅子は皆鎖で縛られてゐて少しも危害を加へられる心配は無かつたのだといふ事を、そしてその獅子を怖れて路を避けた爲に彼は獅子以外のそれよりも、遙に危險な破目に落ちたのだ、比較にならないほど恐しい、何處までも避けることの出來ない危險に。更にまた死んだ弟の唇は語つた、彼は今まで己れ自身の困難をのみ考へて來て、己が何物よりも深く愛する人々が、遙に遙に多くの困難悲嘆に沈むといふ事を全く忘れてゐたのだ。そして何の價値もない無用の、似て非なる考方をしてこの眞理に對して眼をふさいでゐた事を、更にまた彼はかく命ぜられた樣に思つた。——幸福はた〻義務の道を歩いてのみ之を追求せよ、この道を外れて求めてはならぬ。否、それよりも幸福を求めることを止めてた〻義務の道を歩まねばならぬ。己が進まうとする路を定めるには幸福とか不幸とか、歡喜とか悲哀とかに左右されずに、た〻目的に向つて勇敢に、忠實に進め、と。

あゝ斯うしてクリスティの傍で祈り乍ら泣いて泣いて泣いて、兩眼が熱淚で視力を失ひ茫となるまで泣き乍ら、ラルフもまた其處に休息と平和とを見出したのである。

三十四

クリスティが死んでから、殆ど六ケ月は過ぎてしまつた。そして「時」は、その優しい手を、血にまみれた傷手の上にも横へて居た。

或る夏の、ほんとに快い夕に、私等が最初彼等を見かけたと所も同じあの木橋の上に、而も同じ運動着をつけた、マーテン・アラビイと、ラルフ・ダグラス、それからロード・グレナリンとが腰かけてゐるのであつた。三人の少年は、此の前と同じ樣に、アルトンでの試合からの歸りの途中だつた。三人とも此の前に會つた時とちつとも變つてゐない樣に見えた。そして三人ともに非常にうまくなつてゐたので、今度は骨も折らずに勝利を得てしまつた。一年の歲月は音もなく流れ去つて、彼等は殆ど變つたといふ所はなかつた。少し丈が高くなり、大人らしくなるにはなつてゐたけれど、やはりまだ少年に違ひなかつた。併し前よりも元氣で、幸福な顏をしてゐた。併し眼の銳い人なら、此の三人組の若者の二人の面には、これまで深い哀愁の跡があつたといふ事を認めて居たに違ない。

夕陽と、肌に爽かな風と、香高い大氣とに心を惹かれて、今度もその木橋に腰を下して休んだのだ、彼等の伸ばした足は、草や花の中に埋めて。

「此處だつたね、去年の丁度今頃僕等が休んだのも。」

とマーテンがいつた。

只この簡單な言葉が、不思議な記憶を喚び起した。若しも、マーテンの身にも、他の二人の友が感めたと同じ樣な苦しい事件が、此の一年の間に起つてゐたのだとすれば、少くとも彼はさうした言葉を、さう輕く口にする事は出來なかつたらう。彼は言つてしまふ口の下から、すぐに氣がついて惡かつたと思つた。そして三人は三人とも、暫の間は物思ひに沈んで、沈默してゐたのである。

マーテンには、二人の友の不幸を、自分もその中に這入つて感めたといふ以上には、過ぎし一年間を通して、何等の悲劇的な變遷はなかつたのである。

グレナリンの性質は非常な變り方だつた。陽氣で才氣があつた彼は、少年時代に於けるあらゆる誘惑に、容易に引きづりこまれてしまつてゐた。それは彼の少年時代には、周圍の人々から諂はれ甘やかされて來たので、遂に彼は自身の意志以外には意志のあることをしらず、自身の快樂の外には、どんな法則もないのだと思つてしまつてゐたのだ。これが本となつて、あの罪と愚とからくる長い經歷が生れ、その結果は非常な不面目を招いたのである。併しその結果は又彼を救つたのであつた。それはやがて彼自身の墮落腐敗した生活に活眼を開かせた。あるものがどういふ風にかして

分つた。そして長い年月の間、高貴な名望ある生活のうちにあつてさへ、グレナリンは時折、或る時柄に出會つて、彼の少年時代に喰つ附いたあの汚と恥とを、痛ましく想ひ出すことがあつた。グレナリンは、それには殆ど氣がつかないでゐたのだけれど、此の、肉に喰ひ入つた棘こそは、彼にとつては最上の祝福であつた。それは傲れる心を卑下させ、他人の幸福を氣遣はせ、他人の缺點に對して優しくさせた。グレナリンは氣づかなかつたが、彼が人々から尊敬され、愛慕される生活や、行爲をするやうになつた原因は、何よりもあの不幸な汚行であつたのだ。

そして、ラルフも亦、罪は赦されても、その罪が生んだ結果は赦されないといふことを知つた。時には、自身の失策の結果から、自身の一生の誇であり喜であつたところの愛する弟は永久に神の手に奪はれて、最早あの懷しい聲も聞えず、輝かしい顏も見えず、一生の路を步まなければならないことは、餘りに恐しい罰であるやうに思はれた。併しラルフにもまた、過去の苦い水は、藥の力をもつてゐた。ラルフはクリスティといふ、神から最も愛される人間と一緒に住んでゐたのだと思へば、やがて此の意識は、彼にとつては一つの力ある刺戟物となつて、自分の生活を、愛に富んだ純潔な善いものにしたのである。

かうした思ひは、彼等が其處に默つて腰かけてゐた時、各自の心を過ぎるのであつた。丁度その時突然ラルフは、彼の父が彼を迎へにやつて來る姿を認めた。彼はすぐ立ち上つて、二人の友に溫かい情をこめた別れの言葉を送つた。彼は近日のうちには、その父の心からの願で、彼のもとの學校に歸る筈だつた。マーテンはそれより少し後れて、イートンに歸つて行く心でゐた。マーテンはイートンで非常によく出來たので、數年のうちには第一等の奬學金を克ち得る見込があつた。

そしてグレナリンは、あの立派な家庭教師と一緒に、太陸旅行に、すぐ出發する樣になつてゐた。その先生は、やつと近頃賴まれたのであつたが、グレナリンは、早くもその先生に愛敬の念を拂ふやうになつてゐた。

お互に屢々通信し合ふやうにと約束して、三人は『さやうなら』をいつた。その時、ラルフは一二間離れたところに來て居た父の許へ進んで行つた。

マーテンとグレナリンとは、ダグラス氏がわが子を見かけて、幸福さうに微笑むのを見た。そしてまたラルフに向つて試合の首尾は何うだつたかと尋ねるのも二人の耳に入つた。それからダグラス氏は、

『お前私に、手を貸して呉れないか。私は急に年をとつたのでな。』

ラルフは、自分の腕を差出して、父をそれによりかゝらせた。そしてマーテンとグレナリンとは父と子とが一緒に連立つて、夕陽に輝く野を横切り、そして黃色な麥畑を抜けて、邸に向つて歸るのを見守つてゐた。

陽は落ちた。過ぐる一年はかくの如くに經つたのである。神はすべての事象の善と惡とを、『穀物の靜かに實る中には』明かに示したのである。それは、人生の事象はすべて、壁の上に書かれた神の手記である。それによつて吾等は神の意志を讀むことが出來、また、神はどういふ事を善として人に勸め、どういふ事を惡として避けよとすゝめるかを知る。時期を取り失はない前に、神の敎を知ることの出來るものは實に幸福なり、幸福なるかな、その人は、闇の世の樣々の僞の燈に照されて、よく見える僞の美しさに迷はされず、暗黑の彼方遙に、永劫の日の淸める黎明に、早くも嶺を染められた山々を認められるからである。

大正十三年五月廿五日印刷
大正十三年六月三十日發行

【定價二圓五十錢】

版權所有

三家庭

著作者　田中友一

著作者　小櫃貞治

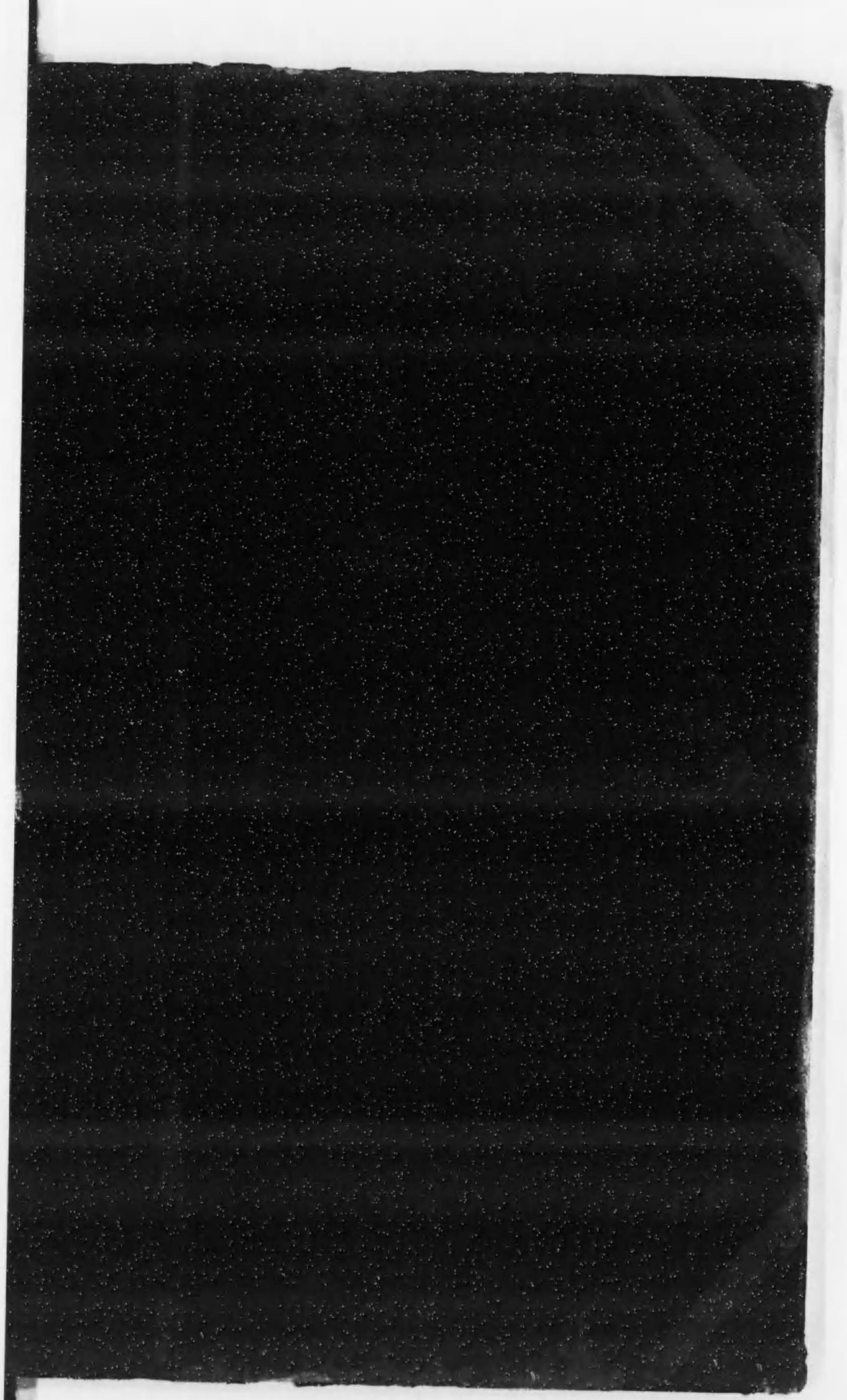
發行者　東京市神田區三崎町二丁目十番地　星島二郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　石塚市郎

發行所　東京市神田區三崎町二丁目十番地　隆文館株式會社

振替東京八五三・電話牛込六五四七

博文館印刷所印行

529
4

終